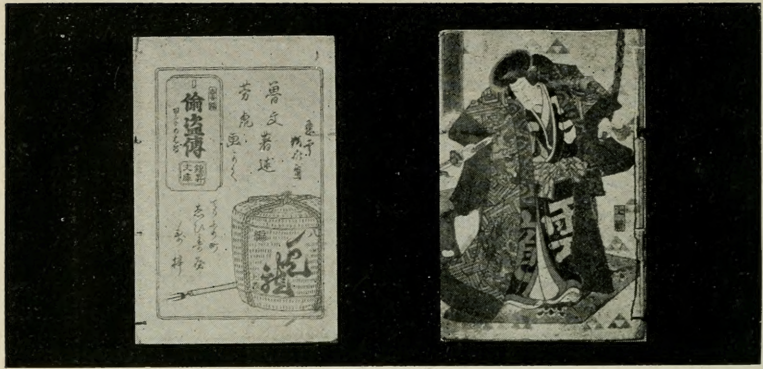
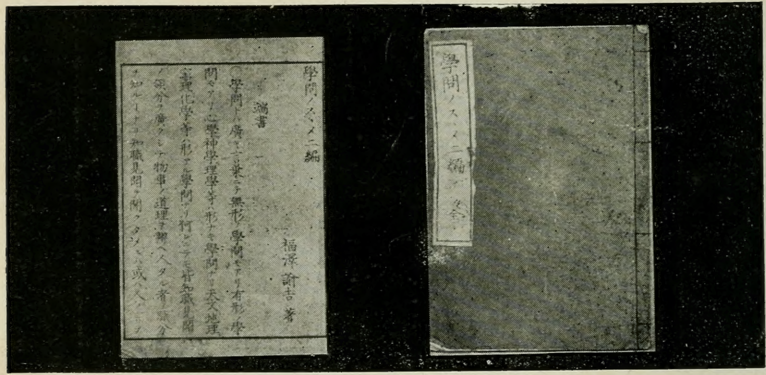
文學士 坂井衡平著

現代國文學講話

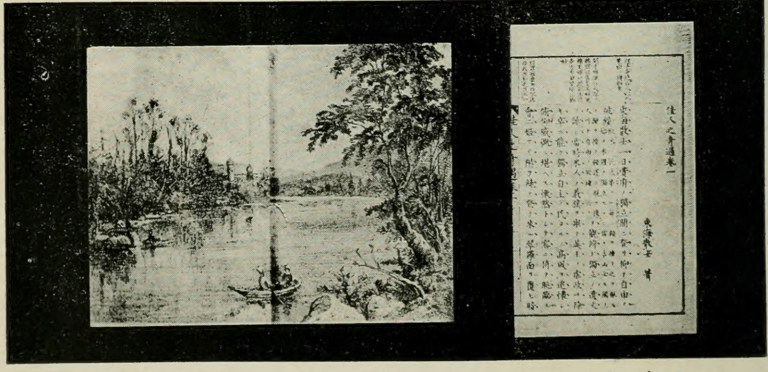
東京 文松堂出版部



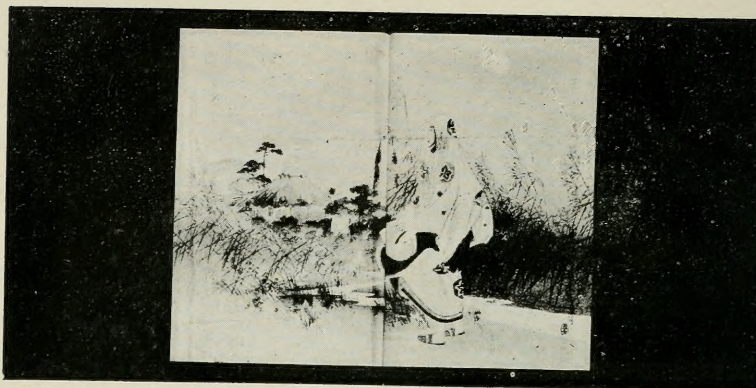
假名垣魯文偸盗傳（表紙と見返し）



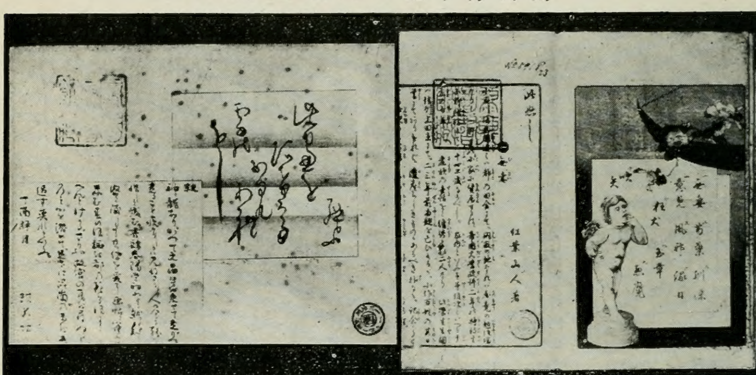
福澤諭吉學問ノスヽメ第二篇（表紙と卷頭）



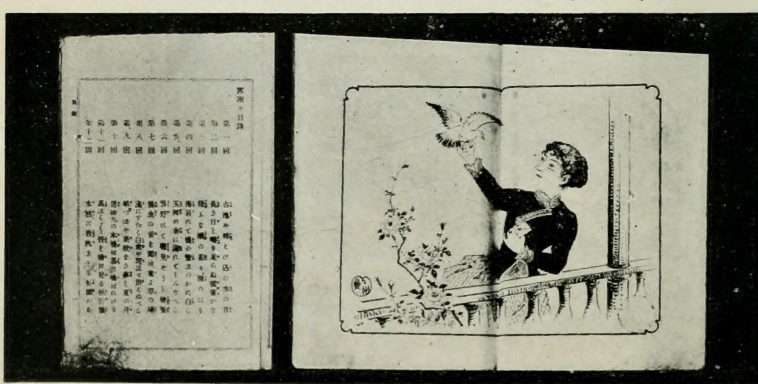
東海散士佳人の奇遇卷一（卷頭さ舟遊の挿繪）



高山樗牛瀧口入道（口繪）



尾崎紅葉此ぬし（見返しと巻頭）とその筆跡



幸田露伴露團々（目録とルビヤ姫の挿繪）

序　言

人生五十と言ふが如く、明治維新以後六七十年の我國は國家的に實に大きな發達を遂げてゐる。文學の發達に於ても同樣である。從つて歷史に現代史が必要になつてゐる樣に、明治大正以後現代の國文學も、今日に於て、追々文學史的方法を以て研究し整備す可き必要が益々加つてゐる。現代文學に對する文學史的方法とは、第一に內容の賞鑑に伴ふ種々の研究である事は言ふ迄も無いが外的に更に二つの要件が有る。其一は過去の國文學との經路位置を定める事、其二は對外關係即ち外來文學や對外影響の問題である。現代文學の研究は常に是等の諸點から看て、以つて其性質價値の認識を正しくし、更に將來の問題にも涉るのである。

序　言

現代國文學を文學史的に取扱ふには、勢ひ縱的にも横的にも主義、流派の文學として看る事が多い。或は社會的階級の文學として看る事もある。是作家の出身讀者の範圍上、其一半は已むを得ない理由がある。併し究極する所文學は純粹文化事業であり、叉國家的現象の精妙なる者である。作家はなる可く這種の環境に無關無心の立場に在つて、其所信を最善の形に迄創作されたい。永遠の生命は其處に宿る。是れ時代の文學に對する第一義の奉仕である。

次には文學の良否の問題がある。現代文學に對しては何人も其良質ならん事を願ふ。文學は畢竟するに忠實なる、人間の記錄である。其價値、內容は人文的か國家的か若くは階級的に豐富なる度に依つて定まる。單に藝術的自由を以て遊閑、氣紛れ、惡風の文學は飽く迄改めなくてはならぬ。二者（人文的國家的內容）の高度の充實こそ最も要求せられる。國家的發展期に當つては文學中

に一層人心を鼓舞し、國家的意義を含んだ者が現はる可きであり進んで國文學の世界文學に對する特色の優越を實現しなくてはならぬ。

本書の後半に收めた『歌謠史上より見たる日本女性』『山陵めぐり』等數篇は必ずしも現代國文學に關しない論考であるが、語源、民俗、古史、有職等について、國文學の趣味を味ふ上の助けともなれば拔いて加へたのである。讀者乞諒せられよ。

昭和十年初春

豊島長崎の寓にて

著者記

現代國文學講話　目次

以　上

現代國文學講話　目次（終）

現代國文學講話

坂井衡平著

小序

現在日本文學の進みつゝある道は、餘程迄世界文學の道程に一致して來た。進動的の自覺も見えてゐる。一面に日本文學の歷史的方面―過去に於ける國文學の綜觀をも失はざらんとしてゐる。史的趣味と新生命の接觸の處に、今後の國文學の新分野が展開せられる。現在日本

小　序

文學の進出と其形體は果して如何であらう。近代文學の其れに比較したならば何の時期に當るであらうか。玆に現代と言ふのは、明治時代以後最近迄の文壇現象を含んでゐる。そして背景たる時代と主なる作家作品についての文學史的討究を主眼とした。史的とは個々の事件の原因、狀態、結果を明かにし、其關係や發達の法則を全般的に究めんとする謂である。其基礎は眞實性 Reality と、理想性(價値) Ideality とに在る。文藝の場合では個々の作品から系統關係、讀者、社會的背景等 Milieu に及び、自然の情態から綜合的、發達的に見ようとするのである。下に主義 Ism や流派 Group school に分けたのも是が爲である。實際には必ずしも派や、主義に依つて動くものではない。歷史的に歸納した結果である。

所謂史的意味に於ては又現代文學に困難がある。卽ち眞實性の方面

では名聲、流行、時代の不淘汰等の爲に客觀性を失ふし、理想性は卽ち藝術觀であるが、此方面からも世俗的利害等の爲に、高下善惡が不純に傾き易い。例へば視覺藝術に自ら一定の適合距離が有つて、目に接して物を辨じ難きが樣である。最近の文藝については此の種の困難の有る事を知らなければならぬ。其程度は明治初期から最近に到つて漸次增大する。但し一方直接賞鑑の方面からは其反對で、最近程興味が大きくなる。併し現代文學を文學史的に討究する事は素より全々不可能ではない。否其必要は日一日に加はりつゝある。之に依つて文學史的整理に資する爲、他の一面からは之に依つて批評的刺戟を與へ、以て文學界全般の進步を增進する爲である。

第一章　明治青年期—樹立時代（明治前期卅五六年迄）

現代文學に於ける三時期

明治以後の我國社會の發達を一つの大きな文化運動の開展と見れば、之を人間の發達に譬へるのが最も適當である。今や明治初年以來實に六十八九年である。人生に於ても六十餘年の生涯には自ら波瀾變化が有り、其間には一定の發達的時期がある樣に、時代の上にも自ら開發の時期が見えてゐる。　現代の國文學の發達は其點から見て、（一）明治青年期—樹立時代、（二）明治中年期—動亂時代、（三）大正昭和新青年期（老年期）—展開時代の三期に分つ事が出來よう。此第一期は卽ち明治前期で、明治卅五六年迄の卅六年間を含み、文學も亦三十歲前後の青年的氣風に充ち、青年的或は素朴的の樣な所がある。第二期は明治四十五年迄の十年

間で即ち明治後期に當つてゐる。期間は短いが自然主義以後の動亂期で、文學も亦中年期の四十年代に當り、謂はゞ中年的男性的であつた。同様にして第三期は大正以後現在までの廿餘年明治文化の六十八九年代に當り、先づ文學の老年期である。併し現在は大正以後昭和の新時代に入つたのであるからして、一面に新青年期と云ふべき所があり、青年的新思想新機運が非常に強く發生して來た。斯樣に現代文化が六十八九年代に當つてゐる所は注意すべき點である。其事は尙終りに說き及ぶ事があるであらう。此青年、中年、老年（新青年）の三期を、文學の發達した方面から名付けたものが即ち、(一)樹立時代、(二)動亂時代(三)展開時代の三時期である。

乃で第一の樹立時代には主なる文學上の流派が四派起つてゐる。是等の流派は無論一時に起つたもので無く、又最初に述べた如くに、各派が初めから意識的に、主義流派を分けて進んだのでは無い。期間の較々長い點から云ふと、其一、其二を樹立時代とし、其三、其四を發達時代などゝ區別しても可いのである。併し前述の如く、現代文學の全體の發達、六十八

九年來の進歩の上から通觀すると、明治卅五六年以前の文學には、通じて青年期の特色が有るのである。

其一 過渡派

明治維新の改革後、最も初期の社會や文化を代表して現はれた文學で、現代文學の源流に屬するものである。然し此流派名が其頃行はれたのではない。此中には江戸時代の文學趣味を其の儘蹈襲したものもあつて、實際から云ふと頗る雜駁な文學を含んでゐる。大革新後の新社會、混雜した道德風俗、新制度が頻りに設けられ、泰西の文明が續々輸入されると云ふ世相の間に於て、先づ前時代の舊文學の一度激しい打擊を受けたのを恢復し、更に新生の趣味を盛つて急造し、其時代が十數年を經て漸く定まり、新文學の芽が萠すに至る迄の文學が即ち過渡派の文學である。無論此中には單に過渡期の短時日のみならず、樹立時代の終りから引續いて動亂期にかけて活動した作家もあるのである。其等を各グループに分けて見ると

次の様な數派が發生してゐる。

（イ）福澤、新島、蘇峯

此三人は明治初年の思想界に於て影響の大きかつた點に優れてゐる。自ら文學者では無く文學方面には新島の外は寧ろ反對の側に在つた人々である。福澤翁は天保五年の生れで中津藩士であるが先祖は信州から出た。大阪堂島中津藩の倉屋敷に生れ、早く長崎にも學び、又洋行して慶應義塾を開いたのは其三年、三十四五歳の時である。英學を採用して凡べて實利實學主義を以て進んだ。其點から儒教主義や國學主義や又極端な歐米の人權論などとも異つた特異の教育論を唱へたので名高かつた。又自由民權獨立自尊を標榜して終生官途に就くを肯んじなかつた。併し國家主義の點は中々確かりした所があつた。初期の作には明治二年七五調の世界國盡や、平易な行文で記した學問のすゝめがある。其他政治經濟教育宗教等に關して頻りに著述した。明治十五年時事新報を創め福翁百話なども名高い。學問のすゝめは小冊

子で明治五年から出たが、無慮七十萬冊も賣行があつた。人間の平等を說き、人の貴賤は只學問に依る。其學問とは文學ではない。何處迄も實學厚生の學術が大切である。併し分限があり才德の別がある。其分により自立獨立して國家を富强にすべしと云ふのである。文章は此書でも他の作でも平易流暢で、精神と一種の氣力がある。其點が時人に喜ばれたのであらう。要するに理想よりも實行の人、實功主義、剛健主義の人である。理論としては往々僻固不通の所がある。左迄深いものでは無いが識見が見えてゐる。宗教は可としてゐるが迷信を打破すべしと說いてゐる。其通俗卑近の所は、恰かも明治の心學者流の口吻があり、教育上の諸篇で說く所も、世事に通じ親切大限の所がある。氏の特色は在來の道德や宗教以外又西洋風以外に、自ら新時代の平民教を說き出した所にある。(明治卅四年歿六十八歲)

　福澤よりも一層極端な說には、中江兆民等の天賦人權說が、早くからルソウの民約論等を紹介して一派の勢力を占めた。又加藤弘之の人權新說には、ダーウインの進化論を採つて保守進歩の政治に應用し、天賦人權說を攻撃した。當時の儒教主義は、前時代以來の傳統力で

相當に有力に行はれ、中村正直の漢學論などに見えてゐる。國學では平田派の神道と共に、西周、西村茂樹の日本國道論などが唱へられた。佛教は明治初年神佛分離運動の結果、排佛毀釋の勢が丁度マホメット教徒の印度に於けるが如き勢で行はれて、一時非常の打撃を受けたが、徐々に又恢復した。

此間新島襄氏は基督教主義で進み同志社を建てた。福澤より少しく後れ(天保十四年生)上州板倉侯の下士で、初め蘭學を學び、後米國に渡り神學を修め、歸朝して明治八年に京都に同志社を設立した。明治十六年大學とし、卅三年四十七歳で歿したが、其の精神界に於ける影響は非常に大きかつた。文學界にも大なる新影響を與へた。此樣に道德界も思想界も非常に動搖して諸說が行はれたので、教育界に於ても實に樣々の論議が行はれた。國教の嚮ふ所を諭し給うた教育勅語の發布されたのは尙此後であつた。

其頃又蘇峰の新日本の青年が出て、一時青年思想界に大きな評判を博した。是は明治十八年熊本の大江義塾で草して廿年に出した。廿四五歳の筆である。時代の懷疑的、無信仰的、

反道德的の風を慨し、誠實自由な平民主義を唱へたもので、從來の復古主義、偏知主義、折衷主義、儒教主義を排し、教育主義を一變する要有りとし、自由教育、自重、同情等西洋の精神主義の輸入を可とし、二十世紀頭の青年は宜しく智識世界の第二革命(維新に對して)を成す可く、老人を大敵とすと云つてゐる。福澤の社會時勢に依りて學問教育も變化すべしと云ふに反對し、學問教育より時勢社會に及ぶべしと說いて、稍理想主義の所がある。面白い事には官立校は西洋風學者を出すべし、私立校は西洋風の精神家を出すべしと云ふなどの奇言もある。併し當時有名であつた割合に文章組織も雜然たるものであり、其思想所論も甚だ雜駁淺薄で、我國家皇道の本旨と遠いものである。其點では福澤の方が遙かに卓越して居り、大旨に當つてゐた。只青年を鼓舞し元氣に充ちてゐた所が、時人の喝采を得たのである。蘇峰は後に民友社に居て、國民叢書に文學漫筆や靜思餘錄を出して又非常に廣く讀まれた。斯う云ふ思想界の趣を見ると、隨分混沌としたものであつたが、當時何故に平田等から出た國學の士で西洋の學識思想を咀嚼した識者が出でなかつたかを怪しむのである。各々自己の狹い範

圍に據り、極端に新說を唱へたのである。これは何と言つても、まだ一般文化教育の發達が十分でなかつた罪に歸しなくてはならぬ。

（ロ）魯文、柳北、櫻痴、默阿彌

過渡派中の守舊派とも云ふべき文士の一團で、當時の文壇を形成した人々である。一般にまだ前時代の戲作者風の所と文人風の所が有つた。魯文は假名垣魯文と號して後本名の如くしたが、實は野崎文藏と云ひ、文政十二年の生れで福澤などより早い。頗る貧家の子で新橋鳥羽屋に丁稚奉公し、草双紙を好んで文人に近づき鳥羽繪小僧と呼ばれた。初め花笠魯介（文京）の門に入り、英魯文と號した。後湯島に住して作者となり鈍亭魯文と云ひ、文久中正本製（しやうほんじたて）の赤本入道假名書繪坊主に似てゐる所から、假名書を姓とした。默阿彌や福地櫻痴と交り、維新前にも安政見聞誌、惡摺評判、滑稽富士詣、偷盜傳、當寫（いきうつし）殿下茶屋、假名讀八犬傳、萬國噺等を著はした。勿論生活はさう善いものではなかつた。明治六年横濱に出て縣の下吏と

なり、假名讀新聞を始め又いろは新聞を起し、十年に東京に住して今日新聞、繪入新聞に從事した。其他西洋膝栗毛、東京顯微鏡、魯文珍報、猫々奇聞等の諸作や雜誌がある。著作は三十七八種に上り、猫々道人と號し、藝妓を猫と呼び猫塚碑など立てた事がある。狂歌狂詩も當時流行したが魯文の作が多い。廿三年に文壇を辭し廿六年に歿した。(六十六歲) 魯文は前時代の草双紙、滑稽的の趣味を新時代に應用した作家である。其筆致は素より高くはないが、圓轉洒脫能く江戶風の滑稽文學に、動搖的の文明時代相を反映させた。

柳北は魯文よりも識見に富み文章に富んでゐた。其出身も幕儒司直の孫筑山の子、天保八年に生れ、名は弘、通稱甲子太郎と呼んだ。柳北の號は柳原の北に住んだからである。將軍の侍講となり英漢學に通じ、食祿も二三千石に上り後外國奉行に任じた。明治後は專ら文人生活に入り、明治七年朝野新聞に末廣鐵腸等と從事して時事を諷刺評論し、又柳橋新誌や花月雜誌を出して滑稽文學に名を馳せた。頗る多能多才で、柳北詩鈔や航微日記、客中漫錄、花の情、歌集に逢の露等がある。翻譯物もある。其頃は向島に住んだ。明治十七年四十八歲

で魯文よりも早歿したのは、丁度新島、福澤の間に似てゐる。魯文を前時代の戯作者風の繼承者と見れば、之は新時代の文人雅客の慨が有る。共にまだ新興の文學を創めたのではないが、影響は甚だ大きかつた。

新聞は當時文壇の一大勢力であつた。其事は拙著國文學通史(下卷)の方にも述べてあるが、出版界のまだ幼稚な當時に於ては、新聞は實に文化思想の燈明臺、文藝界の先頭に在つた。社會の木鐸たる實が今日よりも餘程大きかつた。其起原は江戸時代からぽつ〳〵起つてゐた。所謂讀賣の瓦版、惡摺の評判記、溯つて年々の細見記、錦繪の類もさう云ふ性質で迎へられた。併し新聞の名は元治元年の新聞紙の名が早い。岸田吟香が米人と共に出した。其後明治元年福地の江湖と岸田の東京日々が出で、八年に福地、末松が入つて社説を書いた。新聞に論說の出る初めである。吟香は津山の人早く江戸に出でゝ英漢商法を學び、ヘボンの英和辭書を出版し、後專ら商業界に活躍した。(天保四年生明治三十八年歿七十三歲)東亞同文會にも關係した。日々は栗本が創め、矢野藤田の報知、柳北の朝野、岡本の曙、沼間の横濱毎日と五大新聞と稱せら

れた。明治十年の西南戰爭から十二年頃迄、急に新聞の必要が激增して京濱の間數十種に上つた。讀賣新聞なども古い。外字新聞も明治初年から出てゐた。

此の二人に對して櫻痴や默阿彌は作家として優れてゐた。福地櫻痴は魯文、柳北より稍後輩で天保十二年長崎の醫師の子に生れた。通稱八十吉、夢舍主人と號す。早く蘭學漢學を學び、江戶に出で外國奉行雇となり、洋行もし開國說を唱へて、慶應中、下谷に塾を開いた。維新の時は大阪から引上げて忿懣を江湖新聞に托して入獄した。維新後は學校を起し、新聞記者となり、政治家としても頗る活動し、議員となつた。其多方面に模倣の奇才有る事は、柳北に似て一層優れてゐる。創作も亦極めて多方面で國民之友に寄書し、次の時期にかけて幕府衰亡論、懷往事談、水野閣老、山縣大貳、高島秋帆、鳥居甲斐、天竺德兵衛、哀れ浮世の如き傳記物や、葵御紋、俠客春雨傘、片輪車、春日局、小楠公、東鑑拜賀卷などの戲曲風の作が多かつた。老懺悔の程度の喜劇的滑稽物である。純寫實風よりは、色慾道から起る波瀾の筋の照應を主とした作風である。歌舞伎座の設立に盡した丈け、德川時代の題材につい

て團十郎の藝風に依り、春日局の如き所謂活歴物を始めたものも彼である。依田百川なども當時其方面に評作を試みた。大體政治家と文士とを兼ねた作家であつた。（明治卅九年歿六十六歳）一般の作家は尙眷文風で教養も低く、前代の草紙風に勸善懲惡の趣意を綴る者が多かつた。人情本の春水の後に、爲永春江の春窓娘學校なども行はれた。八犬傳は勿論、白縫娘、小三金五郎等も流行した實況である。

過渡期の劇界の大立物としては專門の作家に默阿彌が在つた。文化十三年日本橋の質屋に生れ、夙く脚本道に入つて鶴屋南北（四世大南北）に學び、市村座作者二世河竹新七を稱へ、後河原崎座に入り、明治後も繼續した。明治元年五十八歳に達した。維新前に宇都谷峠鼠小紋、勸善懲惡覗機關（村井）、白浪五人男の名作が傳へられ、明治後にも怪談月笠森、島衞月白浪など名作が多かつた。其作は團、菊等名優の演出が多く、作者に名人の評が有つた。作風は時期に依つて變遷があるが、大體に於て時代物より世話物に長じ、翻案の筋が巧みで善く俳優に適當した。卽ち實際的の作家である。中心思想は勸善懲惡を主題とし、盜賊物と俠客物が

得意で、人殺場を必ず設ける。さう云ふ殺伐な情景の間に、人間社會の機微を示すのを主眼とした。未だ趣味の高尚とか、性格の發展とか云ふ域には至らないが、南北時代に比すると荒唐的誇張味を去つて、漸次寫實の自然味に近づいて行つた。藝術的と云ふよりは、通俗の教化や娯樂と云ふ事が主眼であつた。退隱したのは十七年で、三世（竹芝金作明治卅四年歿六十歳）に讓り、明治廿六年に歿した。（七十八歳）終生品行の良い人であつた。

（ハ）鐵腸、東海散士、南翠

前記の守舊派に對して、（イ）の思想家や（ニ）の飜譯小説家と共に、新思想の作風を政治趣味に盛つたものが、即ち鐵腸等の（ハ）政治小説派である。政治小説の流行は明治初年に於て非常なものであつた。新社會の動搖、新文明の急進、官員の勢力の高まるに伴れて、權勢立身の唯一の登龍門たる政治や官界の消息は、時代の青年には最も强烈な注意の對象であつた。政治小説の一時の流行を來したのは之が爲である。鐵腸は末廣重恭と云ひ宇和島の士で、朝

野新聞に入り言論界に雄飛して下獄數回、又民黨の議員ともなつた。（明治廿九年歿四十九歳）其作に雪中梅、花間鶯、落葉のはきよせ、雨前の櫻、廿三年未來之記等がある。孰れも廿年頃の作である。皆廿三年國會開設の準備をする意を寓してゐる。花間鶯は雪中梅の續篇である。言文一致風の會話體を採用し、前者は自傳風に國事に奔走する秀才の入獄談を述べ、後者は政治家の立身談や成功思想を中心としてゐる。其頃の政治小説は多くは四六版の形の繪入本で行はれた。

東海散士は、會津の士柴四郎である。大學南校を出て米國に學び次官、代議士を經て先年歿した。（大正十一年七十一歳）明治十九年佳人之奇遇七卷を著はして、頓に文壇に有名となつた。米國費府、華府の邊をシーンとし、西班牙の將士父子や支那人の義士などゝ頻りに獨立運動自由思想を主張し、米人の非行、歐米の形勢、埃及の獨立戰爭などを敍述してゐる。之は形も菊版和綴で大活字を用ひ、文章も片假名交り乍ら全く漢文風の文體で、詩を引く事も多く遊仙窟に似た所などもある。翌年東洋之佳人の作がある。之は短篇ではあるが清見潟を舞臺と

してゐる。鐵腸の作は寫實的、實際的であり、東海散士の作は文章的、志士的である。小說としては、前者の方が色々の意味で一般の小說に近かつた。

次に須藤南翠も其頃から後期にかけて亦多作の作家である。政治小說家は多くは青年時代一時の作風を示す者が多く、官界に入つたり境遇が變化して、文人を以て終るものは少かつたが、南翠は文人を以て終始した。末廣と同鄕で光暉と云ひ、思軒、知泉と浮世新聞(明治二十年)小說萃錦を出し、又新小說、朝日新聞に入り、大正九年大朝の社會局長で歿した。(六十三歲)其作には新粧の佳人、殺人犯、綠簑談などがある。佳人には當時の新らしい女性が描かれ外人とのダンスの事などが見える。殺人犯には風俗を細密に叙し、次の作には新聞記者や基督敎の事件が出で、地方自治の問題を主眼としてゐる。此作には新らしい風俗畫が入り、又作者の小說論として、人情風俗人心を活寫し、脚色、精神化するものであると說いてゐる。前二者に對すると鐵腸の作風に近く、一層文學的に傾いて來た。後期以後國民文學や新小說に入る樣になつてからは、稍古風な作家として、硯友社派の前驅を成した。其他依田百川、服部撫松等

政治小說家は中々多數に出でたが、多くは其思想、趣味が低級のものに過ぎなかつた。

(二) 龍溪、思軒、勤、鷗外、ゝ山

新思想の紹介の盛んな機運に伴れて、飜譯書が又大分流行した。矢野龍溪(文雄昭和六年歿八十二歲)の經國美談は明治十六年に出で、中村正直の西國立志談(スマイルス自助論)と共に最も青年の間に讀まれた。其批評も盛んに現はれた。プルタークの英雄傳等に依り、希臘時代の英雄史譚を譯したもの、其文は文章體である。かう云ふものは政治小說中の或者と共に、有爲の志氣を鼓舞するには、非常に力が有つたのである。矢野には又廿三年に浮城物語が有る。これは事實的の冒險小說である。

思軒は森田文藏と呼ばれ、岡山興讓館の出身で、慶應義塾に英學を修め、新聞記者から飜譯界に活動した。(明治卅年歿)國民の友、國民文學、國民小說等に關係がある。ユーゴー小品、懷舊、伊太利の四人、九十三年、探偵ユーベル、クラウド、哀史、十五少年等の作が多い。

ホーソンやポーなどの米國物も譯した。其他賴山陽及其時代や和歌論や思軒文鈔等が有る。其文は會話も何も全く文章體で、而かも直譯風に說明句の長い一種奇固の文體である。其が當時精到の譯文と謂はれた。英文學よりも寧ろ重譯物が多かつた樣である。鷗外や逍遙程集注して向はなかつた。

井上勤は此期の通俗譯家として頗る多作を出した。明治十年頃から佛人ジュールヴエルヌの海底紀行や、リツトンの諳動鬼談などを出した。當時冒險小說は科學趣味の新奇な所から飜譯界に頗る流行した。探偵小說も同樣である。ユーゴー、デュマ等フランス物が最も多い。科學知識の幼稚な日本の社會には、その應用に成つた冒險物が非常に流行した丈に、又佛國革命後の話とか露國革命黨の話とか云ふものも、政治小說の流行した丈に、非常に流行つた。是等は隨分早く明治五六年から行はれた。其等に較べると純文學的の小說等は比較的後れて入つた。其にはスコツト、リツトン、ゲエテや、トルストイ、ツルゲネエフ、ドウデー等が漸々と紹介された。スコツトの梅蕾餘薰やドストエフスキーの罪と罰の出たのも、明治十九

年から廿年へ懸けての事である。鷗外、逍遙等も亦此期の中より譯筆に名を知られた。鷗外は津和野の醫家の子、萬延元年の生れ、漢學蘭學より入り獨語を學び、東京醫學校を出て廿年に歸朝した。(三十歲頃)文づかひ、新浦島、洪水、カルデロン、調高矣洋絃一曲等は初期のものである。併し其文壇に交渉の著しかつたのは、次期以後である。

此他頗る早く行はれたのは外山ゝ山、矢田部尚今等のロングフエロー、グレー等の洋詩を新體詩に譯した事で、詩歌丈けに頗る文學的の作が多かつたが、一般にはまだ普及しなかつた。是等は尙調和派の項に詳しく述べよう。又逍遙等は、赤門後早稻田に入つて、沙翁、ジヨンソン、リチヤードソン、デツケンス等を紹介した。其外鹽井雨江のスコツトの湖上の美人も廿七年に出でゝ有名であつた。思想界と創作界と社會の進歩と相俟つて、文學界の新機運の曙光は漸く兆しつゝあつたのである。

其二、新思想派

(イ) 逍　遙

過渡期に胚胎した新らしい文藝思潮は、明治十五六年、十七八年の交から、大分鮮明な運動となつて來た。所謂樹立時代の離陸期に當る。政治界でも廿三年の國會開設を目がけて、社會の世相が物皆動かんとする機勢を示した頃である。且一方では大學を出た新智識の青年が漸く社會的に活動して、蘇峰の所謂新日本の青年と云つた樣な意味で、大いに抱負を伸べようとしかかつた時期に當つてゐたのである。新思想派にも二三の流派が出たが、逍遙の十八年の春出した小說神髓及び五月の書生氣質は、先づ文壇の劃時期的の主張であつた。

神髓の說は概言すれば英國流の文學論を採つて、之を我江戶時代の文學に適用して、更に文壇に新文學の性質を說き示したものである。尤も氏の前にも、外山氏等の新體詩運動で唱へた英文學風の文學論に、平易と思想振起を說いたり、菊地氏の獨逸詩學を採り入れた修辭及華文說に、人心を感動せしむるものと云ふ說がある。神髓の說は二卷より成り、上卷では

文學の本質を論じ、下卷では作法、修辭を述べてゐる。修辭學が其頃一時流行してゐた。本質論では要するに我小說を西洋文學のローマンスの域にあるものとし、之を更に完全なノーヴェルに進むべきを云ひ、其主眼は(一)人情を描き、(二)世態風俗を描くにあるもので、作家は畫家、報知者、傍觀的寫眞者の位置に在り、讀者は心理學者であるとし、其裨益としては、(一)直接には人心即ち文心を樂しませ、(二)間接には人格を高尙にし、勸善懲惡を成し正史を補ひ、文章の模範たるべしとした。又文學の種別としては、勸懲小說 Didactic novel に對して、此新小說を描寫小說 Artistic novel と呼んだ。是即ち今日云ふ廣義の寫實小說 Realistic novel の謂である。修辭論では文體論に雅俗折衷を唱へ、脚色論に悲哀小說、快活小說の別を云ひ、又時代物語の作法などを說いてゐる。

是說は今日から見れば、其用語と云ひ、構造と云ひ、其所說と云ひ一般に幼稚で、神髓論本質論と云ふべき所は餘り無く、一般論のみに過ぎない。併し其長所は理論的よりも寧ろ實際的方面にあつて、殆んど江戸文學への西洋文學論の應用、江戸文學の理論的研究と云ふべ

きものである。殊に一々實例を採り、演劇方面は可成周倒に見てゐる。但し所謂描寫說は、勸懲主義から自由の域に文學を脫離せしめようとしたのは可いが、所說が飜譯的で、一般に表面的機械的に傾いた事や、國文學の範圍を主に江戶文學に採つた事が、平安文學等に對する鑑識を疎略にし、從つて全體的の新文學の所論に物足りない所があるなど、根本的の缺陷があるのは否む譯には行かぬ。併し文壇は其精質と新味に大刺戟を受けて、大きな反響を見た。彼も亦續いて書生氣質に新作風の模型を示した。

此新作に、雅號を春の屋朧と呼んだ。是は半峯評に、理想小說や政治小說と異つた社會小說であり、無主人公小說であると云つた樣に、著しく在來の小說と趣を異にし、全く醫學生など赤門書生の日常生活を描寫したものである。けれども遊女の世界を採つたり、勸懲主義を調和したり、七五調懸詞を用ひ、巡り合、因緣を引き、英語の洒落等を用ひるなど、其世界も手法も著しく新舊混合したもので、未だ其の理論の程度を實際に示すには到らなかつた。彼は廿年の篁村の當世商人氣質は題名は似てゐるが、文は全く昔の氣質物風に止つてゐた。

此後にも妹背鏡(廿年)等二三の作を出したが、格別の新味は無かつた。沙翁研究や新樂劇に向つたのは次期以後である。文學論は神髓以後にも、(一)高田說鐵膓說(花間鶯)(二)南翠說、(緣蓑談)(三)基督敎說(四)女學雜誌說(最上文學即自然描寫說)(五)鷗外說(自然及點化獨逸美學說)、(六)佐藤寛說等が現はれて、廿七八年硯友社の起る頃迄には餘程進步した。文學の自由獨立、詩美世界の價値と云ふ事が、追々明かに認められ出した。これが前時代の舊文學から新文學を生み出した所以で、文學の外部解放——新寫實說から漸く進んで、文學の內部の解放が先づ唱へられたのである。だから文學說の發達上より見ても、新思想派期は其第一期に當つてゐた。

(ロ)二葉亭、鷗外と柵草紙、國民之友

逍遙と對して別箇の立場から、新文學の開拓に向つたものに、二葉亭、鷗外等がある。二葉亭四迷は長谷川辰之助と云ひ、尾藩の士で外國語學校の露語科に入り、後飜譯局や新聞社員となり、四十二年露都から歸國航海中に歿した。(四十八歲)早く露文學を紹介してツルゲネエ

フ、ゴリキー等を譯出し、民友社の國民之友などに寄せた。創作浮雲は廿年から廿二年に渉つて出した。坪内の合著とあるも、彼の新作である。内海文三なる變り者の男を主人公とし未解決の形式である。これは當時の新文學としての傑作である。下級の人間生活を寫實し、技巧も内容も書生氣質より餘程進んで新味がある。當時の小說でも顯微鏡的に人情人生を寫した點で、尤も拔群と謂はれた。逍遙の寫實を外部的とすれば、是は内部的である。寫實から後の所謂心理小說に傾いてゐた。之に續いて國民の友に親心、平民と文學等の譯文物をも揭げてゐる。

其後次期に入つてから、卅九年に其面影を出した。學士哲也を主人公とし、人生苦を扱つてゐるが、此記法は寧ろ舊式であつた。其翌年には平凡を出した。卅九歲の主人公の獨語的自傳回想記である。生活苦と小思想とが見える。其他露文學の譯文が多い。ゴーゴリの昔の人など四十一年作で、晩年の物である。しかし境遇と思想とが動搖してゐた爲か、醇個たる文學味や主張が割合に見えない。作品上の思想も生活も單調で、文學者としてはあまり傑出

してゐない。其生涯何か成さんとした所に、時代の焦燥味を反映してゐる。

鷗外は其後廿二年其面影の譯を國民之友に、廿三四年舞姫を國民文學に文章體で出した。後廿二年から文學評論柵草紙を出し、次いで廿六年に城北新聲社と合して柵草紙とし、頻りに獨逸のハルトマン一派の美學說を唱へて理想批評を試み、劇や繪畫にも向つた。同誌には綠雨、竹二、紅葉、露伴、子規等も揭げたが、廿七年に廢刊した。卅九年には更にめざまし草を出した。之には劇評が盛んであつた。彼の美譯アンデルセンの即興詩人などが之に譯された。新浦島、埋木の作もある。即興詩人の單行本は卅五年に出た。一體鷗外は多くは文章體で、漢字などの使用が難かしく古典的であるが、此譯などは殊に優麗典雅な詩趣を含ませてゐる。非常にローマンチツクな美くしい小說で、結構は思ひ出の記に似てゐるが、流石に一層變化と情緒に富んでゐる。其頃迄に水沫集、月草、影草等や、審美綱領（卅二年）同新說（同）三極致論（卅五年）同假象論等の美學書をも公けにした。多くはハルトマンやフォルケルトの假象論を祖述して、其說、形式的、概念的に傾き、用語も難解不通の弊があつた。併し文壇一

方の論客として、文學思想啓蒙の功は大きかつた。之に對して二葉亭などの國民之友には、民友社の一派が據つたが之は次の派の下に述べよう。

（六）透谷、藤村と文學界

上述の二派は一は英文學、一は獨文學を輸入して新文學を開拓しようとしたのであるが、我古典文學に至つては殆んど顧みる所が無つた。僅かに江戸時代の馬琴、京傳、三馬、一九の輩を品評したに過ぎなかつた。然るに透谷等の新運動は、第一に我古文學の趣味を深く復活しようとし、第二に詩歌殊に新體詩を多く詠じて、詩歌的精神を振起し、第三に今迄除外された宗教趣味を文學の野に融合せしめ、第四に英露文學を我文學に加味咀嚼し、以て新興文學の眞精神を發揮しようとしたものである。前者の學問的靜止的に反して、之は著しく主張的、實行的であつた。一は研究的作家であり、一は熱狂的詩人の一群であつた。年齢なども前者は三十以上の大家が多く、後者は廿歳前後の青年の徒が多かつた。即ち新思想派中の

最も純眞新鋭の文學的靑年の一派である。文學界の出た廿六年には初めて文學會を起し、大學の談話會や早稻田の文學會に對して、透谷、殘花、不知庵、正久、介石、逍遙、紅葉、美妙等が會した。

透谷は北村門太郎と呼ばれ、數奇屋橋の家に因んで號とした。又蟬羽子とも云つた。明治元年に生れ獨學で英語を學び、廿二歲の頃より肺を病んで、思想行爲も激越に趣いたが、廿七年遂に自殺した。其間に江戶文學、詩歌論、人生論、明治文學論、平民思想硏究等を筆した。美文に富嶽の詩神を憶ふが有り、新體詩に行倒、楚囚の詩、歌劇に蓬萊曲、小說に宿魂鏡などがある。廣い學才と智識慾を有し、一面詩美や戀愛に對する强い憧憬心を以て、文學趣味の向上に努力した。其所說や運命の上には、新時代の思想的悲劇の一面が劃然と映じて居る。此透谷が文學界派の先達であつた。

藤村は又此新運動に於て、透谷に次いで努力した一人であるが、明治五年生れで、年配も上の方であつた。文學界の初には古藤庵無聲と云つて、古めかしい散文やドラマ風の新體詩

を載せた。自らも先導を以て任じた樣であるが、當時のものでは稍田舍臭く、透谷其他の新鮮な思想と幾分別趣の觀が有つた。其頃の生活は後年の春に見えてゐる。あの中の青木が透谷に、自分は岸本に當る樣である。小說の方が無論實際より大人びてゐるであらう。藤村の名は廿七年の同誌に見えて、馬上人生を思ふの長詩、二本榎の小說、アンゼロの譯を載せ、翌年に與作の馬等の長詩が見える。是から彼の仙臺時代の若菜集、木曾時代の夏草、一葉舟、小諸時代の落梅集と云ふ樣に、專ら舒情詩の新體詩人生活に入つた。若菜集では六人の處女、秋の思などが佳い。深林の逍遙、天馬等の題材は餘り適してゐなかつた。近松物に似た四つの袖などが稍美くしい。但し近松や西鶴とは別種の情趣である。其調は七五の柔い調子である。此頃の彼の詩は小情緒、小自然に、古風の叙事法を交へたもので、謂はゞ小乘的の叙情詩が多い。夏草では晩春の別離が佳作である。月光は長律詩形、白磁花瓶歌も特色がある。又農夫や戰爭を歌ふなど稍多方面に向つた。落梅集では調も七五調になり、小諸なる古城の畔りの懷古詩、爐邊の樣な散文の即興詩、思より思を辿りの樣な心境詩など、其內容形式共

に餘程複雜に進んだ。靜な美詩から段々動く現實の詩歌に向つた。此傾向が更に一轉して、散文界に入つたのであらう。

新體詩時代の彼、詩人としての彼は、其觀照の方法も、韻律の形式も、通じて單調の詩人と云ふ事が出來る。自己の天性に出でた靜的な詩情に、一面には和歌的の、一面には近松風の人情味を加へて、優美に詠出するのみである。即ち多感的の抒情詩である。大なる苦悶や野心や異常を歌はぬ詩人、思想、ウイツト、ユーモアの乏しい詩人である。換言すれば極して女性的詩人であつた。其頃丁度晩翠が男性的の詩を以て迎へられたのもこれが爲であらう。だから詩人生活以後の彼は、新思想派と云ふより寧ろ調和派に屬するのである。兎に角此樣にして、藤村が詩歌の大なる森林、眞劍の曠野に入らずして、散文界に向つたのは、新文學の爲に惜しむべきであつた。

此等の詩人の據つた文學界は其前身女學雜誌で、明治女學校の岩本善治及夫人（嘉志子若松賤子）が經營し、後廿六年に女學生を合一して獨立し文學界となつた。初號には岩本氏の文章の道、

透谷の富嶽の詩神を憶ふ、禿木の兼好論、天知の阿佛尼評があり、其他戸川楼月、夕軒、紫苑、古藤庵や、作家に孤蝶、洒竹、醒雪、柳村、寧齋、殘花、綠雨、不知庵、湖處子、硯友社の一派等有り、歌人の井上、大和田、女流には賤子の外、花圃、中島、一葉等がある。一葉の大晦日、たけくらべ等も此雜誌に出でた。湖處子の歸省（廿三年）は、思ひ出の記の前身の樣な作である。飜譯ではエリオット、沙翁、グレー及びウォーヅワース、トルストイなどが見える。俳句や淨瑠璃史（星川寺山）なども掲げ、又同志社文學、眞理等の宗教界の消息評論も屢々出でた。賤子女史は英文學に長じ、小公子、忘れがたみ等の著がある。其廢刊したのは三十年頃であつた。

其三　硯友社派

（イ）紅葉、露伴

硯友社派は過渡派に次ぐ者として、新思想派と雙生兒の關係にあつた。而かも文壇の大勢は寧ろ此方に在つたのである。後者が精到な研究力と、高潮した詩的精神を以て躍進したに對して、是は主として自由奔放な散文的創作の態度を以て、文壇の新機運を建造した。一は大學及び私學の門に流れ出し、一は僅かに大學派に出たとは云へ、其多くは自由生活に憧れた文人一派の手に成つた新文學である。

此派の起原は書生氣質などの出た後三年、浮雲の出た後一年なる明治廿一年（一八八八年）である。當時大學豫備門にゐた紅葉、眉山、美妙、思案や、稱好齋の水蔭、小波、柳浪等が寄つて硯友社を作り雜誌を回覽し、後博文館から我樂多文庫として刊行した。後に露伴も獨學出身で此派に參加した。皆青年の新進作家である。前述の樣に國民之友や日本主義、新著百種、百萬塔、東洋學藝雜誌、しがらみ草紙等が頻りに起つた際で、文學の批評研究の方面には、幾多の先進が出たが、實際の創作界には逍遙、櫻痴等を除いては、尙幾何も新人材が出でなかつた。逍遙の作にも見える樣に、理論では堂々と論じても、其作風は多くは滔々として前

代の草雙紙趣味を脫しない趣であつた。さう云ふ間に全く素人の新進作家が出でて、新文壇を開拓しようとしたのである。硯友社派の作家の實際は尙全く舊套を脫せずして、調和的の色彩が多いのであるが、彼等が自ら新文壇、新紀元を築かうとした所が、矢張り新文學團の一派と見る事が出來よう。

紅葉は此派の先進で、又現代文學中での天才と謂ふ可きである。芝區の江戶子で、慶應三年の生れ、廿一年後法科に入り、又國文科にも入つたが退學した。少時から江戶文學殊に西鶴文に私淑し、文章を練る事に長じた。俳句も秋聲會を立てゝ十千萬堂と號した。三十六年胃癌で歿したのは、まだ漸く卅七歲の壯年時代であつた。其作には初期の心の闇、伽羅枕、此ぬし、三人妻、色懺悔や七十二文命の安賣、拈華微笑、夏小袖、多情多恨が有り、卅三年から讀賣紙上に金色夜叉を續けた。伽羅枕など名高い作が多く、全集には五十餘篇有り、比較的に世話物が多かつた。西鶴の浮世草紙に近い手法である。透谷は露伴の新葉末葉と比較して一は實の文學、一は想の文學であると評した。國民之友にも心の闇を評してゐる。實とは

社會相を實寫的に寫す意であらう。之に對して想とは思想的、理想的なのを言ふ。夏小袖は喜劇風で會話に巧である。西鶴風の筆致は、紅葉などはまだ可として、動もすれば文章の末に流れて、コンヴェンショナルの描寫、構想に陷り、往々小兒の老成振りの觀があつた。神髓の說にノヴェルでない、ローマンスであると云つた傾が、やゝまだ見えてゐる。

併し今色夜叉六篇は其構想氣局頗る複雜で、實人生の描寫に迫る所がある。國民之友の合評には、多數の人物の時局複雜を指摘してゐる。二葉亭の浮雲に顯微鏡的人生描寫があるならば、之は鏤金的人生の曲奏があると云つて可しい。性格描寫も漸く深刻に趣いた。此の派中、柳浪などは女性を描き、露伴、水蔭等は男性を主人公としたが、彼は男女兩性を描寫した。寫實の技巧も非常に精緻である。書生氣質や浮雲よりは餘程進步してゐる。其社會的背景も頗る廣い範圍に採られてゐる。先づ國民的の大小說が成つた譯である。其點に於ては今色夜叉には不朽の意義があつたのである。尤も其文學的內容の方法に於ては、紅葉に到つても、必ずしも高遠なものではなかつた。此篇の如きも戀、金、運命、友情、事業、性格等の諸

要素、換言すれば人間社會及び運命の交錯を骨子としたもので、要するに精神と物質兩世界の葛籐を中心にしてゐるのであるが、其質は尙平凡なる小我相を離れない所がある。過去の文藝より上ること一歩にして、未だ五歩、十歩を出でなかつたと謂ふ可きである。

　露伴も武州の人、紅葉と同年で中學を半途にして出で、獨學で創作に從事した。一日物語、髯男、露團々、川舟、緣外緣、椀久物語、新浦島、自縄自縛、七變化や、傳記的の二宮尊德、日蓮上人等六十餘種がある。緣外緣の如きは矢張り西鶴物に摸してゐる。佛敎的の二日物語、風流遊微塵藏、對髑髏、風流佛などが有名である。就中五重塔が傑作である。谷中の塔の木匠十兵衛を主人公として、巧みに藝術の魂の人生に努力する有様を叙してゐる。其趣はハウプトマンの沈鐘の鑄物師ハインリツヒに髣髴たるものがある。ハウプトマンの方が一層象徴的劇的である丈けである。彼は前にも述べた如く、主として男性の、殊にやゝ特異的の性格を描いた。當時から理想派、想念派と云はれた如くに、硯友社の作風に幾分別趣の文學であつた。現實人情の寫實以上、人生の根柢の相に悟入し、性格理想の活躍を描破しようとし

た。一を世間派と云へば、一は出世間派である。其丈け人生の眞相を深く示さうとしたのである。紅葉の文學を友染か錦の美に比するならば、彼のは黑の鈍子か黑紋附の文學である。頗る幽玄と哲理に富んでゐた。紅露の名が矢張二家の對照を示してゐる。露伴が作家を以て、究極の發達を遂げなかつたのは惜しい事であつた。

（ロ）美　妙

美妙も亦硯友社と分離した才人作家である。紅露より一年少く、元年生れで、南部の產である。豫備門で退學し硯友社を創めたが、金港堂の夏木立、都の花に入つて分離して競爭した。夏木立には短篇六篇を收め、都の花には花車の題に、ます、です詞の言文一致體を主張した。其文致はさして優れては居なかつた。國民文學に揭げた胡蝶は名高かつたが、源平戰を脚色した時代物であつた。關西の浪花がたには苺姬の長編を載せた。其他膽試し、新太平記、猿面冠者、敎師三昧、可憐狂等がある。猿面冠者は獨語的滑稽物である。其他明治文庫

にみゝづばれ、田舍聖者等を出し、春夏秋冬に光源氏がある。
美妙は晩年大辭書の編纂に從事したが不遇の間に歿した。（明治四十三年歿四十三歳）紅葉より六年後である。其作風は時代物が多く、劇的趣味豊かで、稍批評的の記法を交へて一種の癖があつた。其言文一致に於けるの功蹟は沒し難いものであるが、彼のは文章體との調和を主張したもので、實は彼よりも自由の文體に進んだ者が、以前から有つたのである。才子多才に任せて稍放縱であつた爲、其大を成さなかつたのは惜む可き事であつた。

（八）一　葉

硯友社派には以上の外、深刻小說、悲慘小說と呼ばれた柳浪、眉山、ロマンチックの水蔭、樂天的の小波、神祕趣味の鏡花などがあるが、天才的の女流作家には樋口一葉が出でた。獨學の經歷で、名は夏子と云ひ、中島歌子、半井桃水、紅葉の門に入つた。廿歳頃から創作し前述の如く文學界に大晦日、たけくらべ等を出して早く名聲を揚げた。めざまし草で彼女の

濁江と水蔭の女房殺とを批評してゐる。行雲、別れ道、十三夜、たけくらべ、裏紫（短篇）等を後に出した。近松風の文章體で能文であるがやゝ技巧に著し過ぎて口調を整へた。濁江、たけくらべが傑作と云はれてゐる。孰れも暗黒面の女性や少年少女の心理を描いてゐる。女性的の細かい筆致が見えるが、其題材は戀愛の波瀾を主とする物が多く稍々狹小であつた。紅葉に似てスケールが小さい。性格よりも世相を消極的に眺める樣な筆致である。杜鵑、そゞろ言等の小品には淸少納言を惜しむ所もあるが、放膽の才筆は及ばず寧ろ篤實の方である。紫式部型であらう。彼女が敎養が高かつたら、眞淵門の才媛や、荒木田麗女に劣らぬ諸作を示したであらう。併し僅々廿代四五年の作に兎にも角にも女性的の特色を示した散文作家として彼女が出た事は、新時代の文學に取つて一つの異彩と云はなければならぬ。夭折の點から相前後した透谷と對比するに、彼は動的是は靜的、一は詩的に一は散文的、一は時代精神の第一戰に立ち、一は後方部隊での傍觀者の觀がある。新女性として必ずしも活躍したのではない。さう云ふ所がやがて文學界等の新思想派と、硯友社一派の作家との色調の相違點であつ

たのである。

其四　調和派

（イ）大學派

以上の諸派の運動を經て、比較的樹立時代の終期に活動した諸派を、調和派の目に纏めて見よう。調和派とは外來或は內發の新思想と、在來の古典的趣味思想とを調和しようとした一派である。其一は大學の赤門派を中心として行はれた種々の文學運動である。是も便宜上の名に過ぎず、實際は反對のものもあらう。此の中には（一）新體詩鈔運動（二）新詩人運動（三）日本文學運動（四）評論運動等が含まれてゐた。其の年時から云つて早いのは（一）新體詩鈔運動である。明治十四五年に大學教授の外山丶山、矢田部尙今等が十九首の新作を公にしたのが其初である。中十二首は譯詞で、ロングフエローの人生詩、グレーの墓上吟、テニソンの輕

騎隊進軍の歌等がある。かく七五の詩形で平易な用語を用ひ、在來の國歌に比して著しく人生味、思想味を加へた。譯詩風に接近したのである。韻を用ひたものもある。其文學論として は第一平易なる事、第二思想を振起し、第三敍事詩を盛んに試み、第四教訓的、宗教的の內容を大いに詠ずべきを信條とした。是運動は卽ち詩歌の人生に於ける實用を試み、其價値、內容を高めようとしたのである。中には外山の拔刀隊の如く、軍隊調のものもある。此派は學究の徒であり、ことに專門の文學科の方面の人々でもなかつたから、事實は左迄文學的に普及したり、反動を呼び起すといふ迄には至らなかつたけれども、實際歷史的に、新文學の思想を輸入鼓吹した點では、餘程早い方であつた。逍遙の神髓などよりは、四五年も前の事である。

同年小學唱歌等の編まれた事も注意すべきことで、これは又最も雅樂風の調子である。新體詩は此後各方面に非常に起つた。美妙等の新體詩選、明治新體歌選、落合の孝女白菊歌、文庫、國民の友等の刊行が廿年前後頻りに出でて、第二の隆盛時代を作つた。美妙には又日本韻文論等の著があつて、新聞紙にも載せられた。鹽井雨江のスコツトの譯詩、湖上の美人は

廿七年に出でた。翌年には又大學の外山等が新體詩歌集を出した。其序論に當時の新體詩を（1）今様太平記風（2）新體詩鈔風（軍歌風）の二大別とし、更に（3）人事詩風の朗讀體をすべしと說いた。此集には我は喇叭手なり、可兒大尉、忘れがたみ、進め矢玉等七十九篇を收め、大體七五調であるが稀に五七調も見える。餘程新らしい試みを進めた譯であるが、作家が區々としてゐて、或は洋風の抒情詩的の者や、謠曲今様風の者などが混同して統一に缺けて居た。其主眼は思想內容を第一とし詩的形式を第二とした點、日本思想と西洋詩風との調和に重きを置いた點などに在つた。長詩でも古歌の引用の風が多い所などは尙因襲的の考へが餘程濃く流れてゐる。併し新體詩鈔から新體詩歌集に至つては、其メムバーも社會的に有力な人々であつたし、詩歌の社會的流行の勢力も大きかつたので、其影響は中々に著しく、內容の新詩調の主張と共に、當時の詩歌界の思想を進歩させた所が多かつた。

（二）新詩人運動は晩翠（土井）雨江（鹽井）桂月（大町）羽衣（武島）樗牛（高山）落合萩の舍等大學出身の新詩人に依つて或は詩歌に或は美文に或は散文に盛んに創作されて一時の盛觀を成し

た。就中晩翠の新體詩は共雄渾な詩風に於て、文學界派の藤村の純抒情詩風と對照せられて大いに世に行はれた。共集に卅二年の天地有情、卅四年の晩鐘が有る。彼の題目は自然と詩人、希望、夕の星、暮鐘、無限の如き詩的冥想的の小長詩と、秋興八首、富嶽、馬前夢、星落秋風五丈原、萬里長城の歌、黑龍江上の悲劇の如き叙事的長篇との二型類に涉り、又擬歌の長聯歌なども詠じた。格調は七五調が主であるが、往々五七調七八調なども交へ、題材に從つて六句八句等に數十聯の形式を行る事が特色であつた。藤村が戀愛や人情美を詩化したに對して、彼は詩歌の理想は天上の希望に在りとし、人生其物、運命、英雄崇拜、史的懷古、理想と人生、美神等の高遠幽妙な詩境を詠じた。從つて人生觀詩、英雄崇拜詩、史詩 Epos と謂ふ可き者が多かつた。又小長詩で自然の美や人間の理想を詠出した好詩も有る。茲に至つて譯詩の詩趣形式に、漢詩の修辭を驅使した新新體詩が調和的に完成されようとした。藤村は女性的、是は男性的、一は春花の爛漫たるが如く、一は秋風の淸爽たるが如き相違が有つたが、此二者の對照は靑年期、發達期の我我詩界の開拓に大きな功が有つた。

次に（三）日本文學運動は和文科古典科等を中心として、洋風文學の流行に對する反動として起つたが、明治廿一年に雜誌日本文學を發行し、小中村、黑川、井上、落合等が執筆した。日本人や我樂多文庫の創刊と同年である。其主張には我固有文學の眞髓を發揮し、國文學の研究法を究めて、國民の愛國心を涵養すべしと謂つてゐる。後廿三年に國文學と改題された。日本主義復興の時勢に應じた運動であるが、國文國史の方面では當時駐日外人の研究熱が盛んで、チエムバーレン氏の日本上古史評論が出たり、名高い日本亞細亞協會雜誌（アジヤチツクソサイテイオブジヤパン）にサトウ氏アストン氏等や後にハーン氏等の研究が出たりして、新科學的の研究法や見方が加へられたので、大學內にも其刺激で固有文學の研究が唱へられたのである。又廿三年の國會開設前後の國情として、一般に反動的、發奮的の傾向の盛んな結果でもあつた。前記の中落合には萩の舍集が有り、和歌と長詩に保守的歌風に反して淸新率直の詩風を建てた。淺香社の集ひである。

其から（四）評論運動と云ふのは國文學の後、明治廿八年に帝國文學が刊行されて、新たに

文學研究や評論に當る事になつた。美文集に花紅葉等も有る。一面文壇では博文館の文藝倶樂部が同年に出で、翌廿九年春陽堂の新小說も發行され、早稻田からは早稻田文學が現はれて評論界が大いに賑つた。評論思想界に著はれたのは登張竹風のニイチエ超人主義、高山樗牛の美的生活論、日本主義等で、樗牛には創作に瀧口入道の樣な美文物も有る。劇評なども盛んに行はれて、團菊左等の名優の演劇が文學的に賞鑑され、新脚本も多く出でた。其間他派には鷗外の新浦島、逍遙の新樂劇論等が現はれて、オペラと演劇、謠曲、新體詩との調和も試みられた。

（ロ）民友社派

民友社派は卽ち蘇峰の創刊した國民之友を中心とする一派であるが、雜誌は政治批評を主としつゝ、國民文學の開發に力め、平民主義で、ツルゲネエフやゴリキイなど新文學の翻譯なども頻りに出でた。此派で最も注意す可きは獨步と蘇峰の弟蘆花とである。（一）國木田獨

歩(哲夫)は獨學で英書等を學び國民之友に依つて著はれた作家で、卅年に武藏野、源をぢを、卅一年に幻の著が有る。武藏野は澁谷邊に住居して郊外武藏野の自然味を觀察した細密の小品で、他の短篇と共に卅四年に單行本で出た。文學界派などの所謂自然文學の情味の豐かな者で、漢文風の修辭にツルゲネエフ、モウパツサン、ウォーヅワース等の西洋文學の自然味を交へた描寫を含み、清醇の筆致に優れてゐる。獨歩は又卅年に詩集獨歩吟を出した。今樣風リズムの小長詩廿餘篇を收めて、其詩風は素朴であるが鋭くして人生味に富んでゐた。

(二)蘆花(健次郎)も一個の文學青年として上京し、民友社に入つて早くから歴史の片影などの著譯に從事した。次いでトルストイ、青山白雲を出し、卅三年に小說不如歸、小品自然と人生及び探偵異聞を著はし、廿四年に思ひ出の記、卅五年に青蘆集などを出して文名を得た。彼は基督教の信者でもあるが其筆致には矢張り富瞻な自然文學の滋味と無邪氣な人情味とを帶びて眞率な長所を持つて居た。自然と人生は獨歩の武藏野と前後して出た相似た小品集であるが其描寫は必ずしも圓熟した者では無く、漢文風の詞藻と共に較々粗豪の弊が有つた。小說

の不如歸は誰も知つてゐる樣に非常に世評を博して版を重ねたが、家庭の愛情と因襲の悲劇を寫し、思ひ出の記は彼の自傳的回想記で、其感情と環境とが著しく醇粹で名高かつた。斯う云ふ作風は當時の硯友社派や文學界派とも異つて所謂光明小說、社會小說と呼ばれ、後に宙外、春雨等の追隨者を出したが、此期の彼は其手法と云ひ、其詩味と云ひ、又其人生觀と云ひ未だ圓熟の域に到つたとは謂へなかつた。彼の主要な文學的作品の現はれたのは次期に入つてからである。

(八) 根岸派

歌俳壇を主とし文章道にも涉つて日本主義の主張を高調した者に正岡子規(常規、竹の里人)を中心とした根岸會の一派が有る。子規も卅年に日本新聞に歌俳論を載せ、又雜誌ホトヽギスを刊行して、詩歌に於ける日本主義、萬葉風の直情平淡主義を唱へた。同年又押韻論をも出し、其他寒山落木、春夏秋冬等の著が有る。其主張では落合の和歌論や末松(謙澄)の國歌新論(廿八年)

の說を進めたものである。和歌に於ては萬葉歌の直情流露、和歌と生命、格調等を說いて時流の因襲的技巧弊風を排斥し、俳句も宗匠風を排して句の精神を唱へたが、主に蕪村風の句風を示した。直接に芭蕉研究の盛んになつたのは明治卅四五年からである。彼は其結果を見ずして明治卅五年、春秋僅かに卅六歲で歿した。此派の後には高濱虛子、河東碧梧桐の二子が異る特色を以て次期に進んだ。根岸派の外俳壇の運動には內藤鳴雪の常盤會、角田竹冷の秋聲會、木太刀、大野洒竹、佐々醒雪の筑波會なども競ひ起つて、俳文學の革新が餘程世に認められる樣になつた。

(ニ) 明星派、詩人派

和歌、新體詩の方面で上述の日本主義の革新などゝ別方面に、感情主義、純抒情詩主義の運動、純詩歌的主義の運動も大分起つて來た。明星派、詩人派など其著るしい者であらう。

(一)明星派は與謝野鐵幹に創められた新詩社で雜誌明星を出し、同晶子と共に情熱的の歌風

を創めた。鐵幹は新體詩等に東西南北（廿九年）天地玄黃（卅年）山高水長（卅一年）埋木（卅五年）等を出したが、平易卒直な用語に端的の感情氣象を詠じて古典味は乏しかつた。晶子は明治卅四五年に歌集亂れ髪等を著はして、戀愛歌に强烈な感情を詠んだ。

（二）詩人派當時の詩歌壇の人々で、青年作家の歌詩專門に向ふ者が漸く多く、卅年に抒情詩、卅三年に小天地の刊行、其他文庫、新小說、文藝界、神來、白鳩、新聲等が相次いで出で、花外（兒玉）白星（平木）臥城（吉野）有明泣菫、醉茗（河井）泡鳴等が其主なる作家であつた。其中で泣菫と有明とが注意す可き傾向を示してゐる。薄田泣菫（淳介）には卅二年に暮笛集が有るが、藤村に似た抒情詩風で一層叙事的な所がある。蒲原有明には明治卅五年の草若葉、同卅六年の獨絃哀歌の著が有る。形式も必ずしも七五調に依らず、著しく神秘的古典的の詩風であつた。彼の此詩風は次期に入つて益々象徵詩風に傾いて行つた。二者共に古典味の多い所は、淸新卒直の歌風が唱へられた歌壇に新境地を拓いた點である。

斯樣にして觀ると明治前期卅五六年迄の我國文學の發達が青年期であり、樹立時代であつ

た特色が餘程明かに見えてゐる。要言すれば過渡派、新思想派の時代は初めにも述べた樣に樹立時代中の（一）樹立期で有り、硯友社派、調和派の活動した前期の後半時代は（二）發達期と名づけても可いのである。江戸時代以來の文學は過渡派に依つて再萠し、新思想派運動に依つて一新し、更に硯友社派や調和派諸派の活動と努力の段階を經て散文（小說）詩歌俳句共に、新時代の社會生活や理想と相伴つた發達を遂げたのである。此期の文學が青年的であると謂ふのは、一般に啓蒙的でナイーヴな所が多く、理想を含んで氣象に富んで居た特質を指すのである。漢文味の多かつた所などは近時の文學の西洋文學に傾いて居るのと似て當時の社會の歐化を反映してゐる。

第二章　明治中年期―動亂時代（明治後期四十五年迄）

其一　自然主義派

明治中年期は其卅五六年以後四十五年に至る末期の十年間に過ぎないが、此間に新たに自然主義文學が勃興して燎原の火の如く文壇を風靡したので、從來諸派の進展に著るしい影響を與へ、未曾有の大きな衝動を與へた。之を動亂時代と謂ふ。此自然主義の流行には（一）國家的、政治的、社會的と（二）思想的、文學的との二原因が在つた。是等は孰れも國内的原因であるが、其一半には兩者共外來的の原因を含んで居たから、其點では（一）國内的原因（二）外來的原因の二者に分けても可い。國家的、政治的、社會的の側から見れば謂ふ迄も無く、卅七八年の日露戰役及び其大勝の結果で、國家が一躍して世界的强國に進出し、人心が驕つ

て好景氣、物質充足の社會を現出すると同時に、歐米十九世紀後半の科學思想、物質功利思想に發した文物が今迄よりも急激に浸入し、直接に自然主義文學が社會の上下に迎へられたのである。思想的、文學的には勿論イブセン、ゾラ、モウパッサン等の歐洲大陸文學の影響が之と伴つて盛んに行はれたので、前期の我文學界のイデアリズムや古典的ローマンチツクで行詰つた狀態に對し、內的に、人心の動搖や物質と理想、理性、道德との破綻不調和の間隙に乘じて、光明と暗黑との對照、寧ろ暗黑其物の人生を描く文學が、最も時流に投じたのである。

尙(三)第三に自然主義の素地としては、前期に述べた樣に、英國風の自然思想の文學や佛國風の自然主義文學の輸入が、初期の政治思想や、文學界の頃から一脈隱見して行はれて居たので、茲に至つて社會勃興、文學展進の主潮に乘つて俄然勢を得るに至つたのである。

(イ) 花袋

此期の自然主義作家は非常に多數で、其程度や出身にも種々の特色が有るが、花袋は最も

多作で一般的に此主義の先進と認められた。新自然主義派と名づけられる。田山花袋（録彌）は硯友社派に屬したが前期末から自然主義の作風を示して、田舎教師、一握の藁、幼兒、一兵卒の銃殺、山の悲劇等を著はし、四十年の蒲團が名高かつた。自然主義のモットウを客觀的寫實に在りとし、平凡な人生や醜惡悲慘事を如實に記述する文學であるとした。所謂平面描寫である。併し事件と共に構想や叙述が平板な丈け往々千篇一律の失が有つた。又花袋の田舎教師などには自傳的で郷土的の色彩が多いが、此郷土的傾向の自然要素も自然主義文學の一側流を成して、後に言ふ藤村の破戒、白鳥の牛部屋、長塚節（根岸派）の土、青果の諸篇等にも著しく描かれてゐる。德田秋聲（末雄）も硯友社に出た作家で愚物、濁流等に男女性や世相を描いて深刻の筆致が有つた。

（ロ）獨　歩

國木田獨歩も此期に入つては自然主義の傾向に進んだが、其題材、筆致、詩想の上より見

て、純正自然主義派と謂ふ可き者であつた。卅八九年から四十一年に幾多の短篇、牛肉と馬鈴薯、酒中日記、富田先生、少年の悲哀、岡本の手紙、第三者、女難、非凡人、無窮等を出して獨歩集を著はし、單行本に運命、濤聲が有る。彼は好んで少年、孤兒、乞食、白痴等を題材とし、人生の暗黑面の眞理を語らせ樣とした。其背後には人間の運命の影が大きく靜いてゐる。手紙文の形式も屢々用ひられた。數人の僚友が寄つて暗黑失敗の身の上や人生觀を語り合ふ趣向が最も多い。又英國風の自然文學味も其間に混つてゐる。斯う云ふ作風が硯友社派其他の光明小說、理想小說、戀愛小說と著るしい異色を成した。文章は率直無技巧であるが、一種思想の力、道德的力を寫出して眞情に富んでゐる。是等は彼の性格とも關聯した特色であるが、幾多の自然主義文學中に比較的深味の有る詩境を拓いた彼の功は大きい。

（八）抱月、白鳥

早稻田派島村抱月は自然主義の評論家として天溪や泡鳴と對し、此主義を個人主義と幽欝

性文學であると說いた。創作に流星、永生心、其女、劇曲の淸盛、運命の丘などがあるが、其色彩は微弱である。正宗白鳥は此期の後進で四十年の白鳥集に二階の窓、未見の人、惡緣、二家族、空想家等の諸作が見える。二家族は筆致に優れ、前記の牛部屋なども有る。花袋や獨步に模して尙及ばなかつた。早稻田派の作家には德田秋江、中村星湖等も出でた。

（二）藤　村

島崎藤村は此期の初頃より散文に轉じて卅八九年に水彩畫家を出したが、自然主義作家の立場では溫和派に屬する。其著作には卅九年の破戒、四十一年の春、四十四年の家など孰れも世評を博した。破戒は信州飯山在新平民出教員男女の悲戀を、春は文學界時代靑木、岸本等靑年グループの生活心理を理想的、悲哀的に描出してゐる。勿論其描寫には後年の作者から擴大されてゐる所も有るらしい。自傳風の傾向は初期の生立の記や芽生に次ぐ作である。家や壁などは家庭生活や運命を主題とし、其他短篇に黃昏、並木、奉公人、三人、或女の生涯、伸

び支度等が有り、中年男女の生活を描いた。是等の諸作を通じて見える彼の精神は何となく回顧的の運命觀とも云ふ可き思想で、寧ろ家族精神や田舍者の情味が主調になつてゐる。智的要素の少い文學で有る。其點は調和的で又保守的對內的とも謂へよう。全部的には左迄强烈で無いが、局部的に切實な人生味を想はせる所が有る。乃ち自然派としての態度は極めて微弱であつた。併かし獨步より道德的人間的で而かも近かつた所がある。描寫の手法は同じく割合に單調である。彼の次期の作風には又一轉化を示してゐる。此間小杉天外も通俗的な此派の多作家であつた。

（ホ）泡鳴、天溪

自然主義の評論界では泡鳴、天溪が最も著しかつた。作家に於ても區別が有つた樣に、其所說の上でも區々である。泡鳴は實行的熱情的に、新自然主義を唱導した。ヴェルレーヌ、マラルメ等の象徵主義を採り、又半獸主義とも稱した。彼の文學は刹那の性慾、心熱、神經

等を新技巧で表出するものであるとした。之を新自然主義と呼んだ。尤も其作風は左迄進んだものでもなかつた。天溪は之に較べると稍理論的である。理想や形式の虚妄から覺め、現實暴露の悲哀、卽ち幻滅及び其解決の悲哀を表出するものが自然派文學の本領であるとした。思想方面を代表した說である。プラグマチズムとも關係がある。抱月も亦前記の批評をした。中澤臨川のツルゲネエフの自然觀などは、客觀的自然派の批評である。要するに自然派の文學は、必ずしも主觀を排するものではないが、理想を現實界に沒入し、人生と現實と倒起苦悶する狀態を、客觀的に描寫しようとしたものである。娑婆現象の文學である。寫實主義から一轉して、端的に刹那の自我生活、靈肉の乖離などを主題とした。人生を盲目的のものとして、主に陰影暗黑の場面を描寫した。其說に力强い衝動力を有して居たのは之が爲である。畢竟其使命は文學の客觀性、寫實性の擴充、眞實性の主觀、人間性の展開の點にあつた。之を以て文學の全豹、究極となすは素より當らない。

其二　心理主義派

自然主義の缺陥に對して、前期から發達して來た人生派、理想派、文藝派の文學を進めたものが此派である。人生の一部ならず全部を、暗黒面のみならず光明面をも、淺薄相のみならず趣味、人情の世界をも描寫したのが此派である。自然主義の影響からも、又漠然たる空想や形式からも離れて、眞實に人性の心理、人性の姿を描く樣になつた。心理主義の名は、英國にも早くエリオツト夫人 Gorge Eliot.（1819—1880）が有り、ゴールドの現代文學にも、心理派にローレンス、ロイス等を數へて、現代の主なる作風としてゐる。此派の中にも、又色々の程度や立場が認められる。

（イ）漱　石

心理主義派の最も著しい作家である。慶應三年江戸に生れ、廿三年子規と同時に東京帝國

大學英文科に入り、廿六年卒業し、卅二年に洋行した。初はホト、ギスにローマンチックの美文風の作を出した。漾虚集に見える。一體彼には作家として次の五期があつた。（一）ローマンチック期（三十五六年迄）（二）滑稽、人生觀期（卅八九年迄）（三）非人情觀期（四十年迄）（四）自傳苦悶期（四十五年迄）（五）人生哲學解脫期（大正六年迄）が其れである。終の一期は次期に屬してゐる。作家としては二期からである。卅七年に猫の作を出した。奇想と滑稽に富んだ諷刺文學である。新時代の衣裳を纏ひ、久沙彌の冥想的氣質を寫してゐるが、淵源は三馬の浮世風呂や、魯文の猫の文學に出てゐる。次には鶉籠に坊ちやん、二百十日がある。坊ちやんは側面描寫で、諷刺的の作であるが人生味が乏しい。（昭和二、十一月本郷座狂言上場）猫や坊ちやん等邦人に英譯されたものが多い。三期の非人情觀期には草枕、虞美人草を出した。非人情の人情一致と云ふ事を說いて稍奇癖がある。修辭技巧の方面は著るしく整つて來た。さふ云ふ點では技巧期と云つて可い。女性のタイプは稍鏡花に似てゐる。非現實的の烏瞰式側面描寫である。草枕の特色とも謂ふべきは（一）智的なる事（情的より）（二）禪味——靜中動（三）意志主義

(四)入浴趣味(是は彼の作に一體に多い)(五)因緣應報觀(六)餘裕——寫生文、高所よりす。故に衒學的となり、哲人振る風が多い。(七)修辭主義——和漢洋に渉る。此點詩界の晩翠と似てゐる。(八)正義觀念——個人的、非社會的——を內包する事などであらう。此作は有名の作であつたが、人物が類型的で人生味も乏しく、不自然が多かつた。是等は智的の趣味が多く、其點で新しい所もあるが、概して小我的の左迄優れたものではない。近松の一面や、三馬、一九の戲作者風の趣味すら潜んでゐる。

四期の作には、三四郎、草合、それから、門などがある。多くは大學の先生や、學生などを主人公とし、戀愛や家庭に於ける人生を描いた。一面には自傳的の所がある。此頃彼は發達の大轉機に當つてゐたらしく、在來の諸作よりも陰鬱なところがあるが、人生味は加はつて來た。心理派としての完作は、尙次期に入つて出でた。彼の評は其を待たなければならぬ。其點は蘆花と酷似してゐる。彼には又文學評論、文學論、文藝批評等がある。文學論、批評共に形式的で、舊式のところがあつた。寫生論などもある。其門下に作家が多く、草平の煤烟

や、三重吉の小鳥、虚子の俳諧師等がある。

（ロ）露伴、鏡花、風葉

露伴は此期に天うつ波の作四篇を出し、又叢書、王蔓、葉末集、寳の山等に新舊作を公けにした。新浦島には魔王の怪力を敍べてゐる。天打つ波は文章體で、放澹な筆致に人情を描いてゐる。短評等に妙味あるものもある。

泉鏡花は紅葉門下に出でゝ、特色のある多作家である。前期中早く化銀杏、辰巳巷談、湯島詣、風流線等を出して、名聲を博くした。日清戰爭物も多い。此期の彼は白羽箭、紅雪錄、草迷宮、歌行燈、南地心中等の諸作が有る。其等の作には(一)神祕物、(二)花柳物、(三)時世物の三種類がある。作風上に神祕的空想、女性の特異性、宿命觀、罅隙(ギャップ)的構想、修辭的技巧の綺麗など、一種の鮮明な特色がある。併しローマンチックで山があり、稍朦朧としてゐる爲に、現實味人生味に疎い所があり、又往々類型的缺點がある。且其文學の世界は、多く

は山間の男女か、市井、花柳の女性などで、其想と趣味とはさう高いものではない。此點漱石の主人公と大分に反照がある。人生の裏面に揺曳してゐる一種の意氣と因縁觀とを主として寫した作が多い。次期の彼は、尙幾分別趣の境地を描いた。

小栗風葉も亦紅葉門下に出でゝ、後には自然主義に近づいた作家である。初期の戀慕流は有名で、鬢下地、有緣無緣、未成年、青春、强き戀などを續作し、今色夜叉を補つた事もある。別に菊池幽芳の如きは、家庭小說の方面に進出した。

（八）鷗外、蘆花、宙外

此一群は素より一派と云ふ譯ではないが、前記二派以前の作家である。鷗外は精力的の努力に於て、其譯作尙多く、詩趣は露伴よりも加はつた。雁、二人の友、高瀨舟、山椒太夫、護持院原仇討、大鹽平八郎や、戲曲に南浦島、生田川、建築師など、頗る多作である。二人の友の如きは稍獨步に似て、心理的、記述的である。山椒太夫は筆力詩趣に富み、護持院原

仇討は記述的談話的である。併し全體に餘暇の仕事でもあり、素人的の所が見えて、彼が新思想派以來唱へた文學論とは餘程の距離がある。逍遙の樣に文學論を唱へて之を實際的に、創作に示すといふ風でもなかつた。

蘆花の此期はやゝ沈靜期に入つて、黑潮の社會小說、寄生木の傳記物を公けにしたに過ぎない。描寫が漸次深刻に赴いた。蘆花の佳作は尙次期に入つて出でたのである。

宙外は非自然派の評論を以て、天溪、泡鳴や同門の抱月等を論難した。理想派、修辭派風の批評を爲し、作風には人情美を示したものが多かつた。

心理派の勢力は、自然派の嵐の樣な流行に及ばなかつたが、文學思潮の發達上には、中々沒し難い功績があつた。(一)作家の個性を發達させた點からして、漱石、鏡花等の作に於て、後の國文學の發達上に、重要な要素を寄與せしめた事、(二)古典的、技巧的の進歩を持續した事、(三)正當な文藝觀乃至道德觀の助長に貢獻した事、(四)精密、正確な作風を發達させた事など、皆其長所に數へられる。然し此派の文學は比較的に、消極的の性質が多かつたが爲

に、一般社會を指導する力は、さう大きなものではなかつた。

其三 新古典派

(イ) 泣菫、有明

非自然派の第二派は新古典派と呼ぶ事が出來る。心理派のリアリズムに加へるに、更にクラシツク及びローマンチツクの要素を深く吸入したもので、前期の調和派の新體詩人晩翠、藤村等に發して、泣菫、有明の二詩人を代表者とした。薄田泣菫には卅四年の廿五絃から行く春、暮笛集を經て、三十八年の白羊宮、白玉姫に至る諸篇が有る。廿五絃からには小詩篇の外、雷神の歌、金剛山歌、天馳使の歌の如き大敍事詩がある。其思想は神話や佛教からも取つてゐる。京都で詠じた作が多く、凡べて京都風である。詩調は七五調が最も多い。白羊宮は宙外に寄せた集で、片歌調や祝詞調を採り、神祕的な所は鏡花に似てゐる。俗語調も混

じてゐる。白玉姫も敍事的に京都の風俗を謳つてゐる。自然に對する擬人法の使用が多い。畢竟泣菫は詞美派、幻想派の自然詩人である。空想的客觀詩人である。其失は往々朦朧體に陷る事、誇張に走る事、又偉大な詩想が缺如してゐた事等であつた。

之に反して蒲原有明は、泣菫よりも詩想に幽玄味を帶びてゐる。所謂主觀詩人であつた。卅五年に草若葉を、卅八年に春鳥集を出し、後四十一年更に有明集を著はした。其歌調も七五七、五七七交錯の長聯を多く用ひた。古典的な事は矢張り前者に似てゐて、中に佛教語、キリスト敎、音語等を交へてゐる。人生觀詩が最も多く、幽遠な理想の思慕、生命の追求が中心になつてゐる。又人魚の樣な物語的の作も見える。象徵風の作風は、泣菫より進んでゐる。しかし有明の象徵は、泡鳴の心熱的象徵とは異なり、冷靜な詩的觀照の象徵である。朦朧體の傾向は矢張り多く、其思想は何れかと云へば、纖弱を免れなかつた。

一體象徵（Symbol）は比喩法の高度のものであるが、比喩法に四種の別がある。

（一）明喩 Simile　―花の如き顏―具體的想像、觀念附加（熟知的、

二者別立―共通觀念聯合、單に美しき顏といふより强むる作用）

（二）暗喩 Metaphor　―花の顏―同　上（熟知的、

二者融合―共通觀念聯合、右より勢力强し）

（三）擬人 Personification　―花笑ふ―具體的又抽象的想像、觀念轉化、新奇的、

{生物人化／無生物人化　―特殊共通觀念轉化、强力となる）

（四）象徴 Symbolization　―百合―空想的想像、觀念轉化（新奇的、

二者別在―特殊共通觀念全轉化、創造的、强大なる觀念力の集注又は凝結）

象徴は擬人や他の比喩法よりも、特異性が大きい丈け、奇拔であり危險性を伴ふ事も大きい。同時に詩趣が共點に在る。此象徴に又次の樣な種類が有るのである。

象徴
- （1）素朴的―自然的―物的
- （2）技巧的―
  - （a）詩的―空想及び情緒的―靜的…有明
  - （b）心熱的―空想、情緒、衝動、意志―動的…泡鳴

二人は實際に於て、藤村、晩翠の追隨者であつた。詩型の相違してゐた點も稍々似てゐるが、其詩的天分や、スケールは遙かに小さかつた。只二人の出現に於て、詩の技巧的方面は大いに進んだ。これは自然主義時代に於ては、文學史上珍らしい事例であらう。

（ロ）露伴、逍遙

露伴は前期に四行の短詩を主張したが、あまりに注意を惹かなかつた。卅七年に大散文詩、大思想詩と云ふ可き出盧四編を出した。丁度日露戰爭の頃で戰爭觀や國家觀も現れてゐる。其詩想は（一）世相（二）詩歌（三）煩悶、（四）悟道を詠じて、結局詩歌を以て現世を救ひ、現世に超脫すべき意を叙べてゐる。長短不規則の文章形を以て放膽に謳つてゐる。往々對句法や長短交錯のリズムも交へてゐる。謠曲風の所や晩翠に似た所もある。其思想も佛教的、老莊的、又我國民精神を鼓吹した所なども見えて雜多であり、詩形の雜多性と共に冗長の失があつた。

逍遙には此期に入つて、卅七年の新曲浦島、翌年の赫映姬、四十一年の新曲金毛狐など、所

謂新樂劇物を多く出した。浦島は謠曲的で頗る綜合的の工夫に成つてゐる。七六調で變化に富んでゐるが、性格的方面は餘り見えない。視覺的方面を主にしてゐる。未だ古趣味に由り勝で新味は左程無かつた。次の赫映姫も能式の曲である。一休禪師、お夏狂亂、金毛狐など、多く題材を謠曲に採つた。謠曲と劇との調和の道を進んだが左程發展しなかつた。

戯曲には四十二年の牧の方や、星月夜（實朝）義時（長曲）などがある。不思議に鎌倉物が多い。默阿彌の世話物作に對すると、時代物本位である。これも多くは興味と變化を主とした傾きが有つたので、新劇としての試みは、餘り出てゐない。何處迄も古典的で、非現實的で、誇張的の作風である。技巧的の美的工夫と云ひ、形式的配置と云ひ、詩句の美と云ひ非常に立派であるが、一般に外的戯曲で、冗長の傾が多かつた。

一體逍遙のみならず、又戯曲許りではなく、藝術道の種々の方面に於てさうであるが、殊に戯曲に於ける樣に、前代藝術の樣式を借着とし、典古的、模型的趣味を生命としつゝ行はれてゐるのは、非常に不思議な事である。和歌などにも其傾きがある。古典的の趣味性に基

くのであらうか。此方面の新藝術に於て、逍遙が保守的態度に出た爲に、二十年前、小說上に唱へた寫實論の精神を應用しなかつたのは、一奇と謂ふ可く、又惜む可き次第であつた。

其四　自覺派

自覺派は非自然派の第三派に屬し、作家の態度に新古典派などよりも、一層個性的自覺が進んだものである。即ち其創作の動機に、自我的個性の特質が、直接、多量に含まれてゐる一派である。ゴールドの現代英國文學に自我的個性派として數へた意味もこれであらう。併かし自覺派は、實際は必ずしも非自然派とは限られてゐない。寧ろ自然派と心理派等の生んだ幼兒である。作者の時代も前諸派に比べると、多くは後進の人々であつた。そして和歌、新體詩の歌人が多かつた。

（イ）啄　木

啄木は東北生れの詩人で、初め新詩社に入つたが、後獨立して個性の歌調を詠み出した。明治卅六年十八才の頃、澁民村の寺に居て初作を出し、四十年前後に長詩を詠じた。憧れ、啄木鳥、函館の歌等が其である。北海道では妻子と共に生活した。悲しき翫具などに、病弱と生活苦とを歌つてゐる。初は古典的の詩風、美詞的の人生詩、自然詩が多かつたが、漸く生活詩の方向に面つた。自我の靈魂の生活の呻吟とも云ふ可き作が多い。和歌の集を一握の砂と云ふ。和歌を三行書にして、家族精神や生活の努力を詠出した。長詩よりも和歌に力が入つてゐる。丁度長詩に於ける、花外の作の樣な氣力を示した。期末に若くて夭折したが、其詩的天分は餘程純粹で鋭い所があつた。(明治四十五年四月、廿八歳)

(ロ) 白秋

白秋も亦新詩社から出た詩人で、此期に想ひ出、邪宗門等の作がある。想ひ出は回想詩で想ひ出、生の芽生、トンカジョンの悲哀などに、小形詩を多く用ひた。初の我生ひ立といふ

散文序が却つて面白い。九州の柳河生れである。全體がロマンチツクの斷章詩で、やゝ放恣の詠法である。感興的の卽興詩と云ふべきものである。鄕土的の特質が見えるが、女性的で、まだ詩格も整はなかつた。

邪宗門は四十年頃の長詩及び短歌集である。長崎邊の南蠻キリシタンの影響も詠ぜられてゐる。詩歌と音樂とを結合し、其內容を感覺的のものとした。擬人や象徵などの技法も多く用ひられた。併かし新奇を喜んだ模倣風が多く、其感覺的內容がまだ詩化せずして一部に限られた狹い傾がある。用語に新語が多く見える。和歌は寫實的であるが、智的で名詞を多く詠じてゐる。白秋は次期に尙多作してゐるが、感覺詩を拓いてリズムに輕快な調子を初めた事は、一つの新事件である。彼を啄木と對比すれば、一は力の詩に、一は感情の詩に、共に一生面を開いたものと謂ふ事が出來る。

（八）晶　子

新詩社の品子は、又女流の歌人として、自覺派に屬せしめる事が出來る。小扇を卅六年に毒草、戀衣、亂れ髮を卅七年に、次いで舞扇を三十八年に刊行した。續いて夢の華、春泥集を出した。亂れ髮は戀愛を主とした作、舞姫は名高かつたが、戀愛や自然や家族を詠じ、新たに漢語を採り入れ、男性的の歌調であつた。其中に壯快な作と、優美な作との二類型があつた。併し一方に於て其詩質形式が誇張に傾き、又詩歌の特質にも確定しない所が有つた。春泥集では華麗と淸新な歌調に、敍景や人生觀や、母性愛を詠じてゐる。此集の歌も尙誇張と空疎の風が有つた。女史の作歌は其淸新調と自由な內容の詠出とに於て、新自覺派の歌人と認められた。是等は皆理想派、古典派、自然派に依つて爲された文學の外部の解放に對して、文學の內部の解放を成したものである。其點に於て、自然派の運動と相關聯した所が見える。

(二) 新俳諧派

子規後の俳壇は、（一）新古典派に（1）鳴雪派や、（2）虚子派や、（3）新調派があり、（二）新人生派に、（1）碧梧桐派や、（2）井泉水派や、（3）生活心境派がある。自覺派としては、（二）新人生派の俳風が、最も交渉が多い。客觀的から漸次主觀的、印象的の詠出に、俳詩の中心熱を求める樣になつた。俳味、風雅と云ふ如き、今迄の靜的な詩趣より、心力、個性、新趣味の如き動的、創造的の詩力に、端的に移つて行つた。其事については尙後に述べる事にしよう。

其五　結　語

斯樣にして看來ると、我動亂期は、現代文學に於ける中年期である。三十六七年から四十五年迄其期間の短い割合に、幾多の重要な波瀾と衝動とを現出した。其波動は矢張自然派と非自然派との合成波、複合波であつて、動搖が一層甚しく、其根柢を成すものは、即ち自然派の波動であつた。之が文學の野に汎濫的に瀰漫して、甚大の革新を呼び起し、茲に動亂期の現

象を呈したのである。其間の文藝の一般的性質は、自恣的苦悶の文學と云ふべく、國民的には大戰爭を經て新日本的性質を帶び、文學上の性質は中年的男性的で、慾望及び感覺中心の文學時代に入つた。換言すれば動亂期は即ち自然主義運動期と云ふべく、其文學の文化的性質は無中心的であつた。短時代の割合に活潑な勢力を有する新主義の活動と共に、舊主義も甚しく刺戟されて、その接觸作用の間に、幾多の重要な性質を創造し、單に自然主義を經過したと云ふ、一般的の階程の外に、文學上多大の新傾向を喚起したのである。自然主義時代は單に闇黑時代と云ふ事は出來ない。寧ろ現代更に文學の第二熔礦爐期であつたと謂ふのが當つてゐる。

第三章　大正、昭和新青年期（老年期一）——展開時代（大正、昭和現在迄）

大正以來昭和の今日迄、文學界の現狀は、展開期とも云ふ可き現象を呈してゐる。動亂期の大波動であつた自然主義は、漸く鎭靜期に入ると共に、其陪波動に釀成された幾多の新傾向は、矢張幾派かに分化して、現在の文壇に向つて進んでゐる。前にも述べた樣に老年的と云ふのは、文化や文學の年齡が五十以上六十何歳にも達して、それが文學界の背景を成してゐるからである。是は文學上の事實としての性質である。併しそこには前期の大家が漸く老齡に達して、新文士が續々として出て來た爲、文壇自身も青年期になつたし、文學の性質も大分基調を殊にして世界的となり、新傾化し、青年的氣分が起りつゝあるのである。老年期と新青年期との混一時代である。乃で現在文壇の分派にも、色々の見方、別方があるのであ

るが、次の様な方法で其大體を窺ふに便利である。

其一　新理想派

(イ)　漱　　石

漱石は大成の域に入つて稍創作に乏しかつた。彼岸過迄、行人、心、道草等の短篇がある。多くは厭世的に人生を見てゐる。人間は利己的のもので、其爲に家庭も戀愛も悪化し、自殺など起るものであると言つてゐる。文明はその陰險な假面であると往々記してゐる。之が彼の所謂鬪爭觀である。併し彼は苦悶期からして漸く人生哲學解脱期に入つたので、上述の褻瀆觀から更に一轉して人生を達觀し、則天去私の道を說く樣になつた。そして大正五年明暗を朝日に掲げ、未完の中に歿した。五十歲であつた。外に坑夫の作もある。明暗は門以來の發展でお延なる主人公の夫婦間に於ける葛籐を描いてゐる。此篇に到ると彼の諸作中の傑作

とも謂ふべく、其人生味は漸く內熟し、深く人生を洞察した滋味が漾つてゐる。心理主義の筆致以上、又皮肉味、諷刺味以上、更に理想味を帶びて來た。彼が若し尙晩年の作を出したならば、恐らく人道派の作風をなしたかも知れない。彼は敎養も高く、文學者として殆んど模型的の發達をしたので、此以後の發達を見ずして歿したのは、我文學上惜しむ可きであつた。彼の文學は新古混和の文學で、必ずしも新奇に富んでゐるのではないが、其趣味は美的に高かつた。又智的の要素の多い文學である。併し彼の個性や性癖とも云ふべき點が長所でもあつたが、又餘程文藝上の累を爲した爲、其人生味が狹小で、廣大な人生を抱擁する妙味に乏しかつた。其悟道の哲理も文學趣味が乏しく、さう大きなものではなかつた。且其文學論から來てゐる彼の作風は、常に描寫を一つの焦點に結合しようとした爲に、其形式が單純で類型的の傾も有つた。之を紅葉、獨步の二人に較べると、紅葉は人情の文學を說き、獨步は運命、人生の文學を創めたに對して、彼は智的の文學を立てたものである。紅葉は廣さ——情味ある社會性に優れ、獨步は永遠性——深さある人生味に優れ、而して彼の文學は、一部

の人達に高さ——哲理ある人間味——に於て優れてゐたと謂ふ事が出來る。

（ロ）芥川、菊池、久米、志賀

此期に入つて漱石門下其他からして、帝大派の作家が多く出てゐる。芥川、菊池、久米等で、其他に志賀や新作家の沖野、島田等がある。新人生派、技巧派、又新思潮派とも云ふ。芥川は飜案物が多い。飜案物に今昔物語集の話にある六の宮の姫君などを描き、南蠻物に奉公人の死等を出し、又神話の素尊、釋迦、芭蕉、馬琴等の生活を描いたものもある。是等は才氣に富んでゐて面白い。其他家庭物や童話物や心境小説などがある。此類の物は經驗が狹く單に自己中心で、人生味が乏しかつた。愚行や不道德味が多い所も淋しい。次に菊池もまた多作家で、七年頃恩讐の彼方、忠直卿行狀記、藤十郎の戀など有名であつた。藤十郎の戀は芥川の羅生門などと共に英譯された。併し彼のは脚色的、技巧的で、心理に不自然や誇張が多く又道德性の惡い作があり、興味中心で通俗化し易い傾きがある。忠直なども非現實

的描寫で、面白い記述でも眞實を含んでゐない感がある。戲曲にも茅の屋根、旗本、玄宗等があるが、同じ傾きがある。其戲曲はドラマチック、スケッチ的で小品的である。英國で飜譯されたが、其方面では大分賞讃された。手法の上からは新古典派に近い所がある。

久米には父の死、手品師、良友惡友、密花等がある。父の死は父の女學校に於ける奉職中の事件を描いて、純粹の文學と云ふべきものではないであらうが、單調である。手品師、良友惡友等は平凡であるが、素朴の所がある。志賀は小僧の神様、暗夜行路、和解、大津順吉正義派、焚火などの諸作を出した。矢張り道德性の不完全な所が多く、描寫の上にも不自然や冗長の所が見える。

一般に近時の文學が不道德の愚行に滿ちてゐる事は、其の通弊と云ふ可く、一の問題であらう。是では殆んど文學は水平以下の人生、愚劣の人生の表出といふ感がある。さう云ふ文學では困る。之は一には自然主義からの感化による點もあるであらうし、又一には現代の道德的社會的、經濟的變化が自ら作品に反映するにも由る。且一には作家の親しむ外國文學の

惡い感化も有る。例へばダヌンチオの死の勝利の如き思索風の青年の戀愛生活を描いてゐるが、變化と性格とはとにかく其放恣、無内容、愚劣の風は甚しい許りで、決して善い文學では無い。又露西亞のドストエフスキーの作の罪と罰の如きも、人生の暗黒面をのみ題材としてゐる。ドストエフスキー程深刻に、大きく人間性を扱へば可いが、單に其罪惡愚行を模して淺薄に寫出したならば、全く無用の害惡文學となるのである。作品中の道德的散慢、背德の風、又は愚行等は、其自身には何等の價値はあるものではない。文學の題材として注意しなくてはならない。文學中に於ける敬虔味の忘失、生活の墮落と云ふ事は、作家の敬虔な努力に依つて、今一層淨化されねばなるまいと思ふ。

新作家は中々多く見えるが、まだ確實の詩力を示してゐる作家は少ない。沖野、江原、細田、石丸、島田等、其他にも澤山出でた。沖野、江原は基督敎的作品が多い。近時も某氏の文藝評に、現時の文壇の作風を（一）表現技巧は進歩したが（二）内容味が乏しい（三）獨自性、魂の力に缺けてゐると云つてゐるのは、多數の作品の上に至當な評言であらう。努力と

精進とが文壇一般に必要である。生田長江は此派の評論家である。

（八）晩翠、酔茗、八十、犀星、野口等

晩翠は東海遊子吟後、漸く枯淡と現實味を帶びて來た。酔茗は文庫以來の古作家であるが大正頃ローマンチック風に、生命の感を詠出した。八十は蠟人形等に詞調が見えるが、技巧的誇張がある。犀星はやゝ感覺的で自然詩、散文詩等が多い。この二人は又古典的の所も多い。新詩人の詩風は技巧は中々優れてゐるが、空想や眞情の力に缺けてゐる。調はゞ小我の詩が多い。又小さな作や反復句にメロディを主とする民謠風の作が多い。功を急ぐ風が果を成す樣に見える。共と稍々趣を異にして、散文風で思想味を露骨に詠出する者に、野口米、百田等がある。野口は自我の詩や浮世繪の歌等に世界的(コスモポリタン)思想を詠じ、百田は風車等に反復的の調を示してゐる。二者共に勢力のある調子である。

(ニ) 空穗、牧水

和歌界には空穗が國民文學、地上を出して感情の鮮眞な通俗歌風を詠じた。又創作社の牧水は萬葉風に出でゝ、牧歌的の郷土味に、人生味を歌ふ歌風を主張した。牧水は宮崎縣の産で名は繁と云ひ、大正十二年後沼津に住し、靜かなる野を行きつゝ、樹木と其葉等の詠、文集に水上紀行等がある。昭和三年九月に歿した。是等は技巧的方面から云へば、寧ろ素朴派に屬してゐる。

其二 新人道派

(イ) 武者小路、有島

大正に入つてから一時學習院出白樺派の作家が文壇に勢力を占めた。即ち武者小路一派で

ある。又有島等も、創作、批評に頻りに新文學を唱へた。其派等の主張は、人類愛とか自由の文學とか云ふ人道的精神を基調にして現はれた。即ち白樺派の人道派文學は、今迄の文學上の理想とか、人生派、古典派の因襲的社會觀乃至人生觀から更に進み出て、人類の自我發展世界的平和、人類愛などを內容とする理想世界への開放を目的とする文學である。

武者小路にはお目出たき人、彼が三十の時、第二の母、新しき家、ある隱者の運命、ある男等の諸篇、戲曲に、佛陀と孫悟空、或る日の一休、秀吉と曾呂利、廿八歲の耶蘇、一日の素盞鳴尊、日本武尊、楠正成等の時代物、又世話物に愛慾等がある。觀念的の作風であるが現代化の爲に歷史的に混亂する煩が在つた。又神名や英雄に對しても冒瀆的の描寫が見える隨筆物に自然人生社會、自分の人生觀、新しき村叢書などがある。實際にも日向に村の生活を行つて、勞働生活に理想社會の實現を計つてゐる。さう云ふ所を見ると、人間性の完全な發展を主張してゐる樣であるが、趣味見解がまだ小我的で、普遍的の人生味を發揮する迄に到つてゐない。此の派人類愛も更に大きな解脫期を經ねば、大なる文學上の發展は期し難い

であらう。此の派には長與、三島、犬養、柳等が有る。

有島武郞(たけを)は明治十一年の生れ、學習院から札幌農學校を出て、外國大學に學んで教授となり、後專ら文壇の人となつた。其人生觀、社會觀から巨萬の財產を分散して自活の經濟に入つた。後戀愛事件で輕井澤に歿した事は、世の視聽に尙新たである。(大正十二年歿四十六歲)前期の末の北海道時代から評論等を出した。創作にはお末の死、カインの末裔、クラ、の出家、實驗室、迷路、石にひしがれた雜草、平凡人の手紙等及び戲曲に死と其前後等がある。自殺を書いた作も見える。偶然か死を扱つたものが多く、お末の死なども面白い作である。カインの末裔には狂暴な野獸性を描いてゐる。妻の死に關したものも、やゝ現代人の殺風景な缺陷を示してゐる。

彼の藝術論は種々の場合に、研究的に述べられてゐる。藝術は本能的愛の想像である。其愛は博愛的でなく寧ろ愛己的のものである。故に藝術家はエゴイストである。藝術は人類の內部生命の本質なる愛の解放なるが故に人道的であると。此種の藝術論は稍自己に着し過ぎ

た傾がある。愛の語に囚はれた所も見える。又智的及び歴史的の考察が足りなかつた。藝術を以て生活及び人生の全部であると說く事も事實に合しない。彼の大なる健全性への文で、文藝の民衆主義を唱へ、邪道を是正することを說いたのは、後のプロレタリアート文學を時示してゐるが、作家の創作心に一層健全性を求めねばなられ。帆柱に倚る水夫も藝術家であり、クロムウエルも藝術家であると云ふのは如何であらうか。藝術論としては稍主觀的本能的に傾き過ぎた觀がある。

とにかく藝術論に比べると、氏の作風は餘程客觀的のリアリズム風のものが多かつた。社會的の問題が加はつて、かの如き最期を見たのであらう。家庭の事情や生活環境の不遇が文學者の天才の發達に禍ひすることは、古今共に寧ろ歎ずべきである。

（ロ）蘆　　花

非自然派の蘆花は、此期頭の大正元年にみゝずのたは言を出した。東京郊外千歲村の生活

に於ける自然と人事との觀想を、美しい口語文で、記したもので小說ではないがこれは彼の傑作であらう。自己と農民生活や鄕土味や自然の趣味が油然渾和して、一種云ふべからざる人生味を語る文學である。忠實な心的記錄で、生活と文章とが全く一致してゐる。往年の自然と人生に比すると、其人生觀は左して變化がないが、夫生硬に對して著しく自在に述べてゐる。矢張新人道派である。其上彼個人のみならず、昭和以來の時代の進步性が自ら表現されてゐる。彼は此作に於て漱石の明暗などゝ同じく、文學の圓滿境を示したものである。其後黑い目と茶色の目、死の蔭に、富士等を出したが、此諸篇は却つて古風に不純の所が多かつた。其中富士は社會小說で、罪人貧者等を描いてゐる。昭和二年九月廿日伊香保で歿した。六十五歲である。(昭和三、九全集刊行)

(一八) 柳紅、汪洋

此派の詩人で鮮明な者は餘り多數は見えない。僅かに右の二人に、稍其俤が見える位であ

る。川路柳虹は豫言や神の信仰を詠じ、思想的、冥想的で多方面の題材を詠じてゐるが、幾分西洋風の模倣が多く、往々惡い意味で牧師的の感がある。散文風の作もある。溫室の花など古典的趣味がある。正富汪洋には生活の平和味を詠じた作が多かつた。

其三　美的古典派

美的古典派は前記の新古典派に出で、心理主義派、自然主義派を收めて、種々の作家が大分此派に屬してゐる。散文が多く一方に戯曲が盛んであつた。形式美を重んじ、詞句文章の技巧が大いに注目せられた。

（イ）鷗外、逍遥

鷗外は大正十一年に歿したが（六十三歳）、此期の作は大方傳記物語に關するものや、譯述物であつた。栗山大膳、鈴木藤吉郎、細木青次、澁江抽齋の類が、長い續き物として出でた。前記

の諸作より實錄的となり、記述的の作が多かつた。

逍遙は又文藝協會の劇運動を起して、沙翁劇や新戯曲の演出を計つた。其後には專ら抱月が主となつて藝術座を組織し、イプセン劇、トルストイ劇等を演じて、新國民劇を興すことに力めた。抱月は大正七年に歿し、翌年女優として優れた松井須磨子が歿した。抱月等の演出した戯曲は、古典派よりも新理想派に近いものであつた。

（ロ）鏡花、三重吉、瑠璃園、涙香

鏡花は此期にも尙多作を示して、日本橋、新つや物語、芍藥の歌、彩色人情本、夫人利生記等に（一）花柳物（二）江戶物（三）宗教物の諸作を公にした。其內容味や手法は依然とした舊式であつたが、錯辭に於ける精練は益々進んだ。

三重吉は漱石門に出で、瓦、千鳥、小鳥の單篇に閑寂な趣味を描いた。碧瑠璃園は本名渡邊霞亭、名は勝、慶應元年に生れ、大阪朝日の社員として大阪に住し、數年前歿した。（大正

十五年歿六十三歳）大精公、松風村雨、聖徳太子、弘法、日蓮、親鸞等や其選集がある。歴史物語の世に行はれてゐるものが甚だ多い。戯曲、脚本にも數種の作がある。實錄の夕霧伊左衛門、山科閑居等が其である。萬朝報の黒岩涙香も樹立期の頃から通俗的の翻譯小說を多く出した。人外境、噫無情、鐵假面、巖窟王等無慮數十種に上つてゐる。

（八）倉田、永井、谷崎、長田、久保田、三田派

耽美派の一派として、古典派に自然派の色彩を加へた者を一類とする。倉田、久保田は稍や別趣である。倉田の出家とその弟子は、名高い作であつたが、全體の内容形式は、さして優れたものではない。序曲にハウストに似た死の擬人を用ひ、親鸞日野、親鸞唯圓、善鸞等と遊女などの五齣から成つてゐる。序曲も内容と應じないし、一の場なども拙である。會話も巧みではない。眞宗老僧の末期の心理と青年僧の生活及び信仰の矛盾などを主題として描いた者である。劇的ではあるが稍々不統一の感を免れない。戯曲に布施太子の入山や卅三人

集に教師等がある。說明的、誇張的の所がある。出家とその弟子は英譯本も數多出てゐる。

三田派の永井荷風は、古くは前期に中村春雨、堀內新泉等と人道派に屬するキリスト教物語、無果花、あめりか物語、ふらんす物語、夢の女等を出し、後には又轉じて江戶趣味を中心として自然主義に近づき、人生の慾望や誘惑の諸態を描き、遂に小山內、小島等と三田叢書を出した。谷崎は更に進んで刺靑、鮫人、愛すればこそ、お才と巳之助、惡魔等に性慾の苦悶を描いた。其等の中には變態性慾物も多い。其技巧も頗る巧みであつた。久保田は戲曲に法成寺物語、恐怖時代、無明と愛染等がある。長田には祇園、港の唄、沈む夕日、霧等、歡樂生活、遊里生活の諸作がある。併し大方家庭の愛情の波瀾や愚行を主材にした古風の筆致である。久保田は江戶趣味の芝居者、三味線の師匠等を描いたが、多くは人情本の趣味を出です、前者と共に稍々邪道に入つた感がある。

（二）戲曲派

戯曲作家には前期からの作家に岡本綺堂、松居松翁、山崎紫紅、中村吉藏、吉井勇、岡鬼太郎、山本有三等がある。綺堂には飜譯物が多數であるが、時代が不明で性格も充分に判然しない所がある。松葉の秀吉と淀君なども誇大的興味中心で、人物が非人間的である。紫紅には上杉謙信、歌舞伎物語等が有るが、技巧と誇張の舊手法が交つてゐる。中村の井伊大老の死、大鹽平八郎等は散文的である。此傾は吉井の諸作にも見える。後者には諷刺的の所がある。山本の作には社會劇が多い。逍遙の諸作に見えた非現實的、誇張性は尙此派の諸作家の通弊に成つてゐる樣に觀える。

（ホ）有明、柳村、蕭々、羅風、御風、童謠派

長詩界の新古典派には有明、柳村、蕭々、御風、羅風等が著しい作者である。

有明は前期の朦朧體から進んで、光明の人生を詠じた。大正四年の曼陀羅などに見える。柳村には佛蘭西象徴派の飜譯が多かつたが、詞藻が頗る古典味を帶び、茅野蕭々は古典調で

ある。

御風も古典的で良寛等を研究して雑草苑を出した。羅風は初は靜穏な詩趣を詠じたが、青木、木藤等から漸次基督教に近づき修道院詩集が有る。不自然な技巧が加はつて來た。南部には修道院の秋の作がある。日夏、白鳥なども此派である。

童謠派の詩人の作は、一般に悲哀的、感能的、空想的の性質が多く、淸新、剛健の趣が少ない。今の兒童に適してゐるであらうか。野口、西條等の作もさうである。

其四　新感覺派

新感覺派の現出は、自然主義以後に於ける文壇の新創造である。其傾向は早く前期の自覺派の中にも見えたが、此期には描寫上の技巧と相俟つて内部の思想、感情に沈潜せず、外界の刺戟世界との適應、變化、活動を文學の主想とする一派が、ぽつ〳〵增加して來た。之が所謂新感覺派の文學であつて、畢竟靜的文學から動的文學への展開である。其意義に於て立

體派の藝術なども同じ傾向にある。靜止美で無くて運動美を主相とする文學である。實に變化と勢力とが此派の文學の詩的内容である。だから此一派の文學が、詩人を中心にしてゐるのは當然であらう。

（イ）里見、佐藤

小說方面では里見の作に、手紙、母と子、强氣弱氣、直輔の夢、善心惡心、多情佛心等がある。題材は多く愚劣者の缺陷を描いてゐる。其技巧は詞美派又新心理小說派と云はれるだけに甚だ巧みで、稍々鏡花の作に似てゐるが、是に在ては內想や事件其物よりも、其等の要素の間に於ける感覺的氣調を主にしてゐる點が異つてゐる。

佐藤春夫は田園の憂鬱、都會の憂鬱、ＦＯＵ等の諸作を出してゐるが、稍々蘆花の追隨者たる佛がある。何れも詩的情緒と個性癖の多い作で、誇張を伴つてゐるが、又散文學の新感覺派と云へる。一體新作家達が個性を自己の文學上に重んずるのは、素より當然であるが、

矢鱈に狹小未熟で自我に即した文學であつてはならない。無論文學には、(一)自我の文學と(二)無我の文學との二類が有るが、(一)自我の文學で人生の不完全や愚行を表出したのは、創見的であつても餘り價値がない。寧ろ安易でも、(二)無我天眞の文學の方が可い。眞の(一)無我の文學と謂ふのは、勿論(二)自我の文學から解脱して、初めて到り得るものである。其意味で氏の旅行などは却つて面白い作である。正宗、細田等にも此派の作が有る。

(ロ) 白秋、佐藤(惣)、堀口

白秋は依然多作期で白金の獨樂、印度更紗、忽忘草等を出した。白金の獨樂はリズムに和讃の應用を工夫したが、佛教の思想は左して見えない。佛教と邪淫とを詠じた所などは倉田の出家とその弟子などとも關係があるらしい。技巧派に近く感覺的の象徴が多く用ひられてゐる。印度更紗は誇張の作風に傾き、忽忘草は古風の敍情斷篇集である。

和歌には桐の歌、雲母集、雀の卵など出でた。前二者には種々の試みが見えるが、尙空虛

の誇張味が多く、後者には啄木集に見た様な人生味、生活味が現はれてゐる。佐藤惣之助は季節の馬車に感覺と朦朧とした情緒味とを詠じてゐる。思想の發展は餘り見えない。斯う言ふ傾向は此派のみならず今の詩人の凡ての病所である。皆初級の思想を詠出するのみで、更に其上級の思想や内容への發展が見えない。感覺や情緒や人生觀や、滔々として斷想に浸つてゐるのは之が爲である。

堀口大學も亦此派に屬する作家で、口語詩を混じ稍々耽美派の傾がある。

ダダイズム Dadaism の傾向も此派と云ふ譯ではないが、文壇の新古作家が平調を失し、奇癖を表出する風尙に傾くに伴れて、追々現はれてゐる。汎世界的(コスモポリタン)で狂笑的の作風である。

(八) 和歌及び俳諧

歌人で此派に屬するは、前出白秋の雲母集、桐の歌が其例である。萩原朔太郎の歌も此派であらう。又西村陽吉、霞村、朔風等が大正四年から起した犁牛社一派の現代口語歌の中にも

生活派の中に稍々此傾向のものがある。これは反萬葉主義で、主に農村生活を詠じたもので、實は次派の思想が大分入つてゐる。

新俳諧は此期に入つて漸次具體的の進程を示し、其或ものは此派に近づいて來た。前期の新人生派に（一）碧派（二）井泉水派（三）生活心境派の三派が動いて居た事を述べたが、（二）井泉水派は印象的と云ふ以上、格別飛躍してはゐない。又三行書にする說も見えるが、是はさう良い事ではない。其中で（一）碧梧桐一派の新俳諧が最も新形式を示してゐる。碧梧桐、風間得直等の新俳諧を、舊俳諧に比較すると、凡そ次の諸點に相違を示してゐる。

	(a)詩性	(b)內容	(e)句調	(d)趣味	(e)形式	(f)句法
(一)舊俳諧	詠嘆的（優美）、	純粹詩味（古典的）、	和歌的流暢（輕快）、	風雅趣味	五七五、	定形的（拘束的）
(二)新俳諧	敍述的（努力）、	雜多豐富（個想）、	變化粗雜（重刻）、	田舍趣味、	不定初句五多	切字等無（散文的）

新俳諧の句形は十七音より大抵長大で、大多數は廿音から廿一二音迄に成つてゐる。否切

言すれば句形のみならず、新俳諧は舊俳諧の擴充運動とも云ふべく、其形式も其內想も、著しく附加的になつてゐる。其點に於て新俳諧は和歌への接近であると見られる。

初句は五音が多いが、又七八音が多く、三四音のものもある。下句に長音句が來る。卽ち舊俳諧のリズムは其句形の如く



形で中高式であつたが、今や新俳諧のリズム形式は



又は



の如く、明かに下重式に變化した。エンタシスから クラ イマツクスに移つて來た。此點も舊俳諧とは大分性質が異つてゐる。

例へば次の如く新俳句の上句は(比較的)、舊俳句では下の句(比較的)に當るのである。だから其丈け散文的である。其と共に休む、此夕、背をさすなど云ふ附加內容を加へてゐる。

新俳句　　　　舊俳句

砂濱に休む、砂を足掘る、汐にじむ——砂濱を足にて掘れば、汐にじむ

テニス打つ音の輕やかに、此夕、友と——テニス打つ音の輕さよ、この夕

連立つて石段下りる、背をさす夕日――連立つて石段下る、夕日かな

稍々迫々こましく煩重な感がある。單に觀念又は情景を表出する代りに、觀念（十）情景の句である。餘程複雜化したものになつた。其點が個性、個想卽ち詩人の特想を詠出し易いと謂はれる所以である。今迄の俳句の詠歎的、靜的な詩趣から、更に動的、個性的の詩趣に入つたものである。新俳句に對する近頃の批評に卑俗主義と云ふのは、斯派に於けるから云ふ方面や、心境派の題材の雜駁な所を指したものであらう。

此新俳句はまだ其詩形や詩趣が定立したものでないから、今後尙幾多の變移を見るであらうが、大體の傾向は古典的の輕い風雅の詩から、漸次散文的の重い詩力の詩の方向に向つて進んでゐる。從來の俳句と云ふ考から謂へば、隨分大きな反逆であり、解放である。其間に或調和態を見出して、舊俳句に對立する事は考へられる。新形式としては尙幾多の研究すべき點が殘つてゐる。

今序に近來の俳諧文學の流行について一言するに、前期に子規の蕪村研究を唱へてから俳

諧の新趣味の研究が大いに起つて芭蕉研究になり、其角趣味となり、鬼貫宗となり、最近一茶研究が大いに起つてゐる。句集、全集の刊行や註釋書の出版が相繼ぎ、合評の流行となつて俳諧趣味は新文藝と大分に接近して來た。一茶の刊行は、信濃教育會等で既に行はれてゐる。今後の一茶研究は其等の全集に依つて大分新生面を拓くであらう。一例を擧げれば今迄一茶の散文は大分古典的趣味に富んでゐて、句風と異つてゐた。田舍出の一茶としては、怪しまれる程であるが、是等の研究に依つて、一茶が絶えず古書古文書に親しみ、熱心に勉强してゐた事が判る。

併し流行に依つて文學を味ふ事は又危險が伴ふ。黃金時代の名が文學史の研究に煩ひとなる樣に、大詩人、天才の名は往々にして讀者を盲目にする。文學に對しては唯虛心忠實の賞翫が必要で、共に依つて出來る丈け正しい自由な文學上の識見と認識を得る樣にするのが望ましい。敎育上などでは殊に此點に對する注意が緊要である。

一茶の俳句に於ても現在一般社會に稍々過信されてゐる傾が有る樣である。文學には其內

容に依つて、(一)個人性の文學と(二)社會性の文學とがある。前者は個性、人間味、生命の文學であり、後者は性、運命、純愛、生活等に即した階級文學である。蕪村や芭蕉は此個人性文學のタイプである。一茶を此點から見ると無論個性、生命の文學である一面が、可成著るしく出てゐる。併し一方に於て其生活や趣味に於て、素朴的、平民的の所は、階級文學たる色彩が餘程深い。乃ち一茶の俳句は個性文學を骨子とする階級文學である。平民社會の人間生活に同情した文學である。純個性文學の芭蕉や蕪村とは異つてゐる。其點は人道派の色彩を帶びてゐる。今の新人道派の文學と稍々近い性質が見える。

彼の句は又平民的、素朴的で、可笑的人生味を詠じたものが最も多い。意外を原因とする滑稽味が非常に使はれてゐる。自然味も亦豐富である。けれども隱遁的で社會味が左迄有る句ではない。又芭蕉などの生命とした風韻の方面も乏しいものである。其閑寂味も形式的で卑近な所や、卑俗な所がある。句形も單調で初五から一連的の句が最も多い。乃ち――――が大部分で、――――――の形式が稀に使はれてゐる。孰れにしても芭蕉や蕪村――此二

人も大分相違が有るが――に較べると、詩趣俳味が大分劣つてゐる。只其俳想が輕妙自由となり、平民的詩風に入つた點は、今日の文壇の近代的思想などに同化し易いのである。さう云ふ事は勿論蕪村時代からも推移した文壇の時代的影響にも由つたので、江戸の俳人社會を遠ざかつて居た丈け、其個性的俳風が比較的自由に發展したのである。一茶の俳句の詩趣の貧弱な所や、又新たに開拓した方面は、今後尚大いに研究すべき點である。

其五　平民階級派

近頃の社會上、政治上に於ける階級意識の發達や、經濟的、文化的思想の普及に伴れて、勞働者、農村青年等の自覺を促がし、文學上にも其方面の思想生活を內容とするものが、漸次勃興しかけてゐる。此派にも大別して、（一）特殊的と（二）一般的、若しくは（一）意識的と（二）無意識的の二種類がある。其（一）特殊的、意識的の一派は、卽ち平民階級文學（プロレタリアート）の主張者である。雜誌界にも文藝春秋と文藝戰線の對抗がある。

（イ）賀川、福田、小川、本間、江口、片岡等

賀川には死線を越えての如き小說があるが、此派の作家の多くは詩人である。古くは尙江の火の柱や良人の自白等が原流になつてゐる。其詩風は反感的に世界的、階級的、鬪爭的精神を詠出し、生活、信仰、自由、自然を强烈に謳つてゐる。其シーンにも支那や印度が出たり、工場などが主なる場所の對象に使はれ、又都會藝術に對し農村藝術を主張する一派や感覺派、印象派に反對する新現實主義派もある。西村は口語歌の主張者で、本間、小川未明、江口、片岡等は此方面の評論家である。此派の文學の特質は一般に實行性を多く有してゐる。其描く所は生活難者とブルジョアとの對立を主眼とし、前者に（一）破壞的（二）自暴的（三）鬪爭的の內容を、後者に（四）享樂生活（五）背德生活の狀態を賦與し、概して著しく（六）刺戟性と外國語等の（七）新語性とを示してゐる。是等の中には實際運動家としても、危險な主義も含まれてゐるし、又文學上の見地からも、階級思想を目標として鼓吹する

のは好ましい事ではない。文藝としては常に其以上の見地に立たなくてはならぬ。只社會生活が尖鋭化し分化するに伴れて、各種の社會や階級を代表した文學の出現する事は自然の勢と云ふ可きである。

（ロ）ジャーナリズム

以下三派は（二）無意識的、一般的の平民階級派である。ジャーナリズム Journalism の語義は新聞雜誌業の事である。其から轉じて新聞雜誌等に現はれる時事の流行的評論、作物の類を意味する樣になつた。種類と發行部數の激增と共に大流行をなして、文學雜誌の發行は中央丈けでも二百種以上に上るであらう。（明治四十二年雜誌二、二四七種中文學一四三種）非常に流行力が大きいので、さう大作は出ないが、其量の上から時代の文學上、文化上の勢力が中々盛んである。米國に於ては此種の文學が殊に盛んで、ポイントンのジャーナリズムと文學、ジャーナリズムの本質等の研究も出版されてゐる。又有島のジャーナリズム排斥論や其反對に文藝として認める

說もある。

ジャーナリズムの通性には（一）新鮮（二）無邪氣壯快（三）公正なる常識（四）敏速、（五）淺薄（六）誇張（七）平易文たる事などを擧げる事が出來る。其性質上淺薄になり易く、挑發的、俗惡的になり易いものであるト、最近殊に其傾向が甚しい。從つて其點に對する向上を計り又選擇を適當に加へる事が必要である。

中にも少年時代及び靑年時の雜誌の影響は、案外に强大なものであるから、其注意が大切である。現代の新聞に於ても批評や三面記事の調子や廣告等が、著しく俗惡、野蠻化したのは歎ずべきである。

（八）通俗文學

通俗物の小說、探偵物、歷史物、講談物等を含んでゐる。前者と共に大量文學（マツスリテラチユア）、又大衆（マルチチユード）文藝（リテラチユア）などと呼ばれる。其種類や刊行の數は非常に多い。探偵小說選集、歷史物語傑作選集、世

界大衆文學全集(卌六卷)などが出てゐる。作家には菊池、大佛、白井、直木、長谷川等が著はれてゐる。大多數は幕末時代物を題材とし、描寫上に(一)動亂的(劍劇風)(二)階級的(三)史實的(四)エロチック(五)近世的等の種別がある。併し新聞に見えたる豐太閤の講談などでも、全く秀吉と云ふ英雄人物を知らない話し振りで、全體とも興味索然たる感が多い。斯種の通俗物の上にも愈々選擇と改良とが必要である。作者も出版者も只大量を欲して粗惡な物でも出してゐる。其等を店員などは盛んに讀むので、國民的影響は大きいのである押川春浪の冒險小說なども、少年學生に大きな影響を與へた。

(ニ)活動映畫、童話、童謠、御伽劇

是等も大衆文藝の一つで近時の流行は實に驚く可き勢である。活動映畫に對して幾分檢閱の機關はあるが、尙一般に殺風景、無趣味、劣惡のものが多く、其影響は種々の方面に惡感化を與へてゐる。今日は普通の演劇などに較べて數千倍であらう。フイルムの長さは日本丈

けでも一年間の撮影高は驚くべき距離に上り、地球の周圍を何百回か捲く相である。出版にすれば非常な量である。其影響の大なる事推して知るべしである。頑是ない少兒語にも冒險、格鬪、衝突等の用語が行はれ、辻賣の映畫說明が流行し出した。映畫傑作集なども刊行されてゐる。新聞の廣告、公衆に於ける魅力等殆んど映畫時代に入つた觀が有る。斯種の大衆文藝は、凡て取締りと敎化の兩方面から適當の指導機關を設けて改善を圖るのが急務である。今日の狀態は尙幼稚である。

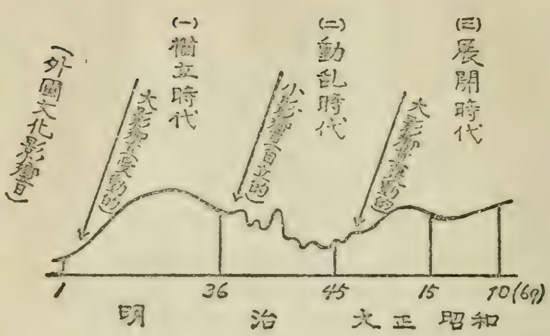
童話、童謠界も著しい流行時代に入つて、集會ロ、新聞、ラヂオ等で盛んに行はれてゐるが、未だ一般に無趣味か、然らざれば技巧的に流れ纖弱で悲哀調のものが多い。少女間に流行する爲か、女性的である。今少し趣味と健全味を加へる必要がある。詩人の作が前にも述べた樣に稍々病的、畸形的に傾いてゐる事も一原因である。映畫の流行唄の如きも詞調共に柔弱である。世界童話大系等に見える各國の良い物や、我古來の民謠、神話等を參酌して、文藝趣味からも敎育上からも一層趣味の豐富で健全なものが兒童世界に與へられむ事を望む。

お伽劇も亦現在の一流行である。童話、童謠が文學、音樂の萠芽であるならば、是は演劇の前身であらう。現代は實に音樂、演劇の流行する氣分が旺んである。今日の其等を小波のお伽噺時代に比すると、餘程變遷がある。外國のものも多く這入つて來たし、新作も中々多く現はれて來た。著者も先年今昔物語集の中から百話を譯出して刊行した。今昔百話新譯を刊行した。是等は近世の國民傳說の更に源泉時代の談話を集めたものである。新作の物語は猥りに外國風に模す許りでは不可ない。我國民性に適當したものを與へる樣にしなくてはならぬ。一體外國人は昔から我國を非常に東方の神秘國、お伽話の國として思慕してゐる。前記のハーンの書などにも其感情が溢れて見える。其他外人の來遊した印象記には、大方皆我國を神秘の島の國として、認めてゐる。島が神秘性に富んでゐるのは南洋諸島の歷史などに著しい。萬葉の人丸の歌にも其種の詠が多い。今日でも伊豆半島や島根半島などに遊ぶと、島に神代の感を催す事が屢々ある。其れに似た感じを西洋人は我國土の全體に抱くものと見える。そして其神秘性からお伽噺の國と見ると大抵は記してゐる。

然るに我國のお伽話には、實際さう云ふ神秘趣味の十分に培はれてゐるものは全然見えないのである。尤も古い記紀の神話などには、素尊の出雲降りとか、皇孫の海島話等に神秘的の趣味の豊かな話が傳はつてゐる。けれども、一般に行はれるお伽文學には斯う云ふ種類の深い感情が採入れられてゐない。その點では西洋の作には、中々文學的に優れた作がある。マーテルリンクの青い鳥などもお伽噺として非常に優れた空想と趣味を示してゐる。是は夜の象徴劇であつて、技巧は中々複雜であるが、無邪氣で趣味が高尚、幽妙を極めてゐる。多くの超自然力や擬人を用ひ、巧みに人間の眞の幸福卽ち青い鳥の何れに求むべきかを訓へてゐる。單に兒童物としては、少しく複雜に過ぎる感があるが、我國の作などより遙かに藝術趣味が籠つてゐる。さう云ふ長所は採つて今後の兒童文學の進歩に資す可きである。そして一面には我國民的氣象を鼓吹する樣な雄大なもの、男性的のものが矢張り必要である。

其六　結語と總評

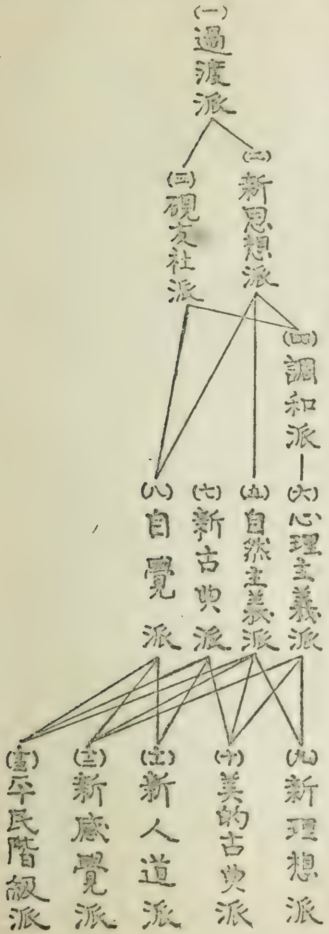
（第一圖）　現代文學發展曲線圖



上述した所に依つて見れば、現在文壇の諸派は大正以來の短時日の間にも、又幾分派して今尙刻々動搖しつゝある事が判る。今後も尙幾多の分流を見るであらう。此期に於て文壇の巨星が多く歿した事も一の注意すべき現象である。展開期と呼ばれる如く、其文學的傾向は多探的展開にあり、其一般的性質は青年的新思想を示し、內容的には思想、智の文學であり文學的狀態は世界的となり、其運動の方向からは、遠心的の世界的思想運動時代であると謂はれる。青年的思想の新たに勃興し、高潮した新文學期であるが、一方に老年期の性質もある。其點に於

て此期の波動も亦勢ひ老年派を代表する（一）思想派、理想派、上流派と青年派に依つて展開された（二）感情派、罪惡派、平民派との複合的合成派の進展であると認められる。此等の波動の性質や强さは、今現に生滅起伏して盛んに推移しつゝあるのである。そこで以上の三大時期たる明治初年の樹立時代から動亂時代を經て、展開時代に至る文學波動の發達を曲線に示すと、第一圖の樣な形を取る。

（第二圖）
現代文學發達變遷關係圖



又現代文學の三時代の間に發達、變遷した關係を纏めて見ると、第二圖の樣である。

更に三時代に於ける我文學の發達を、文藝の質の方面から見ると如何であるか。先づ(一)主題の方面では、樹立時代は空想的に戀愛を、動亂時代は現實的に慾望を、展開時代は自覺的に現實及び理想を取扱つた變遷があつた。次に(二)文學の中心思想、描寫の骨子とも云ふべきは、初めは理想と現實との間に於ける人情、換言すれば人情世界を、次は理現の分裂即ち苦惱世界を描き、終は理現の分化、均衡の間に、文學の性質が種々に發展したのである。

一體文學の性質には、希臘以來の(一)クラシツク文學 Classic Literature と、中世以來の(二)ローマンチツク文學 Romantic Literature と、近世に到つて發達した(三)リアリスチツクの文學 Realistic Literature と云ふ三大種別がある。(一)クラシツクには抒事詩(エピック)、抒情詩(リリック)、戯曲(ドラマ)の三分法が行はれ、別に韻文(ポエツトリー)、散文(プローズ)の二大別があり、後に小說(ノーヴエル)と說話(ローマンス)の二類別が散文の上に行はれた。

- クラシック文學 Classic L.
  - (1)叙事詩 Epic
    - (a)韻文 Verse
      - (一)小説 Novel
    - (b)散文 Prose
      - (二)説話 Romance
  - (2)抒情詩 Lylic
    - (a)韻文 Verse
      - (一)小説 Novel
    - (b)散文 Prose
      - (二)説話 Romance
  - (3)戯曲 Drama

乃で右の三大文學を、現實味と空想味なる二要素の多少から區別すると、第三圖（一一五頁）の様な諸文學間の關係が有る。

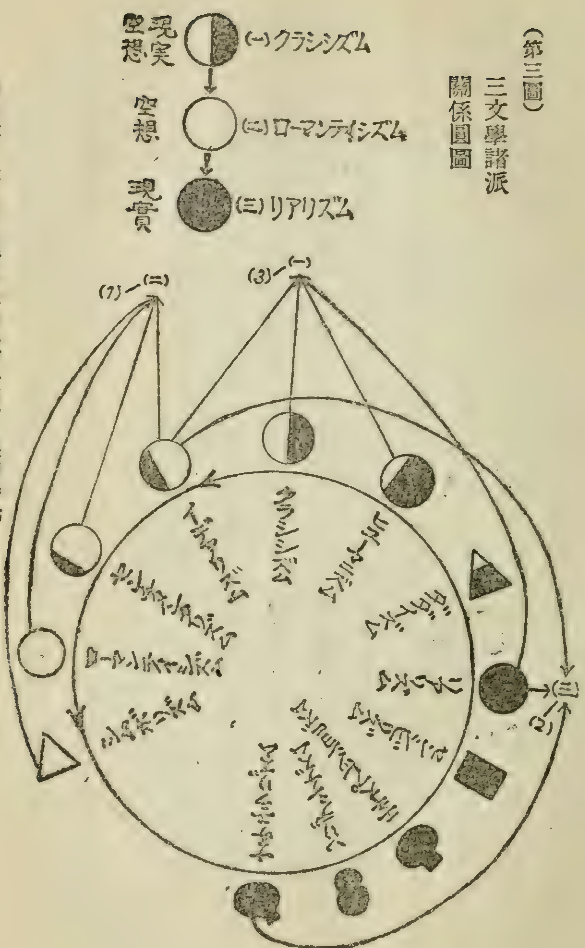
近代の文藝は主として現實味の方向に發達してゐる。自然主義とは近い關係にある。比較すると

自然主義＝現實的 ─ 意慾全力 ─ 衝動生活 ─ 個人的 ─ 盲目的 ─ 局部的描寫

象徴主義＝空想的 ─ 强觀念全投人（殊心熱的象徴）─ 衝動意慾 ─ 特異的 ─ 危險性 ─ 微小物集中

感覺派、表現派、立體派＝同性質の生命活動の文學

（第三圖）三文學諸派關係圖圖



是等を上の三時代に當て嵌めて見るに、我邦に於ては(一)樹立時代の文學はローマンチシズムを中心とし、イデアリズム、センチメンタリズムを含み、空想文學の側に在り、(二)動亂時代はナチュラリズムを中心としてクラシシズム、リアリズムを加へて進み、(三)展開時代はリアリズム、ヒユウマニズム、イデアリズム、センチメンタリズム、クラシズム並び行はれて、最も複雜な分化を示してゐる。空想、現實混合の狀態である。而して文學界に現はれた主義、運動から見れば、第一期の寫實主義から第二期の自然主義に入り、更に第三期の自我生命創造主義への發達を經てゐる。受動的より活動的になり、次いで自覺的の文學になつた。文學論も此三期に夫々代表的に起つて、亦三段の發達時期を示したのである。

偖現在の文壇を老年期の側から見ると、六十有九年の發達を經てゐる。前の波動的觀察の場合に、外國文化の影響に大小ある事を述べたが、斯樣な急激な革新時代に外國文學の盛んな影響を被つた時代を、歷史的に比較して見ると、現代文學の形勢を知る上に興味ある結果を得ることが出來るのである。

我國で外來文學、若くは文化の急激な大影響を被つた事件は、第一は應神帝朝の儒教文學の傳來の例、第二に欽明帝朝佛教傳來の例、第三には殊に文學上の好比較として平安初期に於ける漢文學の影響の例が見出される。此等の例について六十餘年頃の發達の性質を見るに第一の儒教文學傳來の場合には六十九年は仁德帝朝の三十九年頃であるが、其狀態は難波宮が榮え、新羅攻戰が屢々行はれ（神功皇后征韓の史實と關係す）河内の田四萬頃を開いた事などが見える。更に六十餘年後の履中帝朝に到つては、諸國に史官が設けられてゐる。

第二の佛教傳來の場合は推古帝の三十年頃から六十九年代に當るが、其頃は所謂推古帝朝の高潮期で、大寺が續々建てられ、隋使の交通が頻繁に行はれ、聖德太子の憲法、歷史が編まれる等、我國の文化が大いに興つた。此百年後に至つて所謂天平朝の盛代が出現したのである。

第三の平安初朝の場合は仁明帝の承和十一年に當り、遣唐使が往來して風俗の奢侈古今に冠すと評され、宗教界には傳教、空海の二僧が新教を創め、經國集、秘府略が編まれ、日本

後紀等の國史が記され音樂が勃興した。之より三十餘年後の貞觀期には國文學の勃興を見たが延喜の盛朝迄には尙七十年を要してゐる。

是等の各期に於ける外來文化の影響及び其受容の性質を比較するに、第一の場合は繼續的——利用的であつたと謂ふ事が出來る。第二の場合も繼續的——利用的であつた。而して第三の場合は中止的——同化的で、そこに大國文學が起つたのである。

然るに明治以來の西洋文化の影響は、勿論繼續的であつたが、寧ろ增進的と云つた方が當つて居り、世界的に進んで來てゐる。そして其受容の性質を見るに、增進的——利用的、模倣的である。

前述の如く大體國史上に於ける外國文化の大影響の結果を見ると、次の樣に概括される。

(一)五六十年後に盛觀期を現出する。

(二)大なる全盛期は更に七八十年又は百年後に現出する。

(三)隆盛期に外來文化に由る者と、內造文化に由る者との別がある。

(四)受容の性質に利用的、同化的等の別がある。現代は利用的、模倣的である。

(五)各外國文化輸入革新時代に一定の理想があつた。(1)は道の思想で倫理的(2)は智(信)の思想で知識的(3)は美の感情、換言すれば文雅の思想で趣味的。

現代の場合では人及び國家の觀念を開張するに在つて、其根柢は人格の思想にある。卽ち一貫して敎化的、文化的のものと謂ふ可きである。人格の思想から發して人情とか自覺と云ふ事が、文學の中心に描かれた。例へば平安時代の代表的作物たる源氏物語――空穗物語の方が早いから、此の場合には適當してゐるが――など見ても、飽迄趣味文學で、其中心思想はものゝあはれ、卽ち美に在つた事がよく見えてゐる。然るに現代の代表作に金色夜叉を採るならば、是は何處迄も人間の生活を主とする婆娑文學で、其中心思想は我國民の人情の點にあるのを見るであらう。人道派、人生派の文學を見ても同樣である。矢張人間性の開展や國民生活の敎化と云ふ事が根本になつてゐる。

(六) 影響の量的性質には大小があり、繼續的、中止的、增進的の場合がある。

現代は先に述べた樣に、大影響の增進的の場合で、尤も量的に發達した場合である。過去の事例を見るに、輸入文化の大影響ある場合には、其受容の結果も益々重大深刻に發現するのが常である。

（七）之を以て見ても現代文學に於ける同化現象も今後益々盛大に趨くであらう。其點に於て明治以來の西洋文化に接觸した文化を同化した國文學が、內發的に發現するに至るのは、尙六七十年後の事であらう。今日は文學者も教育者も批評家も相共に、我國文學の發達の事業――國民文化生活の良化に眞劍の努力を要すべき大切な準備時代である。

第四章　文學藝術論と將來の日本文學

其一　文學論の變遷と卜氏の藝術論

現代文學の發達に伴れて、文學論、藝術論にも幾多の時期と變遷が有つた事を叙べて來た。例へば新思想派に於て、(一)鷗外一派の說には美は假象である。藝術は具象の間に、永遠の美理想を描くにありと論じた。一方(二)逍遙は理想小說を排して、寫實的、報告的の文學が本體であると論じてゐる。又(三)文學界一派の信奉した文學論とも謂ふべきは、藝術の爲の藝術の思想を含んでゐた。其間(四)調和派の標牟の文學論には眞善美を解し、自然と同化する高尙のもの、幸福のものが文學であると云つてゐる。(五)更に人道派の有島の如く藝術は生活である。本能的愛の創造的生活に外ならぬものであると說く者もある。

是等の說は大抵外國の文學論に依つて唱へられたもので、夫々當時の時代精神や美學、心理學等の傾向を示してゐる。其事は前の叙述中にも多少の批評を加へて置いたが、玆では更に現代文學に永い間、直接間接の影響を及したトルストイの藝術論を紹介し批評して私見を述べて見よう。トルストイの藝術論 What is Art は自ら十五年を費した努力であると謂ふ如く、非常に忠實な態度で古來の美學說、藝術論を引證し檢討して頗る研究的に出發し、更に實際の歐洲文學を引いて自己の文藝觀を以て批評を試み、最後に自己の新藝術觀を述べたもので興味の有る著述である。

彼は先づ藝術現象の犧牲の大なる事、其勢力の人類生活上に大なる事を擧げ、反神學的藝術系統に舊ローマンチック派を出して、之にパルナッシャン派とデカダン派と有り、後者に象徴派が屬するものとし、又近時の小說を自然派、心理派に分類してゐる。次に藝術と眞善美との關係の諸說を擧げ、美の本質論について數百家の說を引用してゐる。其美の本質論が結局は國民性に根據すべき事を云つてゐる。所で露國では美をクラソタと云ふが、見て美し

い事である。近頃は美の代りに善惡を示し、美行、美歌など云ふ。歐洲では大抵美は善及び親切と近く用ゐられるが、露國では善の中に美を含み、善に代用されてゐる。古語ではさういふ意味ではなかつた。美しい音樂といふは、近世歐洲化の影響に過ぎない云々と述べてゐる。

此點を國語に見るとき、善はよき、え、惡はあしである。美醜はうるはし、うつくし、きよしと、きたなし、みにくし、しこ等云ふ。別にうまし國、うまし男等のうましに美を示してゐる。うまい歌などいふ。うましは甘しで、味覺に出た語であるが、美醜又善惡に轉じてゐる。古く天岩戸の祝詞に、うるはしき詞など見えてゐるうるはしは心美で、心快き意である。俗にうれしとも云ふ。めでるは目愛で、視覺美の方である。卽ち心美と視美との區別が在つたのである。併しえ男、よき歌、淸き心とも云ふ。我國でも古く美醜語、善惡語の區別は在つたが、上代からして混じて用ゐられてゐる。美と善とは混同された事が多い。バウムガルテン以來ギュヨウ、ヴエロン等にト氏は更に美學の發達と諸說を擧げてゐる。

到る近代美學說迄を網羅して、そして（一）美を獨立客觀的、觀念的、神秘的の完全な存在性のものとする者と、（二）美を主觀的特殊の快感に有りとするものとに分ち、此の二派は相共に美を慾望無く快感を起すものであるとする點に於て同一であると見た。鷗外や樗牛の說はさう云ふ思想に出てゐる所がある。併し彼は斯種の美學は主觀論も客觀論も定義し難いもの、確定し難いものであると云つた。乃で趣味論、批評論も困難になる。其方法は古來の大作家を評論して、美學法則を立てるのであるが、或は進んで自己の藝術論に適合させるか、又は古來の多數の作品から法則を求め來るかであるが、何れも難しい事である。是畢竟美の觀念を快樂等に求めるからである。藝術觀を正當に立するには、それを快樂視せず、人生必須の條件、卽ち人と人との結合の手段と見るが可い。然らば藝術は人類を幸福に向はせる必要の手段である。藝術家は指導者である。藝術の高下は時代の宗敎觀念に依つて決せられる、卽ち藝術は善、眞、信等高等の感情を傳へる點に於て大切であると敍べて、宗敎的藝術觀を主張し、中世藝術を以て最高の價値が存するものである。

斯くして眞の藝術と快樂藝術又は僞藝術とを食り、無宗教、興味本位、虚飾、不自然の藝術を排斥し、近時の藝術殊にデカタン派の藝術（佛蘭西文學）を引例して難解不明であると云ひ、未來の藝術は明瞭と美と緊張と一般化とを要し、普通生活中の藝術人が多數出る事を要し、共に依つて愛の王國を建設し科學の發達を補つて、同胞的結合をさせるのを使命とすると說いてゐる。

斯の如きトルストイの藝術論には、頗る傾聽すべき眞理と努力とを含んでゐる事は、何人も否み難いであらう。さう云ふ點がら現代の我文壇にも影響が大きかつたのである。併しトルストイの說には又幾多の難點をも伴つてゐる。（一）ト氏の此研究には獨佛の影響が餘程大らしく、學說上には獨逸、文學上には佛文學の影響が非常に多い。（二）美學說の批評としては、學問的には尙幾多の批評が加へられる。文學上の難解等の評にも稍々偏し過ぎた感がある。（三）前半の理論から後半の實際に移る所が稍々突然である。實際氏の作物は偉大で、其點では我國の文學論と作品との間の不均衡の樣な事は無いかも知れない。（四）現在の歐洲キ

リスト教國文藝に對する革命的の批評として、頗る偉大な根抵力を示してゐる。(五)併し其宗教藝術論、中世的藝術觀は自由の立場に在る藝術觀としては、實際の歷史的事實にも合しないし、理屈としても中正でない所がある。是等の難點にも拘らず氏の藝術論に於ては、其文藝を眞面目な人生の仕事であると高調した所に價値があるのである。氏に依れば沙翁の文學の如きは、尤も愚劣醜惡なる文學は極端な場合で在るが、多少さう云ふ意味もあるであらう。是のみならず歐洲の國際間に於ける文藝批評に、我邦人に取つては歐人より見た丈け興味有る所が少なく無い。

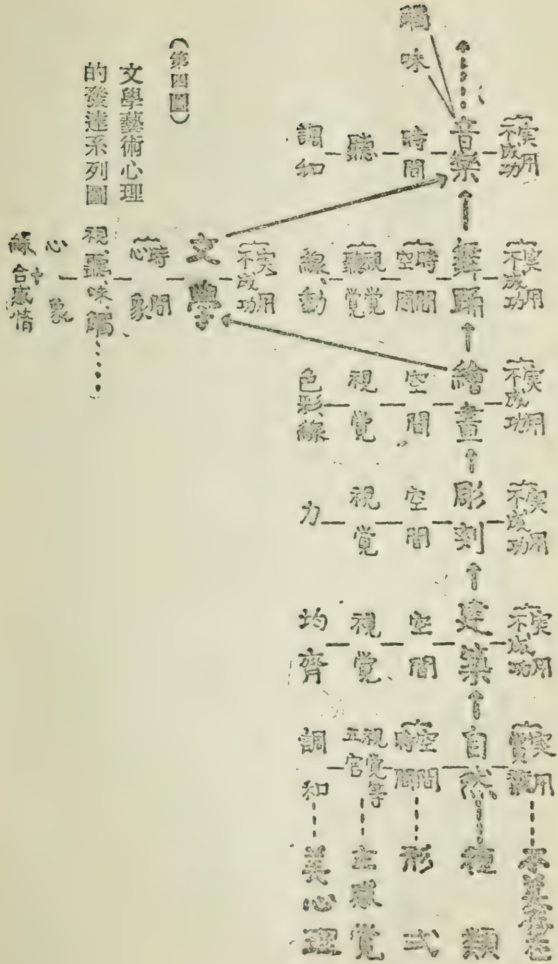
結局文學は其理想として人類一般、世界文學と云ふ樣な點に達す可きであるが、實際の根抵として國民精神、國民性の骨子の非常に大切なものである事を知らなくてはならぬ。

以下少しく著者の管見とする文藝論を述べて見よう。

其二　藝術と文學

（一）藝術說

藝術は歐語 Art の譯である。我國でも古くから藝術と云ふ語は行はれたが、其は狹義の文技の義で用ひられ、其意義が狹く且淺かつた。藝術の語が深妙の意義を有するに到つたのは、西洋流の Art の思想が入り來つてからである。Art は希語に Ars と云ひふに出で、技巧又は一定の術の義である。其語源は Ar 即ち適合する意である。たくみ、わざ、又はしかたと云ふに當る。其分化が漸く一定して認められたのは音樂、繪畫、彫刻、建築、詩歌の五科である。文學と對して云ふ時は詩歌を省き、又文學の意で用ひる時は詩歌のみならず、散文をも含めて謂ふから、元來の意義より稍々推し廣めた用法である。繪畫、彫刻を殊に美術 Fine Art と云ふ。今各種の藝術活動の心理的發達系列を分拆して考へるに、第四圖の樣な關



文學藝術心理的發達系列圖

（第四圖）

係が有る。

此系列は必ずしも發達史的のものでは無い。主として運動系列又はリズム系列である。藝術の神秘派 Mysticism、靈異派 Occultism or L'étheisme、惡魔派 Dadaism 等の說にエールテル Ether のに依るもの氣發 Aura する靈氣が大腦穹頂 Fornix に作用し、外界の靈素と移入（アインフユールング）をなす時に美を感ずる。これ五感以上であると云ふも、實際は斯く迄誇張すべきものではなからう。

各藝術の目的は皆美を目的としてゐる。感覺の活動から直ちに綜合的感情を喚起する。これがトルストイの論などでは反對してゐる所である。併し創作の心理は單に力共物や幾何圖如きものではない。乃で藝術の通性は人生の美想を物に依つて表現する事である。即ち創作的の現象である。その起原は極めて古い。殆んど人類の原始時代からである。我國先史時代の土石器の模樣の類、又歐洲に於ける馬、牛等の動的の繪畫、模樣の彫刻、記號等の例が其である。是等は實用的のものではない。全く藝術的の特別の心理活動から現はれたものである。

（二）文學說

次に文學について見よう。文學 Literature の語も亦希語の litera も一般的の文書の義である。廣義の文學の定義としては、著者は曾て次の樣に說述した。（今昔物語集の新研究參照）

（1） 美的趣味を動機とし、人生及び自然の一部を、其眞諦に卽して表出したる詩歌及び散文を云ふ。

又文學の影響、作用の方面からは、同感說が成り立つ。

（2） 自己及び時代の感情を具體的に表出して、他人及び時代に同感せしむるものである。文學の分類には種々の方法が有る。

（a） 廣　義 — 凡ての文學的作物
　　　狹　義 — 美文學 Bell-lettre

（b）輕文學—Light-litterature
　　雅文學—Polite-litterature

（c）低級文學
　　高級文學

（d）遊動文學
　　固定文學

文藝は此二者を合んで廣い。古く無量壽經に釋尊の多能を云ふに算計、文藝、射御とある。これ聖徳太子頃より我國に輸入された經典で、從つて此語の行はれたのも古い事である。前掲の藝術活動の所で文學の活動は、繪畫と音樂との中間にある樣に記したが、遊動文學の或ものゝ如きは、音樂 Music に近いものである。其活動は半ば時間的に、半ば心象的 Conceptive に受容せられるもので、他の藝術活動の單に感覺的なのと異つた特質を爲してゐる。心象的の性質は繪畫にもあるが、文學では繪畫よりも更に多い。其を定義にすれば

（3）文學は人生相の一部（人生の美想）を、言語文字に依りて表現するものである。

大體から云ふと報知的のものである。文學中の物語 Narrative が早く發生したのは此性質に由る。歌謠 Song も藝術の中に含まれてゐる丈に起原が早いが、其初期のものは創作的の即興詩に近いものであつたらう。報知的の物語歌 Narrative-poetry が發生したのは、稍々後

である。

（三）心理說

次に文學作用を今少しく心理的に考察するも、矢張作者、讀者、時代に分けて見るのが便である。（1）創作心理　作者が直接生命的に、美的に（動機）、人生相の一部を（創作）、言語文字に依りて（創作）、表現する（個性）、作用である。美的に表現すのが文學の特質である。もし直接生命的に、智的に表現したならば、其は哲學である。文學と哲學と共生命的表現である所は同一である。勿論一方は認識で眞理を目的とし、一方は創作で眞理――永遠相を目的とするの相違はある。

（2）賞鑑心理　讀者が創造されたる人生相を知りて（經驗）、美的趣味及び自己の生命の（動機個性）、向上完成に資する（努力）作用である。

（3）社會心理　卽ち社會的影響の作用である。個人及び社會の共同的なる全文化的向上へ

の努力となり、國民的精神の發達を鼓舞し、人道の進歩の原因となる。右の表現の對象即ち文學の對象は、人生中の眞理と本相即ち永遠相とである。是が所謂人生の美想である。勿論人生相の一部は千差萬別で、現實暴露の悲哀や醜の一面も入り來るが、描寫の目的は其中の永遠相で、そこに人生の美想が在る。此點より見て文學は單なる報知、寫眞ではない。自然主義乃至寫實文學が、最上の文學たる事の出來ないのは明かである。

又美的と云ふ事も必要の要素であるが、實人生中に於ける美的創作及び美的賞鑑とは自ら別である。實人生中に於ては利害關係に依りて行はれ、又或程度迄に止まる。云換へれば不純且制限的である。之に反して文學中の美的は完全なる美的、自由美的である。文學に於ける美的の要素は、實に一切の作用の上に結合する。動機自身がさうであり、創作は二つに分けて(一) 實質的——人生相(二) 形式的——言語、文章であるが、共に美的であり、個性的表現も亦美的となつてゐる。是は矢張他の藝術に於ても凡べて、美的創造であるのに似てゐる。直接生命的なる性質に於ても同樣である。

上の定義に於て明らかにすべき內容は、美、生命、自然、善、知る事(經驗)等の義である。

(四) 美の說

美には古來種々の區別がある。

(a) 純美・壯美

(b) 人情美・自然美

(c) 活動美・靜止美

(d) 陽美・陰美

(e) 調和美・色彩美・形體美

(f) 量美・質美

美は一種の心的活動であり、古來美意識と謂つてゐる。即ち本能的、先天的美意識の滿足が美的活動である。これは綜合感情の活動である。美は其自身の要素からも、心的活動の狀態より見るも、一種の運動である。殊に律動的運動である。故に美は人類の綜合感情の律動的(リズミカル)活動であると謂ふ事が出來る。近時の美學說に感情移入說(ゲフユールアインフユールングステオリー) Einfühlungstheorie と云

ふのがある。對象活動に吾人の感情を投入して感得すると說く。けれども上の作用から見ると移入にあらずして、寧ろ美意識活動は、一種の吸入作用 Einziehungstheorie と謂ふ可きであらう。(吸入作用 Einsaugungstheorie) 畢竟外界に對する共鳴作用、又は同情作用である。又美的假象說 Scheintheorie に云ふ如く、美は人生を逃離するものではない。美の無利害的と云ふは、綜合感情の要素が利己的のものでないのを云ふのである。感覺、感情に依つて美は人生に實在する活動現象である。すべて律動的、活動的感情の滿足に依つて生ずるものである。

次に生命とは何であるか。簡單に云へば吾人の全我的、個性的、中核的の自我觀念及び活動體系を謂ふのである。其內容の性質は內部律動的、新奇的、歎異的なものである。即ち生命其物も亦活動的、發達的、主觀的の意識狀態であつて、單に快感の謂ひではない。之に依つて作者も讀者も、生命的に文藝に對する事になる。故に人生の向上進步に關係する事が大きいのである。

文學の對象を人生相と云つて、自然と謂はなかつた。自然と文學の關係は如何であらう。

所謂自然とは客觀美であるか。遠山、波濤、天月の美は如何。殆んど普遍的の美である樣である。又花の美は如何。更に無人境の美は如何。或は暗夜の好景は如何。暗夜の好景は知る事が出來ない。無人境の美も亦知り難い。曙光來り、發見者上陸して、刹那に厭々たる美觀を看取する事が出來るのみである。然らば美は我に對する主觀的の產物であるか。或は自然中に美が有るであらうか。又は自然は美を營む物であらうか。けれども自然の好景は常に存在する。天心の明月に萬古變化する事が無い。これ一種の調和的存在である。此點より觀れば美は客觀的に存在する。

併し之を美と觀ずるのは、吾人の主觀に吸收されて、初めて美的內容を有し來たるのである。自然自體の客觀的美の形式は如何なるものであるかは、人類の知り能はぬ所である。只自然と他の藝術との相違は、其對象が藝術に於ては精妙なる部分であるに反し、自然は庭園等の如き技巧的のものは寧ろ例外であつて、普通には唯其自身である。又受容の感官も藝術に比して多岐であつて、五官に關してゐる。一定の美的形式と云ふものがない。之を美的に

感知するのは、吾人の神秘的、活動的、綜合感情の働きに依る。即ち自然の模倣と云ふも、實は律動的活動の投影に過ぎない。自然の無限の變化性は、美の源泉たるのに適してゐる。美は自然の模倣なりといふ說の有るは之が爲である。我無くして永遠の美ありと觀るは幻想に過ぎない。そは不可知的である。

但し個人の死等に依つては、自然中の美は不變的であつて增減する事がない。然らば美は主觀的の所產でなくて、國民又は全人類の先天形式の派生と謂ふべきであるか。兎に角自然の廣大無邊、無窮なる姿は、一種の律動性を有してゐる。之を受容し、美妙高大の感を爲すのは、人生の永久性に依るものである。個人では無い。畢竟千萬の美の調子は人生の創造であらうか。

(五) 善の說

次に美と善との關係について叙べよう。美は上述の如く吾人の感情の律動的活動である。之に對して善は吾人の意志行爲の道德的評價である。素より其本質が異つてゐるが、藝術の

目的が美に在る點に於ては、善は何等關する所がない。併し國語に於て美と善とが古代より混同されたのは、作用の類似と云ふよりは、共理想とする人生向上の努力の目的に於て相類似するからであらう。且又文學の心理作用に於て、人生相の一部を創造するには、云ふ迄もなく善の理想と直接に大關係が有る。表現に於ても亦相關係してゐる。且讀者の自己生命の向上完成にも善の要素が大きい。故に全體として見る時は、藝術に於て善は大なる關係がある。トルストイの說いた樣に宗教文學に、善文學を力說したのは當然である。

即ち文學は善を內存し、又善を目的とすと謂つて可い。その社會的影響に於ても、文學は社會の善の理想の完成をなす働きが有る。そして藝術に取つて美は形式的であるが、善は內容的のものである。但し共の善は必ずしも勸善懲惡の如き直接的のものではない。今一層本質的の善理想を謂ふのである。

（六）知りて Erkennen の義

藝術の賞鑑は一種の人生經驗であるだらう。而かも無利害なる點に於て、純粹經驗であるだらう。其趣は恰も巡禮又は旅行の如きものである。行く〳〵種々の人生相に接して、之を心的に味ひ悟得するのである。其點に於て文學は人をして心的經驗を豐富にし、人生智の聰明を增させるものである。センツベリーの『批評史には批評とは、世界に知られ、思考され又記述されたる最上物のみならず、又凡べての善き物を見出し、知り、愛し、推擧せんとする努力の謂なり』と說いてゐる。此見出し、知りとは、即ち賞翫の心理であつて、其一層完全にせられ、且つ愛撫し、推擧するのが、即ち批評の任務であると云ふのである。批評も亦文學心理と同じく自己生命的のもので、創造的活動の一種であると謂ふ可きである。

其三　將來の日本文學

（一）今後の文學的傾向

上述して來た樣に、現代文學の發達や其現狀を考へると、隨分特質も多く幾多の消長を經て來た事が明らかになるであらう。之に加へて更に右の如き藝術觀の立場から回顧商量して之を今後の日本文學の上に望見したならば、其處に幾多の矯正すべき點、附加すべき點を見出すであらう。

現在の文壇では大衆文學、階級文學の方面が非常に旺んで流行力が大きいが、文壇一般の形勢や、世人の要求、理解する狀態を見ると、文學、批評共に一種の停滯時代に入つてゐる趣がある。少くとも展開期の初頭七八年頃よりも、文壇の機勢が停滯してゐる觀がある。

此停滯は果して如何なる意味を以て暗中の推移を營んでゐるであらうか。嘗て東京市で現代敎育の缺陷として擧げた雄大性の缺乏や、感情主義や、自由放任の弊の如きものが、又殆んど現代文學の上にも當嵌る樣に思はれる。最近二、三年幾分勃興の機勢が見えるも、尙新理想派以下の諸派と平民階級派との對立に於て、新たに發出すべき新文學の基調は、依然混迷と低徊との、停滯狀態を免れない。此亂雜混迷の巷から出で、此停滯時代から躍進して一大光明

時代に入らなくては、我日本文學の今後の發達は、十分の成果を見る事が出來ないのである。

前述した樣に（第三章其六）新日本現代文化の運命は、今後尙數十年を經て大成すべき低波時期にある。其偉大を成し遂げるには、今日の文壇の努力を尙十分に警める要がある。今後の文學界の新傾向が如何なる方向に進むだらうかは、勿論容易に豫測し難いが、上述の如き推移の跡から眺め、又最近の傾向を倂せ考へると、幾分推測し得ないでもない。

先づ第一期は概してローマンチックへの文學時代であつたのが、第二期には反動的にリアリズムの文學に傾き、第三期には又小反動でローマンテイツク、リアリズム兩性の文學が並び行はれた。其工合は丁度地震の餘震の樣な有樣である。斯う云ふ波動的傾向からして今後の文學を推せば、ローマンチツク、リアリズム兩性の、一層大波動の文學が起る樣に思はれる。ローマンチツクの方で進んだ象徵主義なども用ひられるであらう。單なるローマンテイツクで無くて、智的主義の文學が行はれる。現代生活の一面は其處に在る。リアリズムの變形した表現派や感覺派も起るであらう。要するに（1）人間派（人道派）や（2）階級派や、

又（3）向上派とも謂ふ可き努力主義の文學が當然行はれるであらう。

（二）現在文學の缺陷と新文學、天才出でよ

乃で今後の文學界を如何なる方向に進ます可きかの問題であるが、其に就いて、停滯時代、混迷時代の原因、現在の文學界に見える缺陷とも云ふ可き點を擧げるならば、（1）内容が一般に空疎で職業的の傾がある。文學に含まれてゐる思想が薄弱で、記述の上からも確かでない。殊に智的の記述などに――それが現代文學の一特質であるにも拘らず――如何にも不必要かの如く、曖昧に記し去る風がある。これは今後の時代の文學として益々科學との調和を加へ、文學の科學性を高める必要がある。トルストイの說にも此點に關し『將來は人類の向上的結合には科學が當るであらう。文學は其時代迄の任務を盡すに過ぎない』と云ひ、又『專門的の文藝學校の不要、專門作家の不可』を說いてゐる。此意味は多少異るが、兎に角科學的趣味は邦人の缺陷としても、文學に於て大いに調和し、同化する要があ

る。職業的とは其創作の態度や記述振に、如何にも良い加減の所が見えてゐる。之は文藝道の上に非常に惡い原因になる。そして今一つの原因は評論界の不振、殊に文藝時評の俗化した事である。評論界も亦甚しく職業的になつた。ここに於てか作家評家共に、眞劍の作風を起す事が一層必要になつてゐる。

（２）人生の迷相、不道徳の文學が多いのも病である。自然主義時代とは大分異調の時代病の俤が見える。そして多くは迷想、愚行を題材にする。エロ、ナンセンスの流行も誠に卑近である。此原因には思ふに樣々の分子が有るであらう。例へば作家の修養の十分でない爲に、眞に自己の特質、天分を知つて、之を育てる事に十分努力しない事も其一である。社會道徳及び其環境の惡化してゐる事も又其一である。作家が青年にして早く完成を欲し、其生活經驗の狹隘低小なる事も一因である。生活問題が困難の爲に作品に惡い反映を與へる事も痛ましい原因である。通俗的の人氣の競爭から、通俗文藝時代の傾を成してゐる事も其一因である。批評界の低弱散漫になつた事も亦其一因である。是等の種々の原因より、文學には

徒らに價値無き人生の迷相を盛るに過ぎず、文學は實際生活よりも愚劣視され、作家の態度も頗る輕佻に趣く勢である。

（3）敬虔的信念の要も、現代の文學に大いに望む可き事であらう。文學界が上の如き傾向では、徒らに小我相の流行を見るのみである。これは文藝の宗教的道徳的性質、即ち美の本質の上から見ても大いに警めなくてはならない。此敬虔的信念と云ふは文學の宗教味とは自ら別問題である。文學の底に倚る可き道念の有るを謂ふ。人氣や流行よりも、詩人は只眞面目に自己の文學に生きる事を念とし、信念有る作品に於て永遠の光輝を期さなくてはならぬ。

（4）皇室尊崇及び國家的精神　我國の文學に皇室尊崇及び忠誠の至情の流露してゐるのは、古來の特質である。現在の文學は直接此方面に關して餘り優れてゐない。クラシツク派には却つて少なく、大衆文學及び戰爭物に較々其傾向が著しい位である。是は今後の文學界に於て大いに此國民精神を題目にし、深刻高雅なる國家的精神を描く風を盛んにしたいものである。

（５）ジヤーナリズムの散漫惡化も、其量的勢力の益々激増するに伴れて、弊害が亦愈々増大してゐる。併しジヤーナリズムを一般の社會から排する事は中々難かしい。之を清新にして、其上にも文藝的良風を保たせる事が大いに必要である。

（６）自然及び無我文學現在の文學は人間の生活相に即して、自然の方面が大方閑却されてゐる。又小我相の文學が多い。是傾向を矯めるには自然を描いた文學が矢張必要で、其が文學界の清涼劑となるのである。無我文學は又小我文學時代の清涼劑である。自然文學は國民文學としても、文學史上の各時代の當然負擔すべき寄與（コントリビユーション）である。江戸時代には江戸風の明治時代には明治風の、大正時代には大正の詩人等の、自然との接觸が記されねばならぬ。武藏野や、みゝずのたわ言は其意味に於ける時代の文學の寄與である。今後も矢張り其必要があるのである。そして益々精妙高大な自然の寶庫に入つて、之を文學に托する事は、當に時代の詩人等の天職である。例へば現時のスキーや登山に大文學が出ても可いのである。

無我文學は又精神の解脱、無想とか、娯樂、安養とかの爲にも良い。無邪氣な意味丈けで

も、旅行記や小品文に、此種の好い作の描かれる事が望ましい。

(7) 飜案時代についても注意すべき點がある。現在は我國文學及び古典文學の飜案時代とも謂ふべく、十中の五六は其性質を帶びてゐる。併し安價な飜案は文壇の發達を不健全にする恐れがあり、國民文學の感銘を曇らせる憂がある。確實な同化から飜案に入り、其目的は十分に創作の努力に向ふ樣にしなくてはならぬ。

(8) 眞實な自己生命の文學の發達を圖る事は最も大切である。外國文學や他の作家の模倣の弊が、今は中々大きい。一人が親鸞を出せば五六人が直ちに親鸞に走る。一人が釋迦に筆を着ければ、數人が又直ちに之に模するといふ風である。全く流行の寰外に立つ事は至難であらうが、文學は純粹に自己の生命を創造する事が、同時に又最も時代の文學に忠實な努力を致す所以である。作物の裡に含まれる眞實味が、今後の各國文學の高下を決するバロメーターである。作家は常に眞實に、永遠的趣味を描く事に努めねばならぬ。

(9) 要するに一時代の文學の性質の良否は深(デプス)、大(グレート)、奇(キュリオス)、美(ビューティ)の諸質の到達せられ

た程度に依つて決せられる。此何れの方向にも、又相混和した性質に於て、深奥に達成されたものが、即ち健全なる國民文學である。今後の文學界は益々是等の文學的方面の完成に、努力精進しなくてはならぬ。さもあらばあれ、之を現代、過去の各時代に徴しても、文學發達の第一條件は他ではない。即ち天才の出現の一事である。今後の國文學の發達上に大なる光輝を見るには、如何にしても天才の出現に俟たなくてはならない。其點から特に現在の若い文壇や敎育上にも、大きな希望が籠つてゐる譯である。

二、近時の日本文學概觀

序説

現代殊に近時の日本文學に就いて叙べたいのであるが、凡べて現代の事と云ふものは我々に取つて二樣の意義を持つてゐる。一つは直接に我々の生活としての問題であり、今一つは長い歴史的の事件として幾分共れを客觀的に考へる場合である。現在と云ひ現代と言ふものは、單なる刹那の生命を持つた點のみでは無くて、同時に周圍が有り長い發展の系列を持つた線である。人類の存在や文化の諸相と云ふものは、凡て共種の二重の複合的意義に於て展開されてゐる。謂はば一つの事柄一つの事態に於て、主觀的若しくは後天的と、先天的の二樣の價値が存在してゐる譯である。

文學を味ふ場合殊に研究する場合に當つては、此二樣の意義が餘程大きな關係を持つので

ある。其の場合には單に自分等の趣味や信仰や好奇心を滿足させること、卽ち現在の生活の一部分として賞鑑すると云ふばかりでは無くて、同時に我々の民族的生命の發展、國民精神の活動の續きとして之を見たり、又其題材、用語、形式等の性質、由來、價値などを、學問的に調べたり比較したりする事が段々必要になつて來る。文學を好事家として見るには、主觀的、趣味的に取扱つて好いが、其れを批評し研究し、殊に教育上などに其意味を考へて見ると云ふ場合には、何うしても少し離れて客觀的に見る必要が起つて來るのである。此後者の場合は卽ち歷史的の見方であつて、所謂一國の國文學史の立場から見るのである。

然るに國文學史と云ふものは言ふまでもなく歷史的の學問で、其材料なり批評なりに夫々一定の方法が有るのであつて、大體に於て先づ過去の變遷發達の有樣を見ることに成つてゐる。乃で國文學史の立場から言ふと、實は現在尙動搖しつゝある現代の文壇の人々を材料ー對象にして研究することは、一般の歷史に於けると同樣、餘程難かしい事になつてゐる。國文學史の方面からは、江戸時代とか或は少くとも二三十年以前までの事情が、普通の研究法

に依つて明かにされるので、其以後の現在の事情は、専門外の一般の人達と同じく、矢張混沌としたケーォスの狀態に於て觀ぜられるに過ぎない。

其れならばいつそ今の文壇や文學運動の渦中に入つて、主觀的に話したら可いでは無いかと云ふのであるが、是は又今の自分が、實際に作家達と直ぐ同化し得る様な境遇に居ないので、矢張困難である。併し現代の文學を今述べた様な二様の意義に於て考へて見ることは、我々の生活としても實際に必要な事であるし、又讀者の様に教育や種々の文化的の仕事に當る上からも、餘程其要が有ると思はれるので卑見を述べる次第である。玆に現代と云ふのは殊に現在の文藝を主にする意味で、先づ大體に大正以後の廿年位、本當の近時の文壇について觀察する事とし、明治期以前の文學は時々引照する位にして前編に讓り、終に今後の日本文學に就いて更に少しく管見を述べて見よう。

一、文藝と文學、文學の分化と勢力

先づ大正に入つてからの現時の文藝界、文學界には如何んな種類の文學が起り、其の間の勢力の推移關係は、如何樣であつたかを最初に見る必要が有る。一體文藝と文學とは言ふまでもない事であるが、普通には同じ意味で用ひられてゐるけれども、實は同一の內容では無いのである。藝術至上主義 Art for the sake of Art と云ふ樣な時は其藝術の語が殆んど文學の意味で用ひられてゐる。併し文學は英語の Litterature で文藝は文學と藝術 Litterature and Art である。藝術の中には普通に音樂、繪畫、彫刻、建築、工藝が含まれてゐる。文藝は最も廣く藝術は之に次ぎ、文學は其一部に含まれて或は文藝と呼ばれる事がある。文學中でも戲曲などは藝術との中間に在るものと謂へる。

文藝 ┬ 文　學
　　 └ 藝　術

藝術 ┬ 文　學（一部分）
　　 └ 藝　術

文藝と言ふ時には一つの時代に於て何時も同じ運動や同じ性質を示すものゝ樣に思はれるが、必ずしもさうでは無い。其は各時代の文藝界の有樣に依つて、種々の場合が有るのであ

ろ。文學が他の藝術に先立つことも有れば、他の藝術が文學に先立つ事も有る。又二者が別の方向や性質を示す事もある。

（1）（2）（3）（4）（5）
(A) ↑ ↑ ↑ ↗ ↓
(L) ↑ ↑ ↑ ↖ ↑

兎に角普通に文藝と云ふ時は、文學よりも廣い意味で、文學は其一部分である。茲では主として文學に就いて述べるのである。

一時代の文壇に於ては、文學形式が新たに作り出されたり、今迄に分化した文學部門の中にも勢力の劇變を見るのであるが、大正後の文壇に勢力を占めて居る文學の種類は何んであらう。各時代にも勢力のある文學の種類に就いて、其傾向や性質を知つたならば、能く時代の文學の全般の様子が判るのである。例へばあの萬葉集の出た奈良時代には、物語と云ふものが餘り無くて、長歌を主とした和歌が一番勢力の有る文學であつたし、平安時代には、今の小説に當る物語と和歌との短歌が文壇の中心であり、江戸時代には又浮世草紙、讀本など云ふ小説と短詩形の俳諧と戲曲の淨瑠璃とが尤も勢力を占めてゐたので、さう云ふものの上

に、それぞれの文學の性質が發揮されてゐるのである。

現代の文壇は如何かと云ふに誰も知つてゐる様に第一に小說、是にも短篇、中篇、長篇、小品などの別があるが、小說類が大流行で有ることは爭へない。次には小說とまでは行かないが隨筆類が中々盛んである。童話類も大いに勃興して來た。韻文の方面では和歌(短歌)、俳句、新體詩(長詩)が有り、又實際謡はれる歌謡類に童謡、俚謡、歌劇などがある。童話、童謡は近頃餘程文學的に注意される様になつた。昔の漣山人の童話時代に較べると一新紀元を成してゐる觀がある。現在のものには新作物と古物語の改作と外國物の飜譯の三種が並び行はれてゐる。其間には久戯曲が非常に盛んに行はれてゐる。其他に講談とか物語、傳說と新聞雜誌等の所謂ジャーナリズムに屬するものがある。是は其內容は前記の部類に過ぎない様であるが、其自身として又一種獨特の文學趣味を持つて近頃の流行を形造つてゐる。文學の部分の分化が非常に多くなつて、其れが何れも盛んであることは目覺しい許りである。この文學の分化 Differentiation の多く成つたと云ふ事は、如何しても現代の國文學の一特色と

見なければならぬ。否是は世界各國の文壇に、共通に現はれてゐる傾向である。日本には短歌や俳句が有るので其丈け多く成つてゐる譯である。

分化の多いと云ふ事は、必ずしも時代の文學の質の高いとか善いとかと云ふ事と一致するものでは無いが、時代の文化の盛んな證據にはなる。國文學で言つても文化の極盛な時代か、寧ろ少し爛熟した樣な時代に、常に文學分化が多く現はれるのを見た。平安朝の後半期や江戸時代の寶曆期以後などは其好例である。現代も其點から言ふと、或は一種の文化爛熟期に當つてゐるかも知れない。其分化した文學部門の勢力は、何の種類に在るかと云ふに、短小な間では有つたが、相應に變遷が現はれてゐる。

先づ明治時代からして主勢力を占めた小說は、相變らず盛んで有力であるが、長詩も相應に盛大で、其等が段々と戲曲、劇に向つて進んで來た趣が見える。此樣子を見ると現代文學の主勢力は小說と戲曲とにあつて、其れが前者から後者に向つて移動したと言ふ事が出來る浩澣な默阿彌全集が二種出たり、近松全集が續いて數種刊行されたり、歌謠的の童謠や歌劇

などが行はれるのも、此時代の文學趣味の要求に應じたものである。戯曲的の文學が近來最も勢力を占めて來た事は餘程注意すべき事柄である。勿論是も單に現代の文學界に於ける突發的の現象と言ふ譯では無い。矢張明治時代からの文學形式の發展の結果である。明治三十四五年で明治時代を前後期に別けると、其頃と現時の文壇とには、文學勢力の變遷に於て上の様な關係がある。

(現代)		(明治後期)		(明治前期)
和歌		和歌		論文
〇長詩		〇長詩		詩歌
〇小說	←—	◎小說	←—	◎小說
◎戯曲	←—	——	——	〇戯曲

小說は明治時代から一貫して文學界の中心勢力を占めて來たが、戯曲は系統上は明治初期の劇壇流行の勢を復現したもので、共れに小說文學の勢力を收めて、尤も著るしい發達を遂げた。今の戯曲は餘程小說に近いものである。劇作かを見ても小說作家の殆んど凡てが皆戯曲の作家で、其數も非常に多い。是は文學史上にも餘程珍らしい事で、文學の分化が同時に作家個人の移動である様に見える。

其戯曲の勢力の有る所は明治初期の文藝界と好對照をなしてゐるが、勿論其性質には大差がある。前者は主として默阿彌物などで舞臺上に庶民が樂んで見る劇 Sehe drama として實際に歡迎されたのであるが、今日の戯曲は見る劇たる許りで無く、一種の文學形式として讀む劇 Lese drama としても盛んに行はれてゐる。其流行には一部は好奇心に出たものも有るであらうが、一方に於ては又半叙事的小說物語より純叙事的の戯曲が輕快で趣味が深いし、平面的の描寫より段々立體的、綜合的の藝術が喜ばれる時代の趣味にも合したものである。凡て人心が動搖して新奇を求め、動いたり踊りたいやうな氣分の漲つてゐる樣な時代、青年などは各自に俳優として活動したい、運命を新たに築きたい、叫び說き歌ひ度いと思ふ樣な思想的に醱酵してゐる社會には、其思想趣味の投影として、戯曲文學や劇戯曲的の藝術趣味が喜ばれるのは當然である。詩から小說、小說から戯曲に進んで來た現在の文壇の傾向は、矢張り其背景を成してゐる現代社會の思想界や、尙一層廣い現代人の生活と密接に關聯した所があるのである。

二、文學界の主思潮

此樣な色々の文學の行はれる近頃の文壇卽ち作家や讀者の間に、根柢を成してゐる主なる思潮は如何う云ふものであるかと言ふに、大略四點許りに纒める事が出來る。其一は個性の自覺で有り、其二は宗教心であり、其三は社會心であり、其四は國家對世界の精神である。此の中には哲學的のものもあれば、宗教的のものもあり、社會的のものもあつて樣々であるが、其雜多な種々の要素が所謂近代心理と呼ばれる所のものである。其れが凡ての現代文學の基調を成してゐる。其の由つて來た所は、明治の後半期に自然主義が大いに行はれたのが其後年には至つて、漸く一層深い心理主義の作物が出て來る樣になつた繼續である。

能く言ふ事であるが、近代文化の發達は、十五世紀以來の文藝復興、宗教改革及び十八世紀以後の科學研究の結果で有ると謂はれてゐるが、此我國の最近の思潮も實際それに比較される樣に、明治の末期から殊に目覺しかつた教育の進步、科學研究、生活問題及び近時の大

事實である國家對世界問題に促されたのである。

先づ(一)個性の自覺は歐米にあつてもカント、ヘーゲルに起り、一は亞米利加のジェームスなどのプラグマチズムや、獨逸のォイケンの哲學、宗教に言ふ認識論の系統を强調したものとなつて、最近アインシュタインの相對性原理などに共鳴したものとなり、一は佛蘭西のベルグソンの生命創造說や刹那の哲理說などに刺戟されて種々の方面に發達を見たもので、其影響が非常に大きいのであるが、我が文壇の思潮も斯うい ふ泰西の思潮の影響が勿論大きいし、前記の社會問題や思想問題からも急激に人格個性の自覺が叫ばれる様になつた。自然主義時代の缺點とされた個性の不定、人類の空虛、意志理性の蔑視が漸やく形を取り來つて、人格の自覺、人類の解放が認められ生命といふ事が强く文學上に要求される様になつた。個人主義エゴイストの說かれるのも亦是に由る。其の生命には生き甲斐と言ふ事が絕えず叫ばれて、刹那の生命と永久の生命とが最も意識的に追求されてゐる。近頃教育上にもデュウイやエレンケーの說が引かれて、創造教育とか個性教育とか言ふ事が頻りに注意されてゐるの

も、斯う言ふ文壇の思想界と相關聯した所が見える。

(二)宗教心は之も自然主義反動の一面であつて、十八世紀以來の科學主義が色々の行詰りを生じた結果と、社會上種々の不調和が生じた結果との合成力に外ならない。プラトンの愛の考や殊にトルストイの人類愛の思想などが強く流布したのも是である。タゴールの思想なども此傾向から喜ばれたのである。又本來の基督教や佛教の思想も近頃になつて著しく流布して居る。此宗教心の特長は一は前記の愛の思想に、一は又信と云ふことが非常に說かれる樣になり、今一つは望に對する苦悶となつて現はれてゐる。即ち個人の神身や社會の不滿足に對する苦悶所謂近代苦 Modern pain となつて樣々の告白が聞かれるのである。さう云ふ文壇の心理が、不斷の焦燥となり體驗となり歸依となつて一般に宗教的色彩を深くしてゐる。

(三)社會心は又近代の世界文化の一特色で、我國でも明治時代に較べると其世界的波動に順應する意味からして、最近非常に社會問題が盛んに成つて來た。社會心の勃興と云ふ事は一見前に擧げた個人主義の思潮に反する樣に思れるが、實はさうでない。矢張人類の自覺に

根ざした同一の根蔕がある。其に勃興したのは決して理由の無い事では無い。乃で勞働問題や工場問題や一般人の生活問題と結び附いて、實際の運動にも現はれ、マルクスの說などが頻りに行れたのである。猶太や露西亞の過激思想なども見える樣になつた。從つて文學上にも勞働問題や農村問題が頻りに描かれる樣になり、階級文學が彼是と問題になるに至つたのである。此社會心には深さと廣さの二方面が有つて、文學上にも二樣に現はれてゐる。

次に(四)國家對世界の精神は、社會心が發達し交通が益々世界的となつた近代文化の一特色で殊に大正三年、千九百十四年から千九百十九年に至る六年間の世界大戰や其後の政治的波動からして各國著るしく刺戟されたので、半ば現實的の問題として明治以前に曾て見ない傾向が現はれてゐる。死の勝利を書いた詩人のダヌンチォが飛行機に乘つて大戰に出たりフユーメを占領したりする樣な事件がある。愛國的の詩歌や小說も澤山に出でた。英國のバーミンガム圖書館に輯められた英佛等の戰爭詩歌は二千種にも上つてゐる。其一方では又國際聯盟や世界平和の事實が文學上にも種々の影響を與へて、社會化と共に世界化の思想は餘程

著るしく現はれる樣になつた。我國の文壇では未だ餘り急激には現れない樣であるが、古典的のものが新たに注意されたり、愛國小說の類が出たりする一方に於て、汎世界的の思想が見えるのは皆此思潮に發したものである。

斯う云ふ種々の思潮は素より凡てが同一の傾向や强きものではない。宗教心は個性の自覺の內容を成し、國家對世界心は社會心の中に包含されて此一思潮が、種々の作家や讀者に色々の形で現はれるのであるが、その爲に種々の傾向や主義が生じたのは否み難い事實である。

(三)　作家と種々の主義

現代文壇の作家には素より種々の人々が有る。大家と認められる者、新進作家と言はれるもの實に數限りが無い。稍名有るものも文學の各部門を通じては百人以上に上るであらう。地方出身の上から見ても、有名の人許りでは無いが、多い國では二三十人近い文人を出してゐる樣である。其等の作家を各部門に就いて評すると面白いのであるが、今は簡約を主とす

る爲に取纏めて述べて見よう。尤も我々の取扱ひ上で何派、何主義と呼んでも、今日まだ其眞の主張や作品の明かに決し難いものがあつて、分類し難い事情もあるし、又作家が不定的で有つたり、個人的の關係から述べ難い事情も有る事は先に言つた通りである。其上何派、何主義と云ふも、必ずしも文壇の實際の分派では無い。ほんの目下の便宜の分類で、尙後に至つて整理が出來るだらうと言ふ事は豫めお斷りして置かなければならぬ。一體文學をクラシツク(C)とローマンチツク(R)に分ける事は古い分類法であるが、最も多く用ひられてゐるから其れに依る事とし、之に近世の自然主義(N)を加へると大凡そ三派の區分法がある。其を目標にして現代の文壇を見るのが矢張便である。

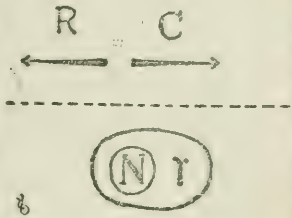
三派の特質は槪言すると、(C)は文學なり藝術が凡べて典雅的理想的の所があるもの(R)は空想的神秘的で有り(N)は自然的、科學的の所があるものである。此外に寫實主義(リアリズム)(r)と言ふのもある。クラシツクとローマンチツクは一つ物の相反した見方であるが、美的に見る點では一致してゐる。之に反してナチユラリズムは現實的に見る事を主にして二者と異つた

立場にある。リアリズムｒは矢張り現實的の立場はナチユラリズムと同じく其より範圍が廣い。發達的にはローマンチツクとナチユラリズムとの中間に有るものである。簡單に示すと

（一）

- 美的
  - (C) クラシツク
  - (R) ローマンチツク
- 現實的
  - (r) リアリズム
  - (N) ナチユラリズム

（二）



尤も以下では自然主義を主とした爲に、リアリズムを其中に含ませて置いた。實はリアリズムの方が廣い性質のものである。

先づ新らしい點から(N)述べると、作家は却つて古い大家連に多いが、第一に(一)新自然主義とも言ふべきものがある。此名は曾て泡鳴も用ひたが其とは自ら別である。是は言ふ迄もなく一般に明治後期の自然主義の變形したもので、文壇の進歩や社會世相の變化と共に其缺陷を追々と矯めて來、內容も作家の圓熟と共に餘程老練となつて來たのである。其中にも

現實の缺陷を中心に現實暴露を描くもの、如實の生活を描くもの、個人主義のものなどが有つたが、今は其が稍纏つて矢張眞面目に人生の全部に渉つて注意する樣に成つた。此派の特質は現實の缺陷、人生の暗黒面を主なる題材として其を如實に描寫する所にあるので、一時平面描寫と言ふ事も言はれた。寫實主義の傾向もさういふ所に現はれてゐる。從つて稍局部的の人性が色々の形で取扱はれたのであるが、其が追々全幅の深みのある人生の描寫と云ふ方面に纏つて來たのである。作家には秋聲花袋白鳥泡鳴等が有り、出身では硯友社の後の人と早稻田派の人が多い。歐米では此派の現實派から象徴派が出て、更に未來派や立體派が文壇にも現はれたが、我國では單に象徴主義の作品が見える位で、未來派や立體派は藝術の音樂界や繪畫界には稍々著るしく見えるけれども文壇には餘り行はれてゐない。我國で比較的未來派の色彩の多いのは、後に云ふ新人道主義派や新理想主義派の作家に於て見るのである。

　次に(一二)民衆主義がある。是は近時の社會問題や個人の自覺に共鳴して起つたもので、所謂デモクラシーの文學化である。併し文藝上の民衆主義と云ふのは必ずしも政治上社會上の

民衆主義と同一ではないので、寧ろ平民文學庶民文學の意で、貴族趣味基調の文學に對したものである。所謂生活の爲の藝術である。之にも貴族又は有識階級(中流有産階級)に對して、主として平民階級や第四階級と呼ばれる無産階級、勞働者の生活を描いたもの、勞働者の生活に同情し愛や新組織の理想を描くもの、實際に無産階級中心の運動を有するもの、主として民衆的の生活趣味を描くものなどの數派の別がある。石川啄木なども新詩社から出たが、今日まで居れば此派の民衆生活中心の詩人であらう。賀川の死線を越えてなどは又勞働者の生活に同情的の作風で、青年の近代苦が主なる内容になつてゐる。又一般に通俗的な民衆的の意味で浪六の作とか通俗翻譯物とか曾我の家の喜劇物なども此の中に入れる事が出來る。其等を外にしては多くは早稻田出身の作家に、本間、小川、中村、省吾等が論議したり作品を出してゐる。過激思想の作家も多くは此派の中に入る。

其から又(三)新人道主義と云はれる一派がある。此派は本來は古典派に屬するものであるが、其手法の新らしい所などは矢張り此派に出てゐる。又蘆花なども自然の生命を尙ぶ所に

一種の自然派的傾向がある。

次に(C)にはいるものには、第一に(一)新古典主義とも云ふべきものがある。我固有の趣味や古典派傳說の趣味を新樣化したもので、其中に又數派がある。鷗外の樣に獨逸のゲーテ以來の飜譯物や我近世の傳奇文學を主材として描くもの、是は劇にも小說にもある。又逍遙の樣に沙翁劇や我古代文學に主人公を採つて新舞踊劇化した所謂新劇物を主とするもの、詩壇にも有明柳村省吾露風などがあり、歌壇には中堂派の一派や尾山等の新歌人が有り、俳壇には虛子などがある。歷史小說の碧瑠璃園や劇壇の吉井、綺堂等も此派であらう。大正五六年頃一時唱へられた傳統主義なども此派の中のものと見る事が出來る。近頃文壇一般に古代の神話傳說や昔の史的人物などを飜案する事が流行するのも、此派の傾向の現はれである。又此頃の詩人作家が頻りに光琳や廣重を思慕する樣な事を云ふのも、同じ意味に發して居る。

其から(二)新理想主義或は新人生主義と名けるものが、此派の大部分を占めてゐる。是も雜多で纏め難いが其作風は明治時代の理想派觀念派心理派等に發し、自然主義運動を經過した

以後のもので、暗黒面のみならず人生の全部を、或は光明をさへ描からとするものである。新古典派を趣味的情意的と見れば、之は智的理性的の內容の多い文學である。其中には餘裕派低徊派と呼ばれた漱石一派や、小說戲曲に自然派以外の新進作家の一派である久米芥川菊池等や、歌壇には空穗牧水等、俳壇には碧梧桐井泉水等、詩壇には晚翠などが見える。吉藏の新社會劇も此派の作であらう。又長詩の野口(米)や立志小說の堀內なども此派に數へる事が出來る。新古典派と此の二派には帝大出身の作者が多い。次には(三)新人道主義が此派の新運動として大正四五年頃から大に興つてゐる。所謂白樺派が中心であつた。其一部に自然派の作風に近い所もある事は前に述べた通りであるが、其趣味の色彩や作者連には矢張クラシック風の性質が多いものである。是も基督教の精神や自由と愛などを高調する所は、蘆花などが明治時代から云ふ所と似て居るが、白樺派になつては貴族的人間的で、蘆花などは平民的自然的である。武者小路の新らしい村の主張や有島の作など極めて多い。一體に宗教味に富んでトルストイの影響を多く入れ、神と人生との問題や人間生の自由を主題にして、作

家は學習院出の人に多かつた。一方生活苦や勞働者の生活を中心にした文學が行はれてゐる間に、貴族の子弟が生活苦を除外した文學を出した事は餘程面白い現象である。乃で所謂階級文學に就ての論爭が頻りに行はれた。併し此新文學派は必ずしも趣味や理想の遊戲三昧として起つたのでは無い。新時代の人類の自覺的精神が其處に見える。共點に於ては兩者に共通の所がある。只一は比較的實際的現實的であり、一は抽象的理想的の所がある。さう云ふ文學が互に起つた所に、新時代の社會相や思想の開發が餘程明かに現はれてゐるのである。

次に第三の(R)の文學は如何かと云ふと、先づ此派には(一)新浪曼主義の一派がある。明治時代の浪曼派の發展したもので、長詩の藤村醉茗花外白秋柳紅八十や歌人の萩原など、又新詩社の後の明星に與謝野一派や石原など云ふ人々がある。新自然派に比すると濕靜であり新古典派に較べると活潑であり、且新理想派よりは取材の範圍が狹く、人生全體と云ふよりは主に個人の內部生活を歌つたものである。併し矢張智的內容よりは空想味若くは感情味を喜ぶ所に、ローマンテツクの傾向が多いのである。

其から又（二）唯美主義又は享樂派とか耽美派とかに目される一派がある。自然主義の現實の暗黑面を描いたに對して歡樂生活や愛や美を描き、又詞語や形式の美をも目的としてゐる。此派の作家にも種々の作風の人が有るが、小說戲曲に歡樂生活を描く荷風潤一郎幹彥等や、江戸趣味などの美的生活を描く久保田吉井白秋里見等や、詩歌に技巧美を主とする犀星堀口、惣之助等がある。出身では赤門派と三田派の作家が多く此派に屬してゐる。

更に（三）新理想主義も其空想味や神祕主義の傾向を帶びてゐる所は、此派に交涉を有つてゐる。此樣にして見ると、現代の文壇には作家の主義立場は新自然主義以下凡そ七派の別が有るのである。其は皆明治時代から夫々に發達すべき徑路が有つたもので、其が時代の新運動に伴つて、民衆主義や新人道派の樣な比較的新らしい形式主張の文學となつて行はれてゐるのである。其を表にすると次の樣である。

- （一）自然派（自然的科學的）
  - （1）新自然主義
    - （a）現實の缺陷を描くもの
    - （b）如實の相を描くもの
    - （c）寫實主義の傾向のもの
    - （d）人生を全部的に見るもの
  - （2）民衆主義
    - （a）第四階級の生活を描くもの
    - （b）同上の理想を描くもの
    - （c）同上の運動を主とするもの
    - （d）通俗小說翻譯喜劇等
  - （3）新人道主義
    - （a）人生の自由新社會を描くもの
    - （b）宗教的人類愛を描くもの
    - （c）趣味生活を主とするもの

- （a）獨文學及び我近世傳奇文學

（二）古典派（典雅的理想的）

（4）新古典主義

（b）沙翁劇及び我古代作の新樂劇
（c）典雅趣味の長詩
（d）傳統主義
（e）新近世劇
（f）中庸派の和歌
（g）新俳句
（h）通俗歷史物語

（5）新理想主義

（a）餘裕派
（b）新人生派
（c）新社會劇
（d）新形式俳句
（e）人生派の和歌

- (f) 理想派の長詩
- (g) 立志小說等

（三）浪曼派（空想的神祕的）

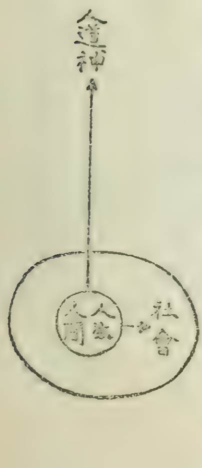
- (6) 新浪曼主義
  - (a) 抒情派の長詩
  - (b) 新抒情派の詩歌
  - (c) 新空想派の詩歌
  - (d) 明星派の和歌
- (7) 唯美主義
  - (a) 歡樂生活を描くもの
  - (b) 美的趣味を描くもの
  - (c) 詞美派

（四）詩的內容

此樣に現在の文壇では作家の出身や立場と云ひ、主義主張と云ひ、實に多種多樣を極めた

ものて、其分化も非常に多いのであるが、其間に於ける現代文學の詩的內容には如何んな特質が有るであらうか。詩的內容とは云ふ迄も無く文學上の詩想と其取扱ふ題材とを指すのである。先づ明治時代に見るに明治前期の文學では大體に於て戀愛と運命とを內容とし、明治後期には更に本能と人心、言ひ換へれば人生の探究が色々と文學上に行はれたのである。然るに現代文學の題材や詩想は、又更に其からも變轉しようとしてゐる。

　現代文學では今迄の樣に單に戀愛の眞相を描いたり、人間の本能を暴露したりするのに滿足しなくて、人間を一層全體的根本的に見る風が大いに進んで來たのである。乃ち此文學の性質は、其自身としては人生の描寫となり、其生活周圍としては社會描寫となり、其一般的の運命や至上のものとの關係としては、人道とか神とか云ふものに於て描寫される樣になつた。數



育文化の進步に依り人間的意識が擴充した結果、常に全體としての人生と云ふ事が問題に成つてゐる。明治前期の文學內容を素朴的とすれば、後期の其れは科學的に變化して大を加へたのであるが、今や更に人生を全體として意識し、從つて段々複雜に描寫する樣に成つて來た。人生を見つめると言ふ言葉に好く見える。人生的の自己表白の文學が今の文學界の通性である。自然派時代には苦悶や罪惡や暗黑の方面が常に題材とされてゐたが、今はそれとも異つて作物の間に信、愛、情、熱、美、新、幸福、眞實と云ふ樣な思想が著しく現れて、光明の方面から人生を見たものが最も多く描かれる樣になつた。信、愛、人道などの最も擴充した人間性が文學上の主要な內容に入つて來た。死と云ふ事も往々描かれて居るが、其すらも愛や信の結果になつてゐるものが極めて多い。主人公は如何かと云ふと是も自然主義の影響などからして、明治時代よりも一層平凡人の日常生活を取るものが多く、英雄や貴族才子ではない。支古那や日本の代英雄を觀察した作でも、ニイチエの樣な超人風の主人公ではなくて、著しく市井の人の樣に平凡化してゐる。是は現代文學が光明方面を描くと言ひ、人間性の擴充した

人性を取扱ふと云ふのも、單に空疎な理想文學に向つたのではなくて、文學上の具象、現實味は古い物よりも餘程進んだが爲である。『或る何々』と云ふ題名のものゝ多いのも此平凡性の結果である。さう云ふ翻案物では多くは、意志や本能の樣な人間性の强い點を新樣化しようとしてゐる。乃で平凡人をして人生深奥の佛や永遠の眞理を語らせ樣とするから、どうしても一般に誇張が多くなり、非人生的の空疎な内容になつてゐるものが少くないのである。兎に角感情が個人的で無く社會的や人類的の一層深く大きな意味を有し、信、愛、努力などの積極的人性が描寫される樣になつたのは、現代文學の著しい特質であらう。自然描寫や郷土趣味のものも少くないが人事要素の描寫に比すると、此方面は決して著るしいとは云はれない。詩歌には抒情詩風のものが最も行はれてゐるが、其外には新奇な空想や其に就て外國趣味のものも多く入つて來た。併し是も亦多くは誇張的で、大自然詩や叙事詩の類は餘り現はれない。良い作品は例外として詩的内想の乏しい事が何と云つても一般の弊と思れる。

（五）　詩的形式及び手法

形式の方面は自然主義影響の結果からして餘程退化した觀がある。尤も現代の文學上の傾向殊に象徴主義や表現主義の立場から云へば、文學作品の内容と形式を區別して見ることは出來ないと言つてゐる。詩想を生命の燃燒的刹那的のものと見ればさう云ふ事も考られる。併し我々が稍冷靜に創作心理を考へたり、實際賞鑑するにはさう云ふ事はない。形式上の美や適不適や不完全等が矢張有るのである。心理的に言つた形式が、内容に眞に渾融不離で完全な當なのは、大天才の作などに稀に見る事で、多くの場合に於ては形式が内容に擇ばれて、其間に多少の隔たりが有るのである。例へば詩想をAとし之に應ずる形式をａｂｃとすれば、



で、作品としてのAa Ab Ac三様式が有り得るのである。意識しなくもさう云ふ過程が實際に有り、又客觀的に見えるのである。新自然主義の作品は此點

に於て尤も趣味の乏しいものである。口語と文語では詩歌以外は悉く口語である爲、容易に率直に記述されてゐるが、作家每に大方類似したもので、結構や文體上の特色は餘り見えなくなつた。是は詩的題材の平凡な點からも影響されてゐる。劇なども對話を口語で綴るので、大きな文章的技巧は益々乏しくなつた感がある。現代文學の文章上の特長とも云ふ可きは、恐らく其きびくとした率直鮮明の點にあるのであらう。次に手法では客觀的の敍述が多く用ひられてゐる。其が敍事風と云ふ程ではないが主觀を抑へ附け、稍皮肉に冷靜に傍觀的に記す樣な風である。作者(主人公)が自ら彼と云ふ三人稱を用ひる事が多い。又翻譯物の非常に多いのも是が爲である。耶蘇とか釋迦とか維摩とか玄宗始皇帝孔子とか、我國では親鸞素盞雄尊日本武尊一茶芭蕉浦島淨海などを、新時代の心理で復現しようとしてゐる。人生の全體的調子を出さうとはしてゐるが、前に述べた通り多くは一點から見たので、近松の時代物などに較べても著しくシンプルである。形も一幕物が流行して簡單である。此點からして又新奇と象徵風も大いに行はれてゐるが、此象徵風も餘り深刻なものは見えない。多くは諷刺

と皮肉の程度である。

韻文では長詩に殊に此新奇と象徴と又反覆法の手法が多い。新奇の技巧には廣重や加比丹模樣の樣な隨分理由のない出來心と思はれる樣なのがある。反復法は又現代歌謠の特徵で、新らしい表出と必ずしも一致するものでは無いが、俚謠などの感化からして往々用ひられてゐる。白秋などは一時佛教や今樣和讃等のリズムを採つて歌つたが成功しなかつた。詩形と關聯して記法の問題が有る。是にも七五三句を分節にしたり、四句續けたり、六七句續けたり、又散文風に一節圑宛續け書きしたりするものがある。併し孰れもまだ餘り完成した形式と見る事は出來ない樣子である。和歌には萬葉風のもの、情緒的のもの、中庸風のもの、牧歌的のものなどが前期から行はれ、又連作風なども相應に盛んである。俳句には又從來の十七字詩形に新生命を盛るものと、從來の詩形を破つて新生命、リズム本位で歌はうとするものとが分れて、餘程明かな運動を續けてゐる。後者は併し連歌風のものになつて、俳句の詩味とは別趣の感がある。是も尙大きな問題である。

斯樣な現代文學の形式方面に於ける通弊としては、現在まだ一般に結構の無變化で小規模な事、誇張の叙述が多い事、模倣の風が多い事、描寫の形式に遲緩し、たるみの有る事などが其主なるものである。さう云ふ譯で內容形式共に優れた特色の有るものは餘り無いのである。作家作品が平均してはゐるが、傑出した個想を持つた眞の永久的生命の有る創作物は至つて乏しい感がある。模倣と云ふ事が實際近來の著るしい現象に成つてゐる。一つは書肆の關係に依るのであらう。親鸞などが五六人に描かれたり、耶蘇も法然等も次々に出た。邪宗門も劇にもあれば詩にもある。青の洞門の話が奇話哀話に書かれたり、恩讐の彼方が脚色されて居る。其他劇や詩の題目や記法迄も互に似てゐる。かう云ふ傾向は勿論文學の內容にも附隨したことではあるが、形式方面から見ても現代文學にはまだ〳〵大いに改む可く進む可き餘地が十分にある樣に思ふ。試みに現代作家の作品や文體を取つて、新國語や新國文の見地から見たとしても、眞個に好い典例とするに足るものは餘り無いのである。國語や國文の進步向上の上から見ても、現代作家に更に十分の努力を要求したいものである。

（六）　外國文學の影響と世界化

世界的交通や　に依つて實現される世界文化の一大流通運動は、現代の文化生活に於ける一大特色である。勿論明治維新以來西洋各國との交通が開けるに從つて外國文學の翻譯が行れたり、宗教が輸入されたりして其影響感化は常に大きかつた。例へばルソウの民約論とか、ヘルバルト、スペンサーの教育說とか、ニイチエ、ツルゲネエフ等の思想は明治時代には殆ど一時代を動かす程の力を以て行はれたのである。併し現代の文學界に於ける外國文學の影響は、其にも增して實に空前的の盛觀を呈し、餘程特殊の事情のある事を先づ注意しなければならぬ。前代の場合には一時期には英佛露獨等の中一二國が主として行れた丈けで、其翻譯も有名なものは二三人位に過ぎなかつたが、現代文壇には歐米の有ゆる國の文學又印度や支那大陸のもの迄も輸入されてゐる。古くは希臘のプラトン、ソホクレス邊りから、印度の奥義書ラマヤーナ等に及び最近迄全世界的の影響が見える大正二年に世界文學物語が出てから其より

數倍大の泰西名著文庫とか、近代名著文庫とか、世界文藝全集とか云ふ樣な大譯述書が引續き刊行されてゐる。特殊の詩人や宗教家についての研究者も多く出で、少年文學にも世界少年文學とか世界童話劇集とか云ふ類が盛んに出て、少年文學の機運を大いに進めた。教科書の世界小學讀本の譯出さへあり、文學的趣味の點では歐米の方が餘程豐かである事を示してゐる。兎に角世界思想が今迄よりも一層深く廣く國民に同化されて、我文壇に大きな影響を與へてゐる事は誰も認めてゐる所であらう。試みに近頃目に着く歐米の作家や藝術家の名前を見ても

希臘羅馬　プラトン、ホーマー、サツフォー、プリユータークゝイソツプ、ヴァージル。

伊太利　ボツカチオ、ダンテ、アミーテス（グオーレ作者）、ダヌンチオ。

英國　シエクスピーア、サツカレー、ラスキン、エリオツト、ラメー（少年文學）、ワイルド、シング、ショウ、メスフイールド（忠義作者）、バリス（きもの作者）。

米國　エマーソン、ポー、ホーソン、コナンドイル。

佛國　ゾラ、モウパツサン、ロマンローラン、ジード、ユーゴー、モリエール、ドウ

デエ、ヴエルレーヌ。

露　國　トルストイ、ツルゲネーフ、ドストエフスキー、チエホフ、アルツイバセッフ、ゴリキー、プシユキン。

獨　逸　ゲーテ、ハウプトマン、ズーデルマン、ニーチエ、ホフマンスタール、カイゼル、グリム、ゲーリング。

白　國　マーテルリンク。

諾　國　イブセンビ、ビヨルンソン。

瑞　典　アンデルセン。

印　度　タゴール、ヴアルミキー（ラマヤーナ作者）、サンタヤーナ。

以上十二國數十人に上り、猶木のアッシニなどの名も見える。書肆の全集、文庫本等に入る者も八九十種に上る勢である。聖書經典の類も大藏經の國譯を初め多く譯出されて、一般の趣味に應ずる樣になつた。音樂界でも近年米國のハインクや獨逸のエルマンチン、バリスト、

ハイフエッツ等が次々演奏に來て居る。實に現代文壇に交渉を持つ世界の文豪は百人近い數に上り、往來に較べると甚だ盛んである。勿論さう云ふ作者や作物が凡べて新文學の淵源と云ふ譯では無い。中には隨分今日流行するとしては不思議に思はれるものもある。其が今日も依然として喜ばれるのは、永久的大作としての力が近代思想にも同化するからである。劇方面を見ても、古代の希臘劇に中世の沙翁やゲーテ劇があり、更に近代劇が行はれてゐる。

民衆文學や人道主義の文學の方面では露國文學が盛んに輸入され、耽美派や自然主義傾向のものでは佛國文學が殊に多く流行してゐる。先に述べた詩想の中に最も流行してゐる愛の思想なども、此樣に基督教と佛教の慈悲思想との二流の淵源があるのである。矢張世界的の流行で、英米ではモルデルやシングルトンなど皆愛の人間性を說いてゐる。我國でも近頃は愛を說く專門家の樣な人も見える。併しそれが爲めに道德思想と背馳した問題が、文學上のみならず社會上にも頻々起つてゐるのは餘程警戒すべき現象である。外國物が輕駭に輸入されるのは文壇の不用意にも由るし、實際模倣的の流行も多いのであるが、從來に比して模倣にもせよ

活潑に彼の思想に觸れて、國文學の中に融化せしめようとする勢は甚だ盛んである。さう云ふ間に永久的の良い要素を多く採り入れて、我國文學の素質を改善するに資したならば、日本文學も追々世界文學としての優秀な性質を具へる様になるであらう。世界文學と云ふことは近來モールトンやブツセや、リキートソン、ハウザー等が特別の意義を認めて唱導する所で、文學內容の世界化人類化を高調するのである。併し共も動もすると矢鱈に混合的の集合を企てたり、外形上の一致を求める様な傾向がある。世界文學の眞義は決してさう云ふものではない。何處迄も人類としての永遠の命、永遠の姿を一國の文學中に認めるものである。ホーマーやゲーテは共意味の世界文學である。我萬葉集や源氏物語なども亦さうであらう。

共に就て先頃も國語が外國語から孤立してゐるのが餘程損失である。現代の日本の文學は決して外國に劣らないのであるが、國語が不自由な爲めに世界的の流通に大變損失を受けて居ると云ふ說が見えてゐた。是は或意味ではさう云ふ點も有るが、世界文學の發達は必ずしも外形上の共通から實現するものではない。印度や支那にも隨分世界文學としての寶玉があ

るのである。問題の眞意義はさう云ふ事では無くて、國文學としての根柢を靜かに養ひ、國民文學としての天才の眞の努力に依つて、同時に世界文學としての永久的光輝が得られるので、此意味の世界文學發達は益々望まなければならないと思ふ。

（七）讀者と社會

次に現代の文學界に於て、讀者と社會との關係即ち文學の周圍 Milieu とそれを受入れる側の特質は如何かと云ふと、是は一般文化の普及とジャーナリズムの流行などからして、文學熱が著しく行渡つてゐる樣である。少年青年など皆文學物を讀むで蘆花、獨步、漱石等は今も數に於ては最も廣く行はれてゐる。電車内の讀者も大半は小說類か講談本である。出版界も創作物は一時に數千を出す事が珍らしくなく、中には新しい作家で數百版を出したと云ふ樣な例も見える。文學に關する辭書類も數種出たり、文學雜誌も依然として多く出で、韻文の方面に殊に多い。又單行本の外大部の全集が非常に歡迎される傾きがある。大正以後にも泡鳴、

花袋、藤村、子規、漱石、幹彦、鷗外、桂月等の全集が次々に出て、何れも十數部の宏瀚なもので、泰西の文豪の集に比しても劣らないものがある。ゲーテ等の海外の作家の全集も多い。又餘り好ましい事ではないが內外、作家の小本の叢書類も何十種となく出版され、昭和に入つては、日本文學大全集等も刊行された。兎に角文壇と云ふものが廣く大きくなり、種々の分派が並び立つて活潑に努力してゐるし、社會にも文學物を好む傾向が餘程進んで來た事は明かである。只前にも述べた樣に、今の文學界は其基調となる思想が別に大きな世界的社會的の思想運動から派生したのであつて、急激な新變化が國家や社會の全部面に一層大きなスケールで動いてゐるのである。乃で文壇が特に社會の先覺となり、新運動の原動力となる樣な事は無く、相率ゐて其社會的勢力に暗示され刺戟されてゐる傾きがある。新聞なども社會の木鐸と云ふ意味は餘程變つて來た。又文壇の作家を見ても多くは三十歲前後の人々で、老年の大家連も多少あるが、一般から見て複雜な社會の先覺者と云ふ樣な人々ではない。教育文化の進步や社會組織の急激の發展から見れば、文壇が却つて輕く見られる樣な所が無い

でも無い。演劇などの方面は殊にさうである。新劇や洋劇も行はれてゐるがまだ眞の國劇らしいものが大成せず、舊劇は徒らに枯渇した形骸の藝術になつてゐる。其れでも文學上の新味に依つて青年などは餘程動かされてゐるようであるが、兩方共餘り健全な狀態ではない。

更に批評界評論壇を見ても出色のものが多く見えない。隨筆風の評論や感想が澤山出るが、根本の問題に觸れたものは餘り見えない。小さな楽屋落の話の類が多くなつた。是は一つは批評の形式が近來變化して來た爲めでもあるが、又一つは文學よりも社會問題や政治問題に評論界の興味が向つてゐる爲であらう。今後批評家が偷大いに出て全く自由に理想的に文學界を批評しなくては大なる發達は到底望まれないと思ふ。近來バックやスピンガー等の説に文學の社會性と云ふ事を說いて批評の創作味をも論じて居る。文學が社會的の效力のみに依つて價値が有りとする考は尙疑問とするも、文學が創造的批評又はより深き批評であると云ふ考へ方、從つて批評に創造的の眞味を要求する主張は今の我文壇にも當篏まるのである。乃で今日行はれて居る現時文學と明治時代の文學とを對照すると、次の様な相違が見える。

明治文學	大正、昭和文學
國家的	世界的
個人的	社會的
大人的	青年的
感情的	思索的
獨創的	模倣的
舊技巧的	新技巧的
小說的	戲曲的
} 舊世紀的	} 近代的

要するに現代の我文壇は相當に進歩しても居るし、又努力してもゐる樣である、が餘り急激な發展を經た爲にまだ何となく青年時代で、內容も形式も固まらない所がある。國民文學として眞の生命や特質が確立する迄に出來上つたものではない。矢張發達の階段中にあつて、未成品の所が有るものと謂はなければならない。

（八）　今後の日本文學

偖現時の文學を今日觀察し盡すと云ふ事は素より不可能の問題である事は最初より述べて來た所であるが、右の樣に大觀した結果から云つても、未だ内容が十分充實したものでない事は斷言出來る。分化の諸方面に於て行詰りや遲緩や退步の色さへ見えるものが有る。客觀的に史的に、一時代の國文學として見れば滿足し得ないのである。

然らば今後の日本の文學、我文壇は何れの方向に動いて、如何なる傾向を取るであらうか。又更に我々の理想から見て如何なる方向、如何なる傾向を取らせなければならないだらうか。素より微妙複雜な人心の發動を豫め知る事は出來ないのであるが、已に今日滿足しない所を以て之を將來の文學に期待するのは當然の眞理で、發達史的の原則から見ても追々と其等の性質が實現されるに違ひない。其觀察點は大凡三つ有るのであるが、第一には先づ近時の文學其自身に缺如してゐるものは何であらうか。第二には過去の國文學史上の完全なものに比

べて缺如してゐるものは何であらうか。第三には世界文學との比較上に缺如してゐるものは何であらうか、是である。

此三點から考へると、將來の國文學には如何しても次の樣な八要件が滿たされなければならないと思ふ。先づ第一の點から云ふと(一)國民文學としての深い特色が有り、國民性を十分に發揮し涵養する文學で無くてはならぬ。今日の文學は全く都會文學丈けで作られてゐて地方文學や鄕土文學と云ふものは全く顧みられない。併し一國の文學の眞の建造には、單に所謂都會文學丈けではいけない。地方や鄕土の要素も一層深い用意や趣味に於て其中に取入れらなければならぬ。民衆文學なども斯う云ふ點からして見ると、尙調和と發達の餘地が有るのであらう。

(二)一時の流行性でなく永遠の趣味を進める文學を興さなければならぬ。時代の刹那的又洞窟的趣味に囚はれてはならぬ。國民文學としては何處迄も永遠の生命、眞生命、眞の美を見分けて、其のより良き向上を圖らなくてはならぬ。例へば立體派の繪の樣に三角の顏を

畫いて人の顔面を表はす様な事は、殆んど一時代の幻想とも云ふべきもので、必ずや永久人類の信憑を期し難いものであらう。文學にしてもさう云ふ様な趣味形式が一時の國文學として行はれる事は、時代や國民の損失である。優美と眞理、人生の眞相に徹した形質を具備した文學趣味に涵養されなくてはならぬ。

(三)神祕性と信仰味、是は過去の國文學に或時代には餘程進んだ事がある。中古以來佛教の信仰は殊に著るしく文學上に現はれた。謡曲など其著るしいものである。さう云ふ時代の文學と同じ意味で求めるのではないが、現代文學の神祕性や信仰味は尙薄弱である。一般に象徴主義などから此方向に進むので、イブセンやマーテルリンクから餘程影響を受けてゐる。其中で新浪曼派の作品には割合に神祕主義の要素が多く含まれてゐる。一體現代の二十世紀は科學の大發展期に入つて居るが、科學以上人心は更に神祕の世界に着目して來た。第四次世界など云ふ事が問題になつて來て、哲學や心理學にも神祕主義の接神術や[illegible]靈などが色々と討究されてゐる。ヴアイネルやロフタスの說く所なども其れである。[illegible]現代の人心が、科

學の討究以上不可思議、神祕とする世界への要求を示したものである。今後の國文學には矢張科學的の要素以上、さう云ふ神祕的の要素や信仰的の色彩が、一層眞面目に深刻に取り入れられる事が必要になつて來るであらう。

第二には(四)詩歌の革新の問題がある。前時代の國歌の發達を考へて見ると、現在の短歌長詩共に今後の國民詩歌として、如何しても大きな革新と向上を見ねばならぬ。詩形內容韻律皆殆んど未成的である。童謠などの機運も今後一層善導して、國民の趣味心の發達に資せしめるのが良い事であらう。

第三には(五)社會性、世界性の充足が必要である。現代文學の內容が社會的世界的になつたと云つても尙ほ淺い所がある。大文學には一層其背景の社會的意味、世界的要素を深くし調和させる事が必要に成つて來る。

(六)大叙事文學の建設文學を叙事詩、抒情詩、戲曲に三分すると現代までに抒情詩や戲曲は兎に角として散文學の叙事文が淺くて小さい感がある。大きな大叙事文學が餘り現れない。

もつと偉大な叙事文學が出て、一層複雜な雄大な世界を描寫する樣にならなくてはならぬ。嘗てゝ東京大災なども其について五六の作品が出てゐるが、あれ程の大事件はもつと深刻な大叙述を加へて永久的の作品中に十分材料とされなくてはならない。例へばニコライ堂が燒失して拇指大の寶石が其燒灰中に在るとか、火災の最中死人の指から指環を何百となく切り取つた盜賊が出たとか云ふ樣な事は非常に珍らしい事件で、大叙事文學中の一つの場面としてもいゝ話である。さう云ふ事が尙澤山ある。文學上にさう云ふ叙事が正確に雄大に描かれると云ふ事は、あの樣な天災を國家が紀念する上から云つても必要であるし、人類生活に對する貢獻としても、文學上から必要な仕事である。ユーゴーの噫無情などに比べても、我國の小說の叙事は如何にも小規模である。或はさう云ふ點では過去の中古、江戶時代の小說よりも小さくなつたかと思はれる。無論其れには又文體上からも大いに練成される要がある。

（七）滑稽文學及び喜劇の發達滑稽文學が一般に振はないが、殊に戲曲に於いて幼稚である。昔の狂言や道化芝居以上に餘り出でない。狂言は當時の新文學の傾向の一方面を代表し

たもので、其題材は新社會の非常に廣い範圍に渉り、其滑稽も興味ある可笑味を主としてゐる。今日の喜劇は狂言よりも淺薄一樣で、大きな社會的背景や自然の趣味も乏しいものである。大國民の文學としては、此方面の發達が矢張必要である。

（八）科學の要素是も新自然主義の文學には特質として餘程見えてゐるが、今後の國文學には一層科學の精神や其內容を同化して行く必要がある。智的の効用趣味は西洋文化の長所とする所で從つて歐米文學には智的、科學的の內容が自然主義以前からも進んでゐたので、近世文學では一層精緻な發達を遂げてゐる。さう云ふ內容が深く有效に正當に文學の中に入るのは、矢張大きな國文學を生み出す一つの要件である。叙事文學の發達の事を述べたが其點からも此事は必要である。

此樣にして今日の文壇が一段と深刻化され美化され、且大きく確かに描寫されて行つたならば、其時こそ初めて日本文學に大きな內容が加はり、性格が確立し、力の充實した眞個の國民文學として認められる者が生れる時である。其には文壇が一層眞面目な持久的の努力を

爲す事と、國民の精神上及び社會的生活上に文化的精神を教養する事が何よりも必要で、其が爲には矢張り政治の善導や教育の力に俟つ所が非常に多いのである。

三、歌謠史上より見たる日本女性

一、うたの本質と女性

日本女性の特質と其發達とを文學史上主として歌謠の方面から叙べて見よう。代々（よゝ）の歌謠は寔に各時代の文學の精粹である。國文學の一般を狹義の文學と廣義の文學とに分けると、狹義の文學は所謂美文學（ベルレッター）と呼ばれるものであるが、歌謠は實に之が一中心を成すのである、際（きは）も無く幽かなる想ひ、白く眞紅く芳烈なる心、其等は實に歌謠文學の特質であつて、精妙なる歌謠の詩句は能く幾千萬の人心を鼓舞し熱狂せしめる。此の特質は丁度女性の人生に於ける精妙幽雅な心性の寄與と好對比を成してゐる。女性の幽雅、貞淑、溫和、勇氣等の光、所謂女性美の句はしい發揮は、人生を德化し詩化し淨土にするに大きな貢獻をする力がある。人

情世界の精華が其處に在る。其の性情の高く快活に天空にインスピレーションと成つて圓舞する樣は、恰も詩歌歌謠が文學中に光彩陸離として高空に翺翔するに宛然(さながら)である。歌謠の本質は女性に近く、歌謠は女性に依つて育まれた所が少くない。歌謠に幾多の女性美が現はれたり、詠歌者として女性の適してゐるのは是が爲である。

我國の詩歌歌謠は古くは凡べて『うた』と言つた。『うた』とは打つ意である。內心の感興活動を調節に合せて、或は拍手し或は木石の類を打ちつゝ詠め出したものが、卽ち『うた』の原意である。古く歌唱に拍上(うちあげ)（樂(うた)げ）と云ひ囃やすと云ふのも皆打ちて調子をとる事である。其の調節は卽ち我國歌に特有のリズムを成すもので、リズムとは身神活動の調子の意である。古歌が『うたまひ』と言つて多くは舞踊と伴つてゐるのは之が爲である。外國や野蠻人の間に於ても、或は步行踊と云つたり、或は舞(バラドダンス)謠と言つたりして、詩歌の起原をリズムある運動に求めてゐる樣は大抵一致してゐる。『うた』は其の本質に於て散文よりは感興的であり感情的なものである。『うた』に於て女性美が多く現はれてゐるのは決して偶然でない。

『うた』の起原には種々の場合がある。從つて其の種類は大和時代の中頃迄にも非常に多數に上つた。決して卅一文字の和歌と云ふものを主にして、一二類が行はれたに過ぎないと云ふ樣な、單調な状態では無かつた。戀歌があり戰爭歌があり酒樂歌があり國見歌があり、其の他物語歌があり、神事歌があり其の形式も亦極めて變化に富んだ自由なものであつた。萬葉集の頃になつては五七調の短歌長歌が相並んで全盛時代に入り、旋頭歌佛足石歌の類や神樂催馬樂の古い種類も亦行はれた。併し和歌と呼んで直ちに短歌を意味し其の上に千變萬化の發達を見たのは平安時代に入つてからである。奈良時代の和歌はまだ唱和歌の意にも用ひられたが、茲に至つて專ら『やまとうた』の意に呼ばれる樣になり、漢詩なる『からうた』に對して通用された。此の頃の和歌『やまとうた』には最早長歌を含む事が稀になり、古今以來の勅撰集にも僅に一二首を採るに過ぎず、末期の悅目抄頃からしては歌體に長歌旋頭混本歌等の諸體を擧げてゐるも、說く所は專ら短歌のみの上にあつた。無論其の間にも種々の歌謠が現れて行はれた。今樣宴曲小歌の如きは其れである。併し短歌が和歌の本統を占めて修練さ

れて今日に至つた歴史は、極めて長いと謂はなければならない。中古の人も我々も和歌と言へば直ちに短歌を意味する様になつたのは、此の點から見て尤も當然である。

二、神話時代の歌謠と女性

神話時代は普通に云ふ神代の事である。古事記や日本紀に其の傳へがある。非常に古い事で又文字の無かつた時代、文學上で所謂游離文學の時代であつたから、歌謠の傳つてゐるものも餘程稀であるが、流石に神々の活動された時代である丈けに、女性にも頗る特質の多い優れた人々が現れた。歌謠の方面で初に見えるのは諾冊二神の天御柱淤能碁呂島を巡つて唱和された『あなにやしえ男を』の句である。まだ歌と云ふには整はず、僅に感動詞と名詞丈けの抒情的對句の形式である。即ち强大な感情の籠つた投出語の類で、極く原始的の歌謠の性質を示してゐる。柱巡りを左右から進まれたと云ふ所に歩行運動に伴つた所も見える。此の唱和の句を初め女神なる冊神が唱へられたのを、男神諾神が女神の先立てるは良くないと宣

はれて次に男神が先に唱へた事が見えるのは、冊神の氣性の雄々しく强い事を示すものであらう。其の事は後に我國で多くの神々を生まれ又諸神を黃泉平坂に追はれて呪詛された事などにも見えてゐる。男神も强かつたが女神の勇武な事も非常に著しく見えて、我神代史の初めに日本女性の一大特性を示してゐる。素尊の樣な武勇神の生れたのも斯う云ふ神の御性に由るのであらう。

天照大神が女神におはした事は又日本女性の最大の誇りであらう。大神の御歌は傳はらないが、神德天地に輝いて國礎を萬代に築かれた事は言ふ迄もない。大神の岩戶籠りの時には群神が岩屋の前で篝を焚き夜を通して笑ひ樂げた事が見えてゐる。其の時鈿女命が奇態をし笹葉を持ち空槽に上つて歌舞したのが、本當の歌謠の初めである。其の句は『あはれあな面白』と云ふ頭尾韻の多い抒情句で、二三四の短リズム句から成つてゐる。群神が手拍ち合唱した。即興的の句であるが、快活な女性鈿女命の面影が見える。之が又神遊、神樂の起原である。尊素の神話では鳥髮山の麓稻田の奇稻田姬について名高い『八雲立つ』の歌がある。須

賀宮で宮造りの時詠まれた卅一文字短歌の初めの歌である。此の歌は無論合唱されたであらうが、歌性は主として男神の新宮の喜びの感情を表はした新室樂(にひむろうたげ)である。『出雲八重垣妻ごみに』の句は今迄の註に新妻なる姫と共にの意に解されてゐるが、其れは寧ろ頌詞的で本意は詰込る意、狭く差入りて堅固なる家の様を叙べたのである。今も山間の地に馬籠(まごめ)、妻籠(つまごめ)、吾妻(あづま)など云ふ妻は皆詰る意である。建築に妻戸と云ひ切妻と云ひ、衣服に褄と云ふも同原である。詰籠の意で八重垣の語も照應の意味が一層明かになるのである。現に角姫神の事は此の歌から顯れて熊野や佐田宮に祀られ、出雲の經略に大きな功蹟を殘された。杵築の宮の稲田姫の神像では頗る美人に見える。是は實際か判らないが又傑れた女性の典型であらう。父母を須賀宮主に請じた傳へにも孝養の様が見える。

大國主命の頃には上代の男女關係を示す事例が少くなく、女性の詠歌も亦多い。命の出雲の嫡妻神須世理姫は、命の大和路の旅の訣れに嫉妬の歌を詠んでゐるが、其の句には尙

　吾(わ)はもよ女にしあれば汝(な)を除きて男(を)は無し汝(な)を除きて夫(つま)は無し

の如く貞操の情の熱烈さが見える。八上姫には嫡妻に對する謙德の事實がある。又越の沼河姫と命との長聯の戀歌も、對句が多く叙事的抒情歌である。無邪氣純情の所がよく見える。此の八千矛命歌の類は詞形が長大で辭句も整つてゐるから、後世の神劇歌の類であらうと言ふ說がある。多少さう云ふ性質もある。此の沼河姫には諏訪の神に成られた建御名方命が生れて、其の妻神に八坂刀賣神があり、其の女子神に妻科姫命、妻屋水玉姫命、垂姫命などが出られて信越地方に祀られた。

出雲系の神では味耜高彥根の妹天稚彥の妻下照姫の詠んだ人鄙歌も名高い。夷曲といふ。長短不整の比喩歌二首で歌性は疑はしいが、深層的に感情の強い詠である。更に天孫降臨以後地神時代の詠歌では、皇孫の木花咲耶姫に詠まれた『沖つ藻』の歌が最も優れてゐる。形式は八雲歌と同じく卅一字の短歌形であるが、濱千鳥に寄せた純抒情歌で、綿々たる思慕の情が溢れてゐる。姫が御子生を疑はれたのを怒つて逢はなかつたのを恨んだ意である。彥火々出見尊にも海神の女豐玉姫に寄せた詠があり、姫の『赤玉の光り』の詠が傳つてゐる。天孫に

對する敬慕の情がよく見えてゐる。

神代の住居には岩倉、奥津城、戸、戸（へ）、家、巣、み巣、屋、宮などある。殿も古い。併し社は尙後の語であらう。神代の結婚譚に往々悲劇譚の傳へられてゐるのは一夫一婦若くは一夫多妻風であつたけれども、異神族との結婚に伴れて母系主義が入り、女子の勢力も頗る大きかつた爲であらう。神話の歌謠を通じて見える女性の特質は（一）活動的（二）貞操的（三）情熱的の點が非常に強く現はれてゐる。我國女性の天稟は決して纎弱無性格的のものでは無くて、男性と共に雄々しく確實な性格を發揮してゐる事が、他の國などに比して餘程優れてゐたのである。

三、大和時代の歌謠と女性

大和時代は神武創業から宣化帝の頃迄で、歌體の分化時代に當つてゐた。神武帝の皇后伊須氣依姬を迎へられる折には、幾多の舒情歌が傳つてゐる。此の皇后が帝の崩後手硏耶命の

反亂に詠まれた狹井河、畝火山の二歌は名高いものである。帝の片歌調の詠歌の多いに反して短歌調である。だから是も後世の作歌と云ふ說がある。併し風動の比喩歌の邊りは帝の御歌の比興風に似てゐる。崇神帝朝には倭姬命杖代となりて神宮を大和から伊勢に遷して祀つた。倭姬命は日本武尊の皇叔で東征の折の話は名高いが、其の頃の祭には最早神歌神舞が行はれたであらう。日本武尊については、女性の上に幾多の逸事がある。走水海に入られた橘姬の『さねさし相模の小野に』の詠歌は入水の辭世歌としては稍々疑はしい所があるが、尊に對する貞烈の思想を詠じた好歌である事は云ふ迄もない。熱田に神劍を預けられた宮簀姬の襲(おすひ)の歌も即興的で面白い。姬は尾張國造健稻種公の女で、後神劍を守つて熱田社を祀り、氷上姉子天神に祀られた。今熱田の斷夫陵を此の宮簀姬の陵墓と云ふのはどうであらうか。寧ろ建稻種公等國造家に關するものではあるまいか。尊の薨じた後、倭の妃等が悼み弔つて白鳥のを哭げき追つた折の片歌四首は、後の大葬歌(みはふりうた)に用ひられるものであるが叙事風である。垂仁帝朝には佐保姬后の大悲劇事があつた。歌は傳はらないが、凄絕な事件丈けに、幾多の哀

歌が歌はれたであらう。皇后日葉酢姫は遺旨で人埴を停められた方である。當時の女性は矢張り人情に於て非常に潔烈であつた趣が見える。

神功后の御歌は三韓征伐前や攝政時代の長い間にも餘り傳はらない。其の雄々しい傳說は主に西南地方に多く傳へられた。詠歌では外征後皇子が氣比神宮に詣でた後の待酒の酒樂歌が一首傳はつてゐる。御酒の德を頌へ少彥名神の賜物であるから十分飮めとの意を歌はれ、武內宿禰が代つて答歌を奉つた。母后としての心情の濃やかな歌である。應神天皇は歌人としても此の時代に優れた方であつたから、母后や帝も其の方に秀でゝゐたに違ひない。仁德帝も亦歌人であられたので、其の朝には女歌人が頻りに出でた。皇后磐之姬、黑姬、八田若郎女、口姬など皆叙事的舒情歌の作者である。磐之姬の『繼苗生や山城川』の長短不整歌は帝を恨んで歸宮する折の作であり、萬葉に最古歌として見えてゐる『君が行き』の短歌も、頗る怨慕の情を詠まれてゐる。黑姬の作も亦愛情を詠出して之は短歌形である。八田若郎女の歌は溫順の趣が見える。應神帝朝頃から頓に歌謠界の勃興したのは、阿直岐・王仁などに依る

漢文學の傳來に依つて、記錄の上に一大進步を來し、今迄の游離文學から漸く固定文學の域に入つた事が一大原因である。之は傳承の上のみならず、詩歌の內容に於てもさうである。漢文學の傳來は何と云つても我文學の發達上に大きな刺戟となつた。允恭帝の妃衣通姬の物語は又頗る名高いものである。皇后の妹で帝が近江から迎へた話がある。併し其の傳へ歌謠もまち〳〵である。人口に膾炙してゐる『わがせこが來べき宵なり』の歌は、允恭帝紀と古今集とに出てゐる。紀には尙右の物語を詳記し、和泉の離宮に住はせた事を記し『長へに君も』の歌と二首を傳へてゐる。然るに古事記では姬と皇太子との關係とし、伊豫流に姬が訪ね行く時『夏草の』と、『君が行き』の歌二首を詠じた趣である。萬葉集には此の『君が行き』の歌を載せて居る。併し是は前に記した仁德后の御詠と同歌であるから何れかに誤傳があるに違ひない。大體に衣通姬の物語や詠歌は、記よりも書紀の傳への方が宜い樣である。從つて萬葉の同歌も仁德后の作を紛れ記したのであらう。紀の詠では離宮に憂はしげに帝の上を想ふ女性の心情が好く見えてゐる。允恭帝から雄略帝の頃は大和時代歌謠の中天時代で、

雄渾な長歌が頻りに男女の歌人に謳はれた。雄略帝の詩情に富まれた事は萬葉集にも見えてゐるが、此の時の長歌に三重の釆女の奉つた歌が頗る長聯である。對句の美くしい言䛠歌である。皇后の獻酒歌も長歌で、其の他赤猪子や小戸姫の詠が見えるが、其等の歌には皆忠誠の情がよく現れてゐる。浦島の弟姫の歌と云ふのも、此の頃あつた樣である。

更に武烈帝朝には影姫と鮪の事件がある。影姫の歌垣の歌や、ことに鮪の殺された時の葬歌は哀切を極めてゐる。歌垣は此頃既に非常に盛んで、都の大路などでは數百人の列が集り皇子以下群臣が交つて燿歌した。風土記や萬葉集に見える樣に、東國で筑波山の歌垣は殊に有名なもので、男女の即興的戀歌が盛んに歌はれた。支那の踏歌に出た女踏歌と云ふも宮中で屡々催された。當時は又佛敎渡來前で三韓外交事件が多く發生したので、其の方面の歌謠が大分傳つてゐる。繼體帝紀に見える近江毛野妻の葬歌や、欽明帝朝の松浦佐用姫傳說や、調伊企那夫人の大葉子の歌などが其れで、志操の凜烈な哀歌が少くない。佐用姫にも大葉子にも領巾を振る趣が謳はれてゐるのは、其の頃の女子の風俗が見えて面白い。今のショウル

や狐皮を着誇る女性達は須らく三誦しなければならぬ。長歌では勾大兄皇子の妃春日皇女の『こもりくの初瀬の川ゆ』が萬葉前期の作風を示してゐる。此の様に大和時代の歌謡は、我歌謡の固有の性質の最も自然に發達した時代であつたが、我日本女性の發達上から見ても、頗る自然と自由と純烈との極めて明確な一時期を形造つた時代であつた。其の性質は(一)貞烈的（二）忠誠的（三）女丈夫的の所が見える。初に言つた通り詩歌の特質と女性美の發揮とが、奇やしく合致して弦然として鳴り出で、文學史上に一大高潮時を現出したのである。

四　飛鳥時代及び奈良時代の歌謡と女性

欽明帝の朝佛教渡來以後天武帝朝迄が飛鳥時代、光仁帝朝迄が文學上の奈良時代である。一に萬葉集時代といふ。和歌の種々な歌體が五七調に整正した時代である。此間は實に文學上で歌謡の爛發した黄金時代に當つてゐた。初めに推古帝齋明(皇極)帝、中頃持統帝元明帝元正帝、終に光明后孝謙(稱德)帝の如き女性の方が頻りに尊貴に出でゝ文化に貢獻し、詠

歌にも齊明帝持統帝光明后の如き幾多の名吟に範を垂れられた。併し藥師寺の佛足石歌は光明后の御作ではない。此の朝の初に優れた女歌人には額田王大伯皇女などある。多くは戀愛歌であるが情思の艶麗深切な好歌が多い。額田王の春秋判歌の如き萬葉中でも名高いものである。比喩的情歌として其の技巧も非常に優れてゐる。大伯皇女には大津皇子の急變に亡弟に對する無限の愁思を詠んだ作がある。萬葉の由緣歌に名高い眞間手兒奈、櫻兒、菟名比處女等の事蹟も此の間の事である。二男一女の悲戀に面して後人が萬斛の思慕を注いでゐる樣に、はかない村少女等にも幾多の苦吟があつたであらう。さう云ふ事件が傳說となつて、長く奈良時代迄も詩題に詠まれたのである。

歌界の天星人麿には大和に依羅娘子あり、石見にも妻があつた。人麿の名歌は此の女に寄せたものが多い。萬葉の女歌人には坂上郎女、坂上大娘子、石川郎女、笠女郎、狹野茅上郎女などがある。坂上大娘子の歸化人理願尼の死を悼んだ歌は今の思想としても頗る面白い歌である。奈良の上流の文化的女性が佐保山の別墅で、異國の尼僧の寂しい死の事實を見て、色々と

死や人生觀や少女の儚ない戀思を叙べてゐる。其の頃の奈良京の女流の生活相の好く見える歌である。石川郎女や茅上郎女は、萬葉末期の詩人であつて、文壇のペートロンであつた大伴家持との戀歌が實に多く詠まれてゐる。或は紅く或は紫に或は桃櫻柳梅の如く、女性の性格と情懷とが取り〴〵に吐かれてゐる。家持はやがて天平朝の業平の觀があつたのである。家持には妻に代作して都の母に贈つた長歌もある。戀愛歌について見る可きは、飛鳥時代迄は尙自然奔放の思想を直叙するものが多かつたが、奈良時代に入つては大いに世間的道德的となり、徒らに人目の妨げを慨き、道義の壓迫を怨む歌が滔々として風を成した。手兒奈傳說などでも單に昔の時代を思慕し、今の世には得難しとする思想である。直接のもの間接に、直情のもの形式化内裏化し、素朴のもの漸く複雜に、理と才とを交へて弄するに至つた。是れ尙文學上に於ける一般の情勢と其の趣は相同じいのである。

是等の中央都會に於ける戀愛歌に對して、一大別趣の歌謠群を成すのは東歌、防人歌、筑紫歌等に混入した女性の歌詠である。素より無名作歌であるが、其の數は東歌の如き男女相

半ばしてゐる。武藏の東歌に、

我せこをあどかも言はん武藏野のうけらが花の時なきものを

や、信濃の歌に

信濃路は今の墾道刈ばねに足踏ましむな沓穿け我兄

の如きは思想の眞率醇朴何等の愛すべき歌風であらう。筑紫内海の海港には後世の白拍子の樣な遊行婦がゐて、行客に對して詠じた歌も少くない。志賀白水郎歌の樣な海女の詠も多い。防人歌等には父と共に母に對する孝順の情を詠じたものが頗る多く、忠君思想や家族精神の深刻な發露が到る處に見えてゐる。さう云ふ所に奈良時代の國民的生活に於ける母性の大きな存在が窺はれる。

又宗教的傳說的の方面では、萬葉に竹取翁の仙女や柘枝の仙女が見え、或は尼寺の尼僧の戲咲歌なども行はれた。傳說に有名な道成寺や當麻の中將姫などの出たのも此の期の事である。要するに萬葉時代は上代振の歌謠の最後の光焰時代として、男歌人の上に幾多最大の詩

星が輩出したが、女歌人に於ても亦其の輩出時代を現出した。茲に見える特質は（一）熱情的（二）醇雅的（三）社會的の傾向が著るしく女性の上に深められた事であつた。

五　平安時代の歌謠と女性

平安時代は我文學美術の金殿玉樓時代である。上代の素朴であつたもの、雄健であつたものの奈良に入るや、幾多外來文化の精髓を渾和して其の極致に展開せられた。然るに平安時代は其の遷都の根本的に一變して雄大であつた樣に、文化の性質も全く一變し、唐文化及び新興宗教の淘冶の下に、前古無比の教化社會を現出した。其上此時代に勢を得た藤氏の貴族的地位は、社會組織に不拔の基礎を與へ、皇室に最も近く權勢を一門に蒐めて、平安京は即ち藤氏中心の貴族社會を形造つて末期の平安時代に及んだ。教化の限り無く豐かな時代、貴族の嚴めしく時めく社會、其處に文學美術の花の咲き匂ふは素より當然で、門閥貴族の盛んに社交儀禮を尙んだ教化社會の事とて、女子の地位は著るしく進んで女歌人女作家が夥しく世に出

た。男女の交際が開放せられ、戀愛の風俗行はれ、社交の間に和歌は最も流行したのである。

初期の詩壇には檀林皇后、有智子内親王などが出たが、歌人の女流は奈良時代程出でなかつた。貞觀以後古今集時代には漸く女歌人も多く、六歌仙に入つた小町を初め伊勢御、白女など見え、後撰集に筑紫の檜垣姫も名高い。小町は業平と一雙の情熱詩人であつたが、歌調が纖細哀怨で志操は乏しかつた。拾遺集は道長の全盛を極めた寛弘の盛期に出でゝ上東門院の下に和泉、紫式部、赤染、伊勢大輔、馬内侍の五才女があり、清女も皇后宮に仕へた。其歌才は和泉の豐艶紫女の優麗赤染の多才など夫々に特質が見える。紫女は又散文に源氏物語の作者として名高い。散文ではあるが歌物語の性質上和歌を配すること千首に近く、一大歌集の觀がある。源語の小說としての思想構造の優れてゐる事は素よりで、雨夜の品定めの樣に態々女性の長短を批評した一節さへあるが、歌集としての趣味も頗る深いもので、紫の上、明石の上、葵上、女三宮、浮舟など夫々の性格を、或は自然に寄せ或は人事に托して詠出してゐる。清女も詩才は鋭かつたが和歌の才は左程秀でなかつた。紫女は女性としても圓滿で理智に長

じてゐたが、逸早く世界的の光輝ある大物語を完成したのは、我國女性の爲に大いに誇とするに足りるのである。歌物語には之より先、竹取物語に理想の女性赫耶姫が描かれ、伊勢物語には戀愛の種々の境地を小品にしてゐる。又空穗物語の貴宮（あて）とか、落窪物語の女君の様な特殊の境遇の女性も見えるし、蜻蛉日記の著者の女性は、母性と夫の愛に充ちた歌を多く詠じた。紫女の頃に至つて源語の様な大作の出でたのも、一半は時代の力であつたのである。

後期には相模、大貳三位、小式部等が出で、選子内親王の様に發心集なる法文歌や廿八品集を輯めた歌人も出でた。續いて後拾遺の宮木、詞花の靡、千載集の戶々、撰集抄の江口尼など云ふ女流も見える。物語には詩人肌の孝標女に更級日記があつて和歌が多く、歷史物語の大鏡榮花等にも老尼の話や女流の記事が多く、傳說集今昔物語集には八宮の女の話に哀切極りなき悲劇を語つたり、又時代の風俗の退化は幾多の不貞譚なども見えて大抵和歌が入つてゐる。其の上後期の末平家時代の頃は、宗教的音樂歌謠の全盛時代に當つたので、和讃今様の流行が上下を風靡して禁中にも今樣に白拍子を召された事があり、熊野詣にもさう云ふ

ものを夜もすがら謳ひ明す風であつた。舞の白拍子は此頃起つたのである。平家物語に見える祇王や佛や小督や侍從熊野などが出たのも此の間の事である。前にも言つた樣に平安時代の社會は佝く迄教化的で貴族的に成り立つてゐた。最も趣味を尙び、もの丶あはれを生命とした。そして女性の開放が前後に比ひが無い許りであつた。茲に於てか此の期の女性には（一）優美的（二）才智的（三）戀愛的の特性が非常に微妙高度に發展したのである。

六　鎌倉時代、吉野、京都時代の歌謠と女性

鎌倉時代から政治上に社會上に急激に一大變化をしたのは武家時代の現出である。源家三代、北條氏九代、吉野時代の五十餘年、足利幕府の十餘代に續く最後の群雄割據の時代に至る迄、武家の勢力は社會の全面を震撼し、盛衰興亡の場面が急速に轉換した。死生は現前の事實となり、貴族趣味は破壞せられ、庶民的地方的の生活が日に加はり、女性の地位も著るしく動搖し極限せられた。時に傑出した女性も出でないではなかつたが、教化の匂ひが劣

り、歌謡の上にも左程の天才は出でなくなつた。初頭に出た女傑政子は二位尼とて晩年には供養祈願が多かつたが、歌集は傳はらない。靜や虎女には白拍子の歌詠がある。遊女でも貞操の名が高い。新古今集の頃には式子内親王、俊成女等は最も優れ、建禮門院右京大夫にも集がある。妙女と云ふもある。中頃の歌人では阿佛尼が有名で十六夜日記にも見える樣に、非常に優美な趣味と母性愛とに充ちた歌風である。

大宮院、宮内卿、辨内侍、初若等も續古今集以後玉葉集頃の名高い歌人である。鎌倉期の歌合はまだ中々盛んで、諸家の女房に名吟を出すものが多かつた。百人一首なども此の中期の作である。謠ひ物では平安以來の今樣和讃が益盛んに行はれ、承久記に龜菊などの歌女もある。平家、盛衰記も此の頃に成つたので、其の史譚は源平時代の事であるが、趣味風俗には此の頃のものも多く入つてゐる。宗教的迷信が盛んで法樂歌の類が頻りに詠まれ、高野比叡戸隱書寫等には女子の宗教上の禁戒が八釜しく、女人の罪障觀が重く說かれた。高野や善光寺に名高い刈萱石童丸の話なども其の頃專ら行はれた。此時代又歌謡に新らしく宴曲が出て、優倡や閑雅の

士が諷詠した。其中には女性の作も有つて、優美な古典趣味を綴つた所が後の謠曲に似てゐる。
吉野時代の數十年間は文學上に於ても古典趣味と新時代趣味との鬪爭時代に當つてゐた。勅撰集は北朝に風雅集、南朝に新葉集李花集等出でたが、永享の新續古今に至つて止められた。嘉喜門院、新侍賢門院、新宣陽門院等が艶麗哀切の歌風を示してゐる。千代能尼の出たのも此の頃である。禪味を帶びた詠歌がある。京都時代は新歌謠の勃興時代で殊に謠曲の全盛時代に當つてゐた。謠曲は其れ自身が劇的神秘的である丈けに、其處に出て來る女性も小督夕顏巴小町山姥など狂女や亡靈の形で、凡べて呪はれた女性、罪障の女性が多い。歌舞と風流とを生命として無常美と運命觀と信仰とを美しく演出してゐる。韻文では無いがお伽草紙にも亦幾多の女性が語られてゐる。鉢被、落窪、浦島、淨瑠璃姫などの類で、其女性は多くは和歌に優れた美人である。舞の詞と云ふものも此の時代の新らしい文學である。是は語り物で今樣の類の歌謠が多く入つてゐる。曾我や高館を語り、其の女性は詠歎的、誇大的である。女曲舞も亦流行した。乃で小歌早歌の類が著るしく行はれたので、此の期の中頃には閑

吟集の様な小歌民謡の歌集さへ現れた。茲に見える女性は謡曲の古典的とも舞の詞の誇張的とも違つた浮世の有情人の如實の生活である。朝妻船の女や泊津の白拍子や、野趣に富んだ里女や宇治の茶摘女の類や、或は運命を或は自然を或は戀と浮世の相を、或は無常の感慨をすら嗟歎し放吟したものが、即ち集の歌謡で、形式も亦多趣多樣である。下層庶民階級の女性の生活や心理が好く見える。末期には淨瑠璃の作者と云はれる小野お通や出雲の歌舞伎若お國の樣な女性がある。又斯う云ふ歌舞俗謡の女性と別に、戰國亂離の間に瓜生保の母、細川忠興の妻、柴田勝家の妻の樣な烈婦の例が甚だ多く、其の詠歌も亦少くない。大塔物語に見える善光寺の縋菊などは昔の虎御前の話に酷似してゐる。併し大觀すると武家時代は女性文化の不振な時代であつた。其は言ふ迄も無いが其原因には單に(1)武家時代戰亂時代であつたと云ふ許りでは無くて、尙次の樣な幾多の副因が在つた。(2) 五山文學、僧侶の文學が盛んな時代であつた事 (3) 一般に文學不振の時代で女子の敎養が乏しく、狂女など多く出た事 (4) 連歌俳諧の盛んな時代であつた事 (5)女子の戀愛よりも男色の風が行はれた事などが其で

ある。之に於て武家時代の女性の發現は季末に至るに從つて、一方は宗教教化の方面から、一方は道德社會生活の方面から段々退化して、前期に較べると餘程光彩が失はれたのである。其特質は（一）古典的（二）迷信的（三）散漫的の點にあつた。

七　江戸時代の歌謠と女性

江戸時代は武家的封建制度の極度に完成された時代である。家康は殊に戰國の後を受けて文教政策に力を注いだので、江戸駿府京阪等に文學宗教が大いに興り、社會の制度秩序が非常に整つた。初めに淀君桂昌院春日局の如き政治上に傑れた女性も見える。女子の教訓には女大學が專ら用ひられ、益軒の妻東軒の樣な學者も出た。乃で元祿時代に入つては、江戸京都難波に文運が一時に爛發して新文學が續々榮えた。西鶴の浮世草紙、近松の新淨瑠璃、芭蕉の正風俳諧の如きが是である。後の二者は韻文である。近松物の女性は時代物に於ては多くは道德的若くは運命的の存在を示してゐるが、世話物の女性は夕霧でも小春でも油地獄の

女主人公でも、多くは義理と人情の葛藤に處した美を描いてゐる。浮世草紙の女性は此人情の自然放恣の活躍を寫したのであるが、近松は稍後れ又淨瑠璃文學の教化的性質からしても分化社會、秩序社會中に於ける人情の悲劇を主題にしたのである。芭蕉は又江戶に出て正風に於て永久の人間性を詠じた樣に、女性に於ても常に永久の女性を詠じた。天明期の蕪村の如きは其中主に美の方面から女性を詠じた俳人である。併し元祿期のさしもに盛んであつた文壇にも、女流の作家歌人は餘り出でなかつた。これらは平安時代などゝ全く趣が別であつた。何故かと云ふに(1)女道が全く消極的道德的になつた事(2)女子の教化が低かつた事(3)文學者戲作者が全く男子であつた事などが其主なる原因である。

後期の寶曆期頃からは一般の文運が江戶に榮えて益々隆盛に趣いたし、國學の勃興に伴れて女流にも歌學の門に學ぶ者が漸く多くなつたので、歌人や文人の名有る者も東西に輩出して、町子の松蔭日記や麗女の月の行方や數多くの歌物語類が出たり、千代女秋色女智月尼園女等の俳人や、歌人では眞淵門の五才女と呼ばれた倭文女筑波子餘野子たよ女茂子を初め、

荷田蒼生子祇園の梶女捨女や庚子道の記の武女往事集の井上通女等が一時に競ひ詠じた。遊女の歌句や女百人一首の類も流行した。幕末勤王の士と往來した女歌人にも太田垣蓮月尼野村望東尼松尾多勢子佐久の川上氏などがある。小歌や淨瑠璃節も益々分化して化政天保の頃極盛に達し、琴歌清元小歌の歌女が頻りに流行した。前時代よりは太平な時代丈けに歌謠界に女性も多く出たが、武家社會の性質上左迄開發するに至らず、其特質は（一）道德的（二）人情的（三）保守的の傾向が見えてゐる。

八　明治以後現代の歌謠と女性

維新以後教育の制度が一新し女性が開放せられた結果男女平等となつたので、女性の一切の生活道德宗教等は全く自由の世界に入つた。歌謠の方面でも初めは江戸末期の系統の俚謠や琴曲や唱歌が行はれたに過ぎなかつたが、音樂學校が設けられて女流の樂人が出るに至つた。近年は、日本婦人も相當進歩の地を示してゐる。和歌の方でも短歌と長歌とが專ら行

はれ、初期には桂園風が行はれたが、新派の女歌人が出る様になつて新女性が一時に起り、專ら短歌界に向つて最近に及んだ。新女性の和歌の新味は、今迄の歌人よりも著るしく典雅と感情と美的の性質を加へた點にある。戀愛歌なども一時非常に行はれた。併し一般に感情的又は感覺的で深奥な思想味が無い。大正以後に入つて漸次個性的若くは理智的の傾向が進んで來たが、其進歩も大した事はない。此期の特質としては先づ（一）感情的（二）模倣的（三）社會的の三點に見出される。全般の缺陷として (1) 全人生的で無い (2) 自然的で無い (3) 性格的で無い (4) 格調が單調である點など今日も尙男性作家よりも一層女性創作家の人々の通弊とする所であらう。

九　日本女性と文化上の天職

上下三千年に渉る歌謠の變遷と、我女性の發達とは略々右の如きものである。其各時代の特質と一般の姿相とは尙次の樣に綜括される。

時代／特質	（一般的特質）	（代表的相）	（心理的特質）		（文藝的特質）
（一）神話時代	強き女性	册神、豐玉姫	情	意	イデアリスト
（二）大和時代	雄々しき女性	橘姫、神功后	情	意	
（三）飛、奈時代	豐かな女性	光明后、美佛像	情	智	
（四）平安時代	美はしき女性	紫式部、美眼像	情	智	クラシック
（五）鎌、京時代	迷信の女性	巡禮女、戰落女	情	意	ローマンチック
（六）江戸時代	敎の女性	奥方、世話女房	情	意	リアリスト
（七）現代	覺めたる女性	陸展日覺めた女	情	智	

心理的特質は情要素八、意要素四、智要素三で矢張情の要素が一番多く現はれてゐる。

文學上の日本女性は平安朝と奈良朝を最とする。他の時代は文學の素地背景としては有力であるが、文學上には微力であつた。二期の女流作家の盛況は世界の比較文學史上から見ても、餘程傑出した例である。元來女性は天才たるを欲しない。寧ろ天才を味ふものである。

男性に對して活動保守各其天分の相違がある爲であらうか。其點が又女性の家庭に於ける社會的文化的意義の大きい點である。女性の自由は心靈上教化上のもので必ずしも現實的ではない。矢鱈に生活職業政治の方面に延長する事は餘り効果があるものではない。其よりも家庭に於て社會の樂園、文化の保障たる事が、より價値があり天性に適した努力である。其には力めて精神的生活を豐富にし、性情の圓滿健全なる發達を期する爲に其不完全や偏傾の點とか、一時的の惡風とかを注意しなければならぬ。今迄の長い史的生活上から見た日本女性は、更に智的及び意志の修養に努力し、又感情の方面に於ても益々精練して行く要がある。是は一般に國民的文學の趣味を養成する上からも必要な事である。現代の動搖的低級趣味や女性の殺風景な新味への解放は、國民性情としての優美性の防護の上からも甚だ憂ふ可き事である。女性の生活を精神的に洗練し向上する事は、文學文化及び廣い意味で國家の發展上にも最も必要な要件である。但し女性の實際活動が今迄よりも尚進んでも可い。全く社會的方面から回避し不關であれと云ふのでは無い。只女性の天分上、上の様な用意が要るのであ

る。乃で今後も實際に女流文學者が尙どし／＼出ても可い。天才が出るのも大いに可い。今迄女流の文學は多くは歌謠の一部門に限られた。創作作家も有るが紫女の源語に於けるが如き人は未だ容易に出ない。文學上の幾多の部門、例へば小說長詩戲曲童謠童話等の諸方面に幾らも開拓すべき新野が横つてゐるのである。斯の樣にして女性の眞の內的自覺に依つて、家庭上より精神上より社會上より日本文化の缺陷を補ひ、健全な新日本文化の建造に貢獻する事は、今後の日本女性の上に置かれた努力すべき一大天職である。

『忠臣は孝子の門に出づ』が眞理ならば、同時に『良き國運良き文化時代は、女性の健全な發達と活動とに須つ』ものなる事も眞理であらねばならぬ。女性の趣味の問題や向上の問題は、女性其人に取つても亦一國の文化、世界の文化に取つても實に重大な意味を含んでゐる。返す／＼も新時代の女性の人々の自重を望んで已まないのである。

四、山陵めぐり

一　山陵修理の沿革

此の二とせ三年の間、秋神無月より師走の初め迄、善光寺史につけて古社寺舊蹟を尋ね乍ら遍く近畿西國の山河を旅した折、彼地此地に鎭りゐます山陵の影を拜するにつけても、古き代の俤目前に見る心地して、我が國柄の貴く覺ゆるに、彼是見巡れば其の規模の今の世になつて嚴めしく整つたものも素より多いが、左迄に整はぬものもあり、中には其の跡の怪しく埋もれて空しき丘山と化し、或るは仇なる傳說地に數へられるものも三四所に限らず中々に多いのを認めた。それにつけても此の度（大正十五年）俄かに諒闇に入つて、府下淺川横山の廿里に御山作りせられるのを見たのは歎かはしい限りである。　偖御陵について明治以來制度文物の

整つた現在に於てさへ此の趣の有るのであれば、戰國の世を經て近世に入り壺井鶴翁、松下見林や蒲生君平、戸田楨隆等が出でゝ、東西の山野に皇陵の荒れたのを探り修めた當時の苦心は察するに餘りある。之れ素より時代の盛衰平亂に因る事が多く、必ずしも一時代の制度の可否に由るのでは無いが、言ふ迄も無く我が國の御陵は神社の制と共に最も神聖にして、建國以來の醇乎たる古風を存してゐる點からも、世界各國に無比獨特の長所美風を備へてゐるので、是の點は何處迄も維持して行かなければならぬ。國民に我が建國の精神を知らしめたり、古文學の眞趣を領はせるにも、一度び去つて古代の山陵を拜させるのが最も良い方法である。今は諸陵の官署も整備し陵墓令も定められてゐる事であれば、更に萬全の策を講じて推究す可きは推究し、古制修造の途を誤まらない樣にされたいものである。

二　山陵の歴史と地區、儀制

山陵の制は山口氏の說に據れば、古來十期の區分を立てゝゐる。卽ち第一期（開化帝迄）第二

期（崇神帝―敏達帝迄）第三期（用明帝―天武帝迄）第四期（持統帝―淳和帝迄）第五期（仁明帝―村上帝迄）第六期（冷泉帝―近衛帝迄）第七期（白河帝―南北朝迄）第八期（後光嚴帝―後陽成帝迄）第九期（後水尾帝―仁孝帝迄）第十期（孝明帝―明治復古迄）の樣である。是に就いて余はまだ自分の考を叙べる丈け研究も調査も進めてゐないが、上の說は大體から見て歷史上の時代區分とは餘り一致しない見方である。陵制と歷史時代の區分と一致しない所は一面からは非常に面白い點であるが、併し尚幾分變化を要する所も有りはしまいか。神代の山陵の問題や不明の陵墓の問題も其の間に有るし、第四期、第七期なども少し長過ぎる嫌が有る。其等に就いては尚後の研究に讓る事として今は只便宜上（一）神代陵―神代（二）古陵―奈良時代以前（三）中古陵―平安時代（四）近古陵―鎌倉京都時代（五）近世陵―江戶時代以後の五期に分けて置く。

山陵を地區の分布上から區分すると、大方次の九區に屬せしめられる。（一）大和地區（イ、高市地方、ロ、奈良地方、ハ、三輪地方、ニ、葛城地方、ホ、吉野地方）（二）河內和泉地區（イ、國府地方、ロ、山田地方、ハ、堺地方）、（三）山城地區（イ、洛西地方、ロ、洛東地方

へ、桃山地方）（四）近江地區（五）紀伊地區（六）相模武藏地區（七）日向大隅地區（八）出雲地區、（九）濃尾地區が其れである。陵墓の多い點では山城地區が三百餘に上つて群を拔いてゐるが、古陵の多い點では勿論大和地區、河内地區が最も重要な地方を含んでゐる。日向大隅地方は所謂神代陵の所在地方であるが、今後尙大いに研究を要する問題が多い。出雲地區に至つては神代以來の陵墓が多く有る可くして、今日に傳つてゐるものが一向見えない。さう云ふ點又一般古史の開化の性質を窺ふ上からも、山陵の分布と神社及び古墳の地區的分布とは、最も密接の關係有るものとして比較研究すると大變に面白いと思ふ。三輪地方など其の好例である。主要な山陵の數を擧げると（一）は高市地方十四陵、奈良地方十陵、三輪地方四陵、葛城地方三陵、計三十一陵（二）は國府地方七陵、山田地方四陵、堺地方三陵、計十四陵（三）は洛西地方二十陵、洛東地方三十五陵、桃山地方二十三陵、計七十八陵で最も多く（四）は二陵（七）は即ち神代三陵を中心としたもので、其他は（五）の一陵に、（六）は皆墓、（八）は神代陵墓の推定地若干である。余の近年詣でたのは、此の中七十餘所、八十餘帝后

の御陵である。其の他古墳も四五十所訪れた。
山陵の儀制の古代から重んぜられた事は、其の陵制の國初から壯大なのを見ても明かである。上古の官制は明かで無いが、垂仁帝紀や顯宗帝記の傳へを見ても、相當に重い常置の官司が有つた樣である。大寶令の官制では諸陵寮が支那の廟陵署に倣つて置かれ、治部省に屬して正一人佑一人令史各一人を任じ、其の下に土部十人に大連小連等があり、使部十人直丁一人を置いた。其の喪葬令には凡先皇陵置二陵戸一令レ守、非二陵戸一令レ守者十年一替、兆域内不レ得二葬埋及耕牧樵採一と規定してゐる。喪事の樣や陵墓の取扱については奈良時代の樣が續紀に見えてゐる。又弘仁貞觀頃十陵四墓へ荷前使を遣はされた趣は類聚符宣抄などに見えてゐるし、其の後神代三陵に就いては、葉室山の南麓、田村の陵村に四方一町の遙拜所が設けられた。次いで延喜式の規定になると、治部省の被官に諸陵寮が設けられ、雅樂玄蕃の二寮と共に三寮の一であつた事は、令の制度と全く同一であるが、是には幸にも當時の幣祀に與つた遠近の陵墓名や、大小構造などが一々明細に錄せられてゐるので餘程參考になる。其

の中近陵は天智天皇の山科陵以下十陵で、是は後迄一定し、遠陵は神代三陵以下六十三陵に上り、合計七十三陵であつた。無論后妃や追號の陵を含んでゐる。近墓は貞觀期の四墓が八墓となり、遠墓は三十九墓で合計四十七墓を記してゐる。遠近は地區の上のみでは無く、幣物の鄭重の度に夫々差別が規定されてゐるのである。寮司の齋詣する時の詞には陵には獻出(すゐいで)と言ひ、墓には申出(まうしいで)と呼ばれた式辭がある。陵戸は山陵に五烟、功臣墓には墓戸三烟を置き近傍の野原を燒除し毎年二月十日に官人が來て修理する定めである。官制は頭一人助一人、允大小屬大小各二人で今より幾分縮少したが、頭は五位で職原抄に近代賀宗陰陽師五位已上を任ずる由が見えてゐるのは倘後の樣である。天暦の和名鈔にも諸陵(みさゝぎのつかさ)寮の名見えて居り、一條帝長保中の枕草紙には、鶯、柏原、天の三陵を擧げてゐる。平安後期の朝野群載には陵數は八十七陵に增加したが、墓數は十一墓を減じて三十六所を錄してゐる。陵墓の儀制や大小は年中行事が盛んに、荷前(のさき)の儀式などが立派に行はれた頃は、矢張鄭重で壯嚴に行はれた傾がある。佛教の大影響を被り武家時代に入るに及んで、段々形式を異にし規模が小さくな

り、近世の戰國時代を經て益々荒廢に傾いたのである。其の點から陵墓の變遷を見ると、神代は暫く措くも、(一)古陵期は國家的時代と言ふ可く、全く國家の中心事業として、國民的の崇敬の的として築かれた樣子が有り、(二)中古陵期は氏族的時代と呼ぶべく、主に帝后の外戚關係などからして、陵墓が修められた傾がある。十陵八墓の制度なども實は其の傾が餘程見える。それが(三)近古陵期に入つては更に個人的時代とも言ふ可く、一層帝や后妃の個人的の屋出白や、境遇に依つて、其の制に大變動が有つたので、合祀されたり、小規模になつたり、遠島に御陵が有る樣な事情さへ起つたのである。明治以後は此の點から言つても、(四)國家的時代に復つたので陵墓の固有の立派さや意味は如何しても、國家的時代の古陵に就いて見なければならないのである。

三　みさゝきの語原考

次に『みさゝき』の語源に附いても中々決しにくい所がある。『みさゝき』は日本紀では神代

紀神武帝紀以下陵又は山陵を當てゝ訓み、仁德帝紀には荒陵の地名が有り、記には御陵を凡べて『みはか』と訓んでゐる。令の先皇陵には義解に謂先代以來帝王山陵皆是也。帝王墳墓如レ山如レ陵故謂二之山陵一。其皇后皇太子墓在レ令無レ文須レ依二別式一也。と見えて山陵の形狀をしてゐる所から、山陵を當てゝ『みさゝぎ』と呼ぶのであると解してゐるが、漢字を主とした說で國語の語義は明かで無い。尤も支那でも堯舜以來漢以前に陵墓廟陵など云ひ、守陵五戶春秋太牢祀と云ふ樣に、陵字を墓域の義に用ひたのも頗る古い事である。乃で日本後紀等に墓を山陵と稱すとも見えて、墓は通語、山陵は特に皇陵即ち帝王の山陵に限られてゐたのである。奈良時代の寶字四年に前年崩じた皇太后の御墓を自今山陵と稱せよとの詔が見えて例の十陵八墓等には皇室關係から同樣の詔令が時々下されてゐる。併し延喜式や和名抄に官名で見えてゐるにも拘らず『みさゝぎ』の語は平安時代などの文獻にもさう多く出てゐない。萬葉集には、額田王歌の序に山科御陵と見えて詠歌に入り、寬平以後は勅に依つて山陵を築く事を停められた事が多い。當時の文學では、蜻蛉日記に村上帝の崩じられた頃著者の女君

と貞觀陵との唱和に

　世の中を儚きものと御陵の埋るゝ山に數くらんやは

　後れじと憂き山陵に思ひ入る心は死出の山にやあるらん

と何れも山陵を山に寄せて詠んでゐる。此の外には勅撰集中にも此の語を詠んだ歌は入つてゐない。枕草紙には流石に前に記した樣に卷一に『みさゝきは』の題目を出してゐる。

此の語源について今日迄行はれた說には

(一)御狹々城也と云ふ說が和訓栞以來見えてゐる。みを美語とし、きを古韓語に關係の有る城丘の義で有るとし、乃ち山陵の形から小城の意の名であるとするのである。是に依るとみ(+)さゝ(+)きの三語部から成つた熟語で、本居說に孝元帝紀の佐々紀山君、顯宗帝紀の近江の狹々城山君の狹々城山に多分關係が有らうと言つてゐる。是は後に佐々木の姓を出してゐるが、地名には同く近江に篠笥と云ふも見え、神代紀に鳥の鷦鳥の語や、仁德帝の大雀命の名稱さへ行はれてゐる。後の二つは餘り關係が無い。鳥には又山陵鳥、小陵鳥の如く、

漢字に近い者も有るが、單に當字に過ぎない。地名の狹々城山も果して小城山の義であるか細木山の義であるか、其他の義であるか、俄に決し難く、御陵に就いて唱へたものでは無い樣である。但し城の義では古く奈良以前に水城(みづき)の例が有つて構造も大分近い所がある。又成務帝神功后の御陵に狹城盾列陵の名があつて、山陵村の名が傳つてゐる。一方又陵墓の同義語で古く行はれたものにはハカ、ツカ、オクツキ、オクツスタヘ、イハキ、イハトなどがある。此の中、城說に近いのはイハキ(岩城)である。オクツキは奧之城と云ふ說もあるが杵築の例で、奧築と見るが可い。オクツスタヘは奧築棄戸で、へは家である。憶良の歌にシタベと有るのも棄戸と同語であらう。イハトは岩門である。神話に天岩戸籠りと云ふ事も意味の有る事であらう。ハカは又果處(はてか)と言はれたり、葬處(はふりか)とも考へられるが、ツカの築くの名詞形である所から見ると、ハカも掃くの名詞形であらう。掃くとは掃ひ淨める意である。他の語が總べて自然的の性質語であるに反して、此の語が獨り文化的祭祀的の意義を持つてゐるのは、墓陵の語の中で比較的古代に用ひられたと考へられるのに稍疑はしいが、同音語の計る

撈、果なしとは別源であらう。計るとは步測の義である。祭、佩の語も足に就いて言ふが本義である。然るにツカ、ハカと似た岡の語は明かに尾處の義に出てゐるから、此の二語も實は築處、播處で二語部語に解す可きであるらしい。塚には築處の外束ねの略と見る事は猶堤の包みより出たと似てゐるといふ見方がある。築處では塚の場所を指すので塚其の物を意味しない之に反して束ねより出たとすれば、正に塚の實體を意味する事になるが、恐らくは築處の約であらう。兎に角ハカはオクツスタヘと同樣に語源的に墓所の意味が含まれてゐる語で、ツカは其より單純であるが、大塚など云ふ時は殆んど山陵の意味に近いのである。イハト、イハキなどは更に一般的の語である。古さから見れば此の二語最も古く、オクツキ、オクツスタヘ之に次ぎ、ハカ、ツカ次いで成り、『みさゝぎ』の語は尙後の起原を持つてゐる樣である。小域の說はまだ疑はしい。

(一)水小域と解する事も出來る。是はみの美稱語を水の體語に解く考の三語部說で恰も水域の語に修飾を加へた形である。古陵時代の山陵が、多くは壯麗な池島式である所からは此

の考も浮んで來る。一體池とは埋める事をいけると云ふ體言である。陵墓の周圍を掘つて中央を埋め所とし、池を廻らすのは全く關係の無い事では無い。併し古陵でも池島式で無いものがあるから、此れも一考案に過ぎない。若し水小城の說が當るならば池島式の流行つた時代に此の語は出來たのである。此の語に美稱を附けるにはミミサゝキと成らねばならぬ。之も可笑しい。

(三)御小崎の考がある。是は三語部說ではあるが、城說で無くて崎說である。即ちみ(十)さゝ(十)きである。

一體さきの語義は何であらう。先、崎、末、幸、裂、同一であらうか。此の中動詞の裂は小開の說がある。他のさきは同源であらう。幸にも行先の好い義で即ち未來の意がある。さきはあと即ち後、足跡に對する觀念であるから、計ると同じく矢張り人類の原始生活に於ける歩足運動に結合した語である。人の前面した意味で探す、探る等と關係が有り、指來の意では無いかと思はれる。古代國語では來と行とは同一であつた。指行く方の意である。乃で先

とは前方の意味で、山丘海角などの前に出た所をも呼ぶ樣になつた。此の類の語に崎、岬、山崎、岡崎、尾崎、野崎等が發達した。小崎は其の中の山崎、尾崎の小さいものである。古代陵墓が山に依つて築かれたと思はれる點から、又『みさゝき』の歌に山に因んだ呼方が多い所からは、此の名義は適當したものであらう。『みさゝき』を音便の『みさゞき』で無くて、稀に『みさゞき』と記したものゝあるのは、此の說に一致した呼方である。以上の三說は、みと云ふ美稱は有るが、何れも自然的の名稱で、殊に皇室の陵墓に關した意味は無い。さう云ふ起原であるとしたならば、古代語に於て一般の陵墓にもハカ、ツカ、オクツキ等の語と同じく、幾分根跡が見えねばならぬ。近江の狹々城山や大和の木上(城上)の例は見えるが、一般には此の語丈けは決して用ひられない。蘇我氏などが非常に强盛であつて、墓を築いた事は見えるが『みさゝき』と呼んだ例は甞て見えない。卽ち陵墓語として此の語は特に皇室語の要素を含んでゐると見なければならぬ。其の點からは上の說よりは又別の語源があるのでは無いかと思はれる。其の一二には

(四)身禊の轉では無いかと云ふ考へである。山陵の兆域は神聖であるから、庶民の耕牧を禁ぜられた事は大寶令にも明かである。之に詣でる者は何れも身を潔め心を淨くして仕へ拜するのである。淨域であり參詣にも潔祓を要する所から、身禊の山と呼んだのではなからうか。身禊には一般語としてみそぎの語が出てゐるが、其の別系の特殊語と見るのである。池島式の考からは水注の意であるとも考へられる。此の方は自然語で皇室語では無い。次には

(五)御獻前の約語の考である。前說であるが、崎とは別で、み(十)さゝげ(十)さきの三語部說である。此の意味の前の用例には、續紀に藤原魚名を大葬事の御前次第司長官とし、別人を御後次第司長官に任じた事がある。皇室の陵墓として第一に幣帛を奉る御墓の義である。之に就いて最も考へられるのは荷前の語及び行事である。荷前とは諸國調物の荷先即ち初穗の謂で、祝詞には祈年祭及び春日祭の詞に見え、萬葉集にも荷前宮の歌詞がある。初めは神事にも言はれたので山陵と區別が無かつたのである。其れが平安時代に入つて、年中行事が一定するに至つて、專ら十二月山陵奉幣の儀に言はれる樣になつた。私記に神祇相嘗、山陵荷前とあ

るなどは是である。併し此の詞はずつと古くから行はれたのである。前とは先奉物の意である。其と似て獻前と言つて、朝廷の多くの奉幣物の中、先づ前に奉る物の義に名ける事が出來る。即ち荷前の義である。此の語が略約すれば『さげさき』から『ささき』となり『みさゝき』の語と成ると言へる。延喜式の山陵祝詞を獻出と云ふのを、獻出と見れば一層此の說に近くなる。『みさゝき』の語が古い一般の用例が見えずして、皇室語たる點からは先づ此の說が比較的近い樣に思はれる。さう見れば荷前の語は奈良以前可成り古代から行はれたとしても、一定の公事に就いて發達した『みさゝき』の語は比較的後のもので、ハカやオクツキなどよりは、後世の語形であると見ねばならぬ。奈良の郊外の山陵村や佐紀村の名は、此の意味の『さき』に出たのであらう。『みさゝき』の語源に就いては尚大いに考究する要がある。

四 南和の諸山陵

巡拜した御陵の數は、古陵から近世陵にかけて少くなかつた事は前にも一寸記したが、今は

其主なる感想を記すに止めて置く。先づ南大和高市地方に入つて、神武天皇の畝傍山東北陵に詣でる。山の東北二町許りの平地の山陵で、南に正面し小木林にて蔽はれ、南北三丁東西二町程の兆域いと嚴かである。方形の地域東は大路に接して表門あり、前庭三分の一許りにして左方に官舍有り、第二門内は南の正面で周圍に小木林立ち、本陵は北西の方に堤堀幾重か圍らした中に常盤木の森深く鎮ります。維新後餘程大きく修められたと云ふ。東北と云ふは紀に畝傍山東北陵とあるに據つたもので、記には畝傍山北方白檮尾上と見える。白檮の木は此邊り一帶に今も多く、坐ろに數千年前の俤を偲ばしめる。山の東南に在る橿原神宮よりも山から稍離れてゐる。御陵と山の間は古い丘段地が多く東方には陪塚らしい森さへ見える。白檮尾上と記してあれば古陵は尙山續きの方に餘程廣くあつたのではないかと思はれた。山を中心として此邊り古陵が多い。大和時代の初期の都會地を想はせる。綏靖帝の桃花鳥田丘上陵は東北數町畝傍驛に近い田中の小森陵で、矢張平地式である。其でも維新前は微々とした小林であつたのを、明治の際修めて現在の大きさに擴められたと云ふ。是陵は又紀に畝火山北と見え

て東北と見えず、記には衝田岡とある。田に近い御陵であつた事は明かであるが、岡に據つた陵であつたのが、いつしか地形にも變動があつたであらうか。第二代の帝陵としては尙ほ規模が大きかつたのではあるまいか。神宮の西八町には安寧帝の御陰井上陵がある。白檮井など畝傍八井が古くから傳へられた其一であらう。紀に畝傍山南同名見え、記は畝火山美保登とある。懿德帝のは西五丁程で、纖沙谿上陵とあり、之も紀に畝傍山南同名を採つてゐる。記は畝傍山眞名子谷上である。凡べて此國初の三四代頃迄は、我大和朝廷の建業時代で大國主命と合體した時期であるから、山陵も非常に壯大であつたらうと思はれる。其割合に小さい樣に思はれるのは、一時衰退した爲であらう。更に西南十町には、宣化帝の身狹桃花鳥坂上の陵が在る。紀の名で記には傳へが無い。皇后及び孺子も同陵に葬られた。山陵の修理の頃は主に紀に據つた樣であるけれども、記の傳へ例へば神武帝御陵に白檮尾上とある記事の如きは餘程大切な傳へであらう。尾上坂上谷上など其上は漢文の上に似て必ずしも上の義ではないにしても、矢張り大和時代の山陵で、凡べて高所に設けられた事は事實である。宮の南は

久米仙人の傳說の有る深田池に臨んでゐるが、其池の南方に御陵池の古跡があり、石川池に臨んでも古陵らしい美島がある。必ず古代の貴人の遺跡であらう。

東西二陵には欽明帝の阪合陵と、天武帝持統帝の名高い大內陵とがある。前者は平地陵の池島式であるが、後者は東南鐵町に在り、南向の圓丘式で頂に小森木があり、中に老松が一株殘つてゐる。卽ち邊の曲(くま)の地形此邊一帶丘帶に多い。文武紀帝に大內山陵と見え後持統帝を合せ葬つた記事がある。陵前に拜して南を見れば葛城金剛の二山屹立して、一は丸く、一は鋭く南には文武帝の檜前安古岡陵を隔てゝ、高取山龍門山幾重か疊なはり、東は橘寺岡寺道より淨見原の宮都に通じて、如何にも古趣深く覺える。併し有名の二帝の御陵としては、現在の兆域は餘りに小規模である。二帝同陵であるのも覺束なく思はれる。寄かに彳んで、其の地貌を按ずると何となく昔の俤が想像される、現在は東の一圓丘而かも頂上の方許りを定めて、直ぐ下の邊りは田畠となり、村人が其の折にも無心に耕してゐて、稍々意外の感が有つた位であるが、其の昔はずつと後方に延びた前方後圓式の山陵ではなかつたか。又一陵では無く、

西に突出した高所も前方後圓で是持統帝の御陵に當つてはゐなからうか。更に此の御陵の周圍の樣子を見ても、現在の田や、丘の工合が如何にも一大池で圍まれてゐた俤が見える。池島



式で二丘陵式の御陵で、南方前面の岸丘の上から拜したらしく想はれる。試に略圖にすると上の樣である。是は尙輕々に斷言し難いが、現に角當陵の現在は餘り小さく限つた爲に今の耕牧を禁じた精神などに照しても、少しく合しない感があつた。道を急いだ爲め、檜前の文武陵や萬葉に名高い日並皇子(草壁)の眞弓岡上陵には詣でなかつた。此の檜前陵については非常に面白い話が今昔物語集に傳へられてゐる。其は元明帝の陵を定惠が點定すると云ふ記事で、最初倉橋山多武峯の後方にトしたが地勢が惡しく、更に北西輕寺の南に定めたのが檜前陵であると言つてゐる。又石の鬼形等は池邊陵(神功后の池上陵か)の樣式に倣つたとある。今日其の鬼形などは見えないであらうが、此の話の倉橋陵は崇峻帝陵である。元明

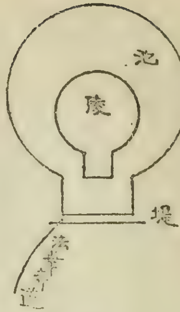
帝陵は佐保山に設けられた事があるから、此の傳へは史實に合しないのである。大鍋の傳說地も亦此の帝に關してゐる。人麿の殯宮歌に橘島宮、勾池の舘、瀧の御門の事を詠じ、御陵の地は眞弓岡とも、佐太岡とも唱へてゐるのは此の邊である。因みに是も名高い高市皇子や明日香皇女の木瓰宮は、飛鳥の眞神原から百濟原を經て行つたので、ずつと北方廣瀨の方に離れてゐて、其の宮は香山宮と言ひ、埴安の御門原附近即ち今の雷岡の北方小山池附近と思はれる。岡宮や淨見原宮地についても彼是尋ねたが、玆には直接の關係が無いから省く。併し上居(じやうこ)の巨大な露出石棺ドルメン形のものは、上古の餘程有力者の墓域であらう。我國にあれ程巨大な石槨の在る例は、他にも餘り無い位である。或は神武帝の東征以前に關したものではなからうか。是から吉野に出たが南帝の塔尾陵は先年拜したので、六田の川沿道から晩霞の彼方に見て過ぎ、高野に入つて不動院前に美福門院の陵を拜した。前陵は北向是は西向で畿内の多くの山陵の南向と異つてゐる。奧院の廟の五輪には、後村上帝など南北朝頃の古いものが多いときくが入る事は出來なかつた。

五　奈良附近の諸山陵

奈良地方には大和時代及び奈良平安時代の山陵が十餘所在る。大和前期の御陵では市内の開化天皇の春日率川坂上陵と、郊西菅原の垂仁帝の菅原伏見東陵とを拜した。前者は念佛寺の西に在り、南向に細長い丘上式で、松林が茂り四方に細池を圍らしてある。紀に率川坂本(一本坂上)陵と見え、記に伊邪川坂上と記してゐる。率川の北岸で坂とは興福寺の西坂地帶であらう。今も百萬辻町西坂町などがある。市内でもあり、周圍など稍狹くむさくるしい感がある。大和前期の帝陵が一二飛離れて、奈良附近に在るのは、國初から、此の邊が離宮地の樣にされたに因るらしく、二帝の歷史的事實に相應の理由があつたに違ひない。之から北に佐保川を渡つて行けば、佐保の山麓に聖武帝の佐保山南陵少し東北に續いて仁正后(光明后)の佐保山東陵がある。さしもに盛りを極めた天平帝后の御陵としては、壯大の點では左程でも無い。松山を負ひ御一代の帝后の並んでゐる樣式は、桃山御陵の樣に善く似てゐる。此の點か

ら見ても大内山陵の同一陵は如何かと思ふ。更に般若寺の北、奈良坂の西には元明元正二帝の奈保山の東西陵が在る。此の御陵に附いては、先に記した通り昔から諸說が多く、今も大きな疑問が横つてゐる。いとも畏れ多い事である。元明帝は崩前遺詔して添上郡藏寶山雍良岑に竈を造つて火葬し、喪事も質素にして「丘體無レ鑿、就レ山作レ竈、芟レ棘開レ場、即爲二喪處一、又其地者皆殖二常葉之樹一、即立二刻字之碑一」と宣はれ、十二月乙酉に推山陵に葬つた事が見える。推山一に椎山又楢山に作る。此邊の小字名であらうか。疋田の諸陵考には雍良岑は大石俗に大黒の芝と言つて、御陵地とは別であるとし、見林は雍良岑は宮に大奈閉山の誤であらうと言ひ、谷森善臣は蘭笠の雫に式に奈保山東山陵とあるに、大鍋の地は山で無いと論じてゐる。刻字之碑と云ふのは善城寺の遙石に運ばれ、俗に七疋狐又箱石と呼ばれたものであらう。元正天皇の西陵については、續紀天平二十年に佐保山陵に葬る由が見えてゐるが、更に勝寶二年十月奈保山陵に改葬すとある。奈保山陵の名は改葬後の陵名である。此處で考ふ可きは所謂大鍋、小鍋の御陵傳說地の事である。法華寺の東北桐山の山麓地で、佐保山の西に當る。

名稱上からは奈保山の訛りと見る事が出來る。乃で古くから此の二陵を以て續紀の奈保山陵

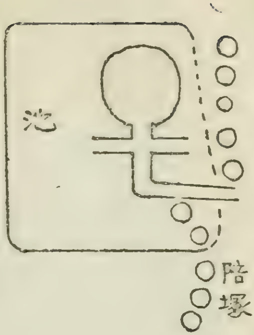


に擬する說が屢々見えてゐる。何れも池島式で正南面し、東西一町南北一町半位で、中島には小松林が茂つてゐる。二陵の位置は東西に並び、西陵が少しく北に退いて小規模である。其樣誠に盛んな御一代の帝后の陵たるに相應はしい。之を聖武帝の御陵に較べると、今少し古代の陵形で、正しく前方後圓式をなしてゐる。天平期の築造としては少しく古い時代に見えるが、奈保山の地名と共に、同時改葬された二帝の御陵と見ても、持統帝陵などに比して左して不可な事は無い。左らぬにしても斯くも森嚴な大山陵地を空しく傳說地として、不明の儘に委するのは甚だ遺憾な次第である

六　奈良西北の諸陵

此の二傳說地陵の西北二町には、仁德后磐之媛の平城坂上陵がある。周圍十餘町の氷上大

池の中に南面して居るが、古形とは大分變遷があらう。小鍋の北にも小丸塚が見えるが、此



前方には左右十個許り陪塚の形が見える。盛んな山陵である。此の氷上池は昔の勝間田の池で是から歌姫街道舊奈良坂道を西南すると、平城帝の楊梅陵が南向の小丘式に立つてゐる。押勝の家が樓造りに高く聳えて內裏に對し不臣の評を招いたのは、實に此の邊りである。西大寺の南北にも山陵村の字の有る丈け、有名な陵が多い。菅原社の南唐招寺の北には垂仁帝の菅原伏見東陵がある。西陵は安康帝の陵である。南向池島式前方後圓で、前面十間許り、南北一町半拜路は東に開いてゐる。池中に陪塚が一つ有り、折から大修理中であつた。併し此の陵には尙ほ外堀が有つたらしく、古い陪塚の名殘も六七見える。前面に櫻樹を植ゑ、垣の赤葉木が美しかつた。此の陵、記には菅原の御立野中と見えて宮地よりは違つてゐる。續紀には靈龜元年櫛見山陵に守陵三戸を置くと見え

伏見山陵(安康帝)には四戸置いた由が記されて、櫛見、伏見と記し別けた趣が見える。埴輪の事から伏見人形などが想ひ合された。此様な大陵を上代未開の代に築いた工役の事も考へて見ると面白い。大陵の工數は如何しても十萬乃至卅萬工を要したであらう。一村三百人の庸としても十村三千人を百日位役したので、國家的に餘程大きな公事であつたのである。因みに此の度の御陵工事には一日三千人として四十日許りであるから、約十二萬工を要した事になる。工數の點では太古も今日も左したる相違が無いのである。(因みに多摩陵御本工事は五月二日起工式にて十二月初旬竣工故全部にては何大なる工數となる。)西大寺の東北佐紀村には孝謙稱德帝の高野山陵が小山に據り、前に細長い池を帶びて西向に見える。紀に佐貴鄕高野山陵とあるもので、奈良盛時の割合に規模は大きくない。此の地は實に鈴鹿王の舊宅地であつたのを、御陵に營んだのである。西大寺の古圖に本願御陵と見えるのは、即ち此の陵である。之から數町の山上に成務帝の狹城盾列池後陵が在る。小丘式で周圍に池垣がある。同池上陵は稍北方神功皇后の陵である。盾列池と云ふが今の山間の間に在つたと見える。是には記に

は記事が無く、紀に狹城盾列陵と呼んでゐる。前方後圓の南向で池垣を圍らし、拜道は西に開けてゐる。流石に名高い皇后の御陵丈け規模が大きいが、今左右の道や田に成つてゐる邊りも、古の御陵地區であらう。此の間池後陵の近くに、垂仁帝后日葉酢媛の狹城(さきの)寺間(てらま)陵が在つて記に記事がある。前方後圓式で池島式に小松林の所垂仁帝陵と同形式である。此御陵に限らず、古陵に古大木が傳はらないのは何故であらう。修理毎に植替へたのであらうか。數千年の古木があつても可いのに、一向其の傳が無いのは一奇である。此の陵の地名寺間については『てら』の語、佛教以前なる丈け疑がある。記傳にも、他書に見えない名である。續記に大和人に寺間臣が大屋氏にある。借字らしくも無いから、寺の出來た後の地名を古に及して呼んだであらうと註してゐる。寺とは何寺であらう。或は島の訛りか。又寺は平などの訛か。此の陵は又埴輪の傳へで名高い。埴輪は垂仁帝紀に后の崩時遺言に依つて停め、埴輪又立物と云ふと見え、崇神帝記に倭日子命の時初めて陵に人垣を立てた由記してゐる。人垣は崇神帝朝の風俗らしいが、埴輪を作る程であれば餘程必要の物で、一朝の風俗許りでは無つ

たと見える。崇神帝の陵は三輪の山邊道勾丘にあつて、當時磯城玉垣宮であつたから、后の泣壁の話も事實であらう。御陵に埴輪も少し見えると番人は話した。

七　河内地區の諸山陵

河内地區では山田地方を巡つた。觀心寺の後村上帝陵は車窓から山陵の間に拜禮して過ぎ金剛二上の峰後に暮れて行く頃、楠氏の昔を偲び乍ら、古の博多川今の石川を渡つて、科長の太子陵叡福寺に一宿した。太子陵は寺後の高丘上にあり、周圍百八間正南面に三重の廟門がある。周圍は二重に石の卒塔婆で圍繞き、上段は弘法下段は享保中の新造である。寺の傳說では母后を中にし、太子右方妃左方で彌陀の三尊に象る由、陵の上には大悪木とて大きな楠が枝傳說と共に茂つてゐる。此の形式は信貴山の命蓮の墓が酷似してゐる。此の方は卒塔婆に十三年忌等の文字が見える。寺の南方には用明帝敏達帝推古帝孝德帝の四陵が殆んど梯形に散在してゐる。用明帝陵は紀に本、磐余池上陵であつたのを移して科長中陵と呼んだ。

道の北に當り古くは池島式であつたのを、今は池が僅かに一部に見える。推古帝陵は其の東南廿町許り、山田の西南三町許り、丘上式で方形の小林陵である。是も初は大和の大野岡上に葬つたのを移して、科長大陵と云ひ、竹田皇子と同葬した記事がある。北方二町に二子塚も見える。孝德帝の大阪陵は北方丸山の麓にある。此の邊石川麿妹子馬子等の墓も多い。馬子墓は疑はしい。必ずずつと壯大な墓域が在つた筈である。凡べて科長に斯く帝陵の多いのは、蘇我氏の關係なども其の原因の一つであらう。山田から北に當麻に出る道は古の岩屋峠で、卽ち舊關の置かれた所である。北頭に聳立つ二上山には、頂に大津皇子の墓がある。萬葉に大來皇女哀傷の歌

うつそみの人なる我や明日よりは二上山を妹背と我見ん

とあるは此の墓であらう。枕草紙の陵の條當の陵とあるは古註に或は仁德帝陵とし、或は垂仁帝陵とするも、正に此の舊關道を出て來た級長の四陵殊に大陵と呼ばれた。推古帝陵などを指したであらう。大和後期の大和河内難波を通じた交通關係の大發展した樣は、斯樣な御陵所

在地の上にも十分明瞭に窺はれる。國府地方の應神帝陵等は傍らを拜して過ぎた許り、旅程を急いだので細かに訪ねるを得なかつた。堺地方の仁德帝陵は大きさに於て諸陵中に優れたもので、周域實に千五百十間三重に池を圍らし、南西に陪塚が六七、北西にも丸塚が見える。入口は今南西に向けられてゐるが、當初は矢張前方後圓の正面卽ち北西向では無かつたらうか。陪塚の方向などからしてもさう考へられる。北西は難波宮の方に當つてゐるのである。此の陵の前に府の養成所の校舍が設けられてゐるのは、景觀の上からも兆域を保存する上からも心無い當局者の處置として、今後の注意を拂はしめる必要がある。茲には又反正帝の北陵、履中帝の南陵が殆んど相似形の二子山形に森然と並んでゐる。

八　京都附近の諸陵

京都附近では洛西も洛東も桃山地方も有名なのは參拜し、若くは願望して過ぎた。平安以後だので御陵の形式は大分縮少した。桓武帝の柏原山陵は南參道に松並木がある。日本後紀

に初め葛野郡宇太野山陵に定めたが、地加茂神に近く火災を憂へて新たに卜定して、紀伊郡柏原山陵に葬つた由が見え、延喜式には三近陵の一で兆域東八町、西三町、南五町、北六町、加丑寅角二岑一谷二守戸五烟とある。其の地形は上圖とならねばならぬ。現在の陵形は參道は長



いが、陵地は一町四方許りで遙かに縮小してゐる。其に就いて豐公時代に城地の爲め、兆域を移したと云ふ話もある。初めは餘程壯大な規模で在つたのである。桃山御陵に就いては誰も知つてゐる所で、詳記する迄も無い。御陵の周垣の所は新式で二陵並列の式は凡べて上代の帝后陵に則つてゐる。宇治の稚郎子皇子陵は地勢上稍疑はしい。今神社のある山上などでは無からうか。續日紀承和七年中納言藤原吉野奏に、宇治稚彥骨散、後世倣云々と見えてゐる。今の陵は寧ろ宇治河で薨じた大山守命に關した墓ではなからうか。木幡の高谷には宇多后温子の陵以下藤原時代の后陵十七陵があり、深草には仁明帝以下の十三陵がある。泉涌寺後山には後堀河帝四條帝以

下近世の光格帝仁孝帝孝明帝諸后の月輪諸陵廿八陵が祀られてある。三十三間堂の東には後白河院の法住寺陵が三間位の法華堂を正面にして、奥まつた所に稍狭く見える。之と稍似たのは南禪寺の同院に在る後嵯峨帝大宮院の粟田陵である。陵は北向に小やかに苔蒸して、御分骨堂西向に前栽の趣も大方荒れ優つてゐる。昔を想へば只感慨のまぼろしのみ去來するを覺える。白河には法然院眞如堂を訪ねた途に、冷泉帝の櫻本陵を拜した。丘に依り松櫻の林を繞らしてある。京津線の御陵驛には北に山科陵があり、東海道山科驛の南醍醐寺の北には醍醐朱雀二帝の陵がある。天智帝の山科陵は非常に名高いもので、萬葉集卷二にも此陵の歌が有る。輪王寺門主公辨法親王の墓所も安朱村に在るが訪ふ暇が無かつた。四宮には人康親王の墓がある。近江では三井寺を訪ねたので、弘文帝の長等山前陵を夕暮時に詣した。平地の杉林陵で、今は練兵場の北西隅に一廓を限つてゐる。此の陵もとは、只松原中の塚許りであつたのを陵に修めたので近年の事である。大津市の北に當つてゐるが、天智帝の古都よりは南に當つた山崎の林中である。洛西では天龍寺の龜山帝後嵯峨帝の御堂式の陵、大原勝林

院前にある順德帝後鳥羽帝の東陵、寂光院後にある建禮門院陵などを拜した。時世に伴れて餘りに小やかな感じがある。

九　筑紫の神陵其他、山陵修整の要點

此の陵につけて九州に渡る折下關で、安德帝の赤間陵に詣でた。歷史の悲劇は御陵の上にも見られる。薩隅には地神時代の陵墓が多いが、殊に吾平の彥火々出見尊陵を參拜した。大隅の吾平川の上流大岩壁下の石窟で、河を隔てゝ參道が屈曲して設けられてある。途中に館屋敷とて鸕鷀草葺不合尊降誕の地や鵜戶神社がある。是は日向の官幣大社に鵜戶神社があつて、地名も兩地に大分類似が多く又岩窟の樣も似てゐる。定めて史的の關係があるであらう。日向でも大分古史地區を跋涉した。狹野地方も中々多い。諸神時代からして橘小門の宮崎から諸縣地方にかけて大いに開けたと見える。延岡の大峽の古墳は古い此間の地であるが大方小規模である。松山の崇德院の陵には詣でなかつたが、淡路では賀集で淳仁帝の陵を見

た。是は平地の松林式である。濃尾地區では能褒野の白鳥陵を笠戸から顧望して過ぎた。驛から一里弱である。名古屋で熱田社に詣でたが、社北の白鳥陵、斷夫山陵共に今神宮廳で陵墓に標しようとしてゐる。しかし是を直に日本武尊宮簀姫の陵墓と見る事は餘程疑問である。斷夫陵は頗る大きく長經一町に近い前方後圓陵で、上には大木も茂つてゐる。此の陵を初めとして古陵の中に、尙ほ其の跡の定かならぬものが甚だ多く、跡定りても其の儀修の微々たるものが少くない。是等は當時の史實にも關した事であるが、皇道を重んずるの精神よりするも、其の修整を完備するには、今後尙ほ大いに力めねばならぬ點が多いのを見受ける。其の要項としては

(一) 古形の保存に注意する事

(二) 必要なる改修を加へる事

(三) 陵地周圍の修理を成す事

(四) 現存未詳陵墓の闡明

（五）不明陵墓の研究

など、其孰も主なるものである。

五　とぐら考

一　語義と用例

『とぐら』は又『とくら』とも云つて文字では戸倉、鳥倉、鳥座など宛てゝゐる。併し古く和名鈔には穿レ垣栖レ雞、塒、止久良と見え、新撰字鏡には棲を訓んでゐる。和名鈔の解は文鄭の正義の說に據つたもので鳥座の義であるとし、又爾雅などには雞棲杙爲レ棲とし、又陸鳥栖、水鳥宿の譯も見える。歌集の方では古く萬葉集に

　鳥栖立て飼ひし雁の兒巣立ちなば檀の岡に飛び返り來ね（卷二）

　枕つく妻屋の内に鳥座結ひ据ゑてぞ我飼ふ眞白斑の鷹（卷十九）

と二首雁と鷹の巣を詠んだ歌がある。降つて拾遺集に『櫻を鳥栖にして』と詞書に見え、曾

丹集に『一つ松を（中略）鳥の塒なりけり』能宣集に『この塒には鳴く聲もせず』など、餘り多くは見えないが、自然の立木などを塒と呼んでゐる。平安末のものでは梁塵秘抄に見える。

山鳩はいづくか鳥栖石清水八幡の宮の若松の枝

など其好例であらう。塒は又塒とも云ひ、寢座、鳥栖など云ふ名前もある。乃ち以上の樣な用例では、先づ主に人家に設けた人工の鳥の巣に云ふのである。

轉じて風土記を見るに、出雲風土記に類似の地名では、鳥屋社、石坐山――石在豐穗命坐故也、擱坐山――石擱に似たりと、倉見村――應神帝朝時帝見森然倉有故、又桑原村主鞍盜まれ來見也、鞍見川――佐用姫金鞍見故也、金鞍山――佐用姫金鞍得也、久良彌社――などの類で、終りの例の『くら』については金鞍傳說が發達した。『とり』についても金雞傳說が諸方で發生してゐる。肥前風土記には鳥樔鄕の名が著しい。卽ち今の鳥栖驛地方である。是は應神帝朝に鳥屋鄕と云つて、鳥屋を立てゝ雜鳥を集め飼馴らして上つたと云ふ傳說が記されてゐて、鳥樔は其後改めたのであると云ふ。

二　記、紀、式の用例と鳥の語原

更に記紀について古代の用例を見るに、書紀の神代卷には岩戸、石窟戸、千座置戸、石倉、倉梯山等が戸（と）や岩石（いはね）の方の語にあり、鳥に關しては天鳥舟、鳥司、鳥養人等の語が見え、神武帝紀に鳥見山がある。古事記には大國主命の妻子に鳥耳神、鳥鳴彌神があり、仁德帝記の舍人に鳥山の名が見え、垂仁帝記には鳥取造、鳥取部、鳥飼部等の職姓さへ行はれた。其神代記には鳥遊、鳥使、鳥髮峯、鳥石楠舟など鳥に關する語が殊に多く見え、動詞には鳥居枯らし等の用例がある。是等の用例を見ると、其『と』及び『くら』は單に鳥巢の意に限らないのである。他の意のものも見える。石門（いはと）、倉梯（くらはし）山などが其である。其中には勿論鳥の原義に出た『と』又は『とり』も多いのである。又延喜式の神名帳には越前國に利椋（とくら）社、横椋（くら）社、櫟座社や、若狹國に岩倉彥社、岩倉姫社の類が見えるが、是も多くは鳥の意で無く岩戸の方の意味の名である。乃で地名の起原としての『と』や『くら』に關しては、尚考案してみる必要がある。

元來鳥の語は素より鳥類の總稱で、前記の神代卷などからして見ても、非常に原始時代から其語の人類の生活に接近して發達した事が判るのである。今『とり』なる總名について考へて見るに、今日此語の語源的說明はまだ十分に明かでないが、恐らく捕る意味の『捕り』の義であらう。此類の語に雁――狩り、鳶――飛び、鷹――高かなどが想像されるのである。此等は如何にも原始的の呼稱法であるが、皆連用形(名詞形)なのは、古代人の生物の意味で廣く使つた『もの』と云ふ語の下略であるからである。即ち抽象詞では無くて『捕り物』と云ふ具體的の名前である。其趣は古代人が生物を分つて、野の物、山の物、海の物、天の物などとしたのが、此野山の物の中で亦毛の荒物――毛物(獸)と、毛の和物――小動物及び鳥類とを區別したことなどに見えてゐる。さうして其『捕り物』の意味は、原始人文の發達上元來は射捕物の意であつたらうと思はれるが、我神話時代には最早進んで飼養的な捕飼物の意味となつた樣である。雞を單に鳥の總名で呼ぶのも其爲である。

庭つ鳥
野つ鳥
高つ鳥
島つ鳥
山鳥
白鳥
大鳥
小鳥
常世長鳴鳥
　　　　　　とり

一般に我國の動物名の起原には大凡（一）動作語（動詞及び形容詞）（二）擬聲語（形容詞及び副詞）（三）意義語（動詞等）等の三種類があるが、此中最も早く發達したのは、勿論（一）及び（二）の類である。すゞめ、きじ、からすなどは、此（二）擬聲語に出たものである。古史に見える鳥の名にはすゞめ、からす、きじ、たか、かも、う、しぎ、さぎ、さゞき、たづ、あすかなどがあつて、矢張擬聲語や動作語が多い。『とり』の語の古くから行はれた事は此語に種々の形容詞を附して、諸鳥の意に使用した事が他の語より遙かに多いのを見ても判る。即ち上記の如く非常に能く發達してゐる。記紀を初め古い地名や山名に、『とり』の語の多いのも決して偶然で無いのである。

三　地名の取扱法と「とくら」の地

一般に地名の由來には特殊性のものと一般的のものとある。一般的のものとは種々の推及し得べき由來を含んでゐるものであるが、特殊性のものはさう云ふ一定の由來に由ると云ふよりは、寧ろ特定の事情に依るものであるから、一般的の考察では決し難いものである。倘注意す可きは地名の考察には何でも實際の言葉、即ち發音について研究すべく文字に拘泥しては可くないと云ふ事である。文字も實際の言葉の意義に後から合せて附けたもの、例へば長谷(はせ)とか、上野(かうづけ)とか云ふ類には相當に原義が窺はれるが、大多數のものは假名的の宛字に成るものが多いので、其から判斷すると、丁度字音の百姓讀の樣に大きな誤に陷る事が往々ある。俗解の多くは其である。地名傳說の心理なども其點に發生したものが多い。信州の鬼無里(きなさ)を鬼女傳說に附會して說いたり、戶隱山を岩戶隱しの意に解いたり、姨捨や鎌倉などもさうである。乃で一般に原義の不明な地名の取扱法としては、先づ(一)數多の類似語を取つて歸納的に比較し、次に(二)適當な語の單位に分解し、更に(三)之に合理的卽ち演繹的に整理した若干の意義を當て嵌めて考へるのである。言ひ換へれば演繹的歸納方法とでも云ふ取扱

法が最も適當してゐる。

今不明な「とぐら」の意義を見出す爲に、暫く幾多の語例を集めて分類法に依つて考察して見よう。先づ戸倉（文字は鳥倉富藏利椋等種々であるが）なる地名は多く山名に見えるもので、長野縣下にも下伊那等に澤山ある。此中東筑摩の富藏山は鎌倉時代に餘程修驗の方から榮えたもので、文治四年に梵僧が入山した事が見え、永仁六年に九十二歳で入寂した湛澄覺心は此山の祈師であつた。鎌倉時代のみならず、古く平安初に眞濟の記したと云ふ走湯山緣起に由るも、卷五八穴道の條に第一路は戸藏第三重の巖穴に到る由が見える。隨分古い靈驗所である。今は坂北村に屬してゐるが、寂びれて其跡は鄕土誌にも著はれてゐない。因みに修驗の行場などには隨分さう云ふ所がある。松代の侍從坊と共に名高かつた自在坊は、其前宮的のものであらう。又、戸倉と云ふ姓も見える。多くは山間地である。武藏には殊に『と』又は『くら』に因んだ地名が多い。戸倉二三所、江戸、淸戸、戸田、戸山、和倉、松戸、豊島、瀬戸、飯倉、高倉、名倉、新倉、鳥澤、榎戸、片倉、高倉、戸守、戸宮、坂戸、森戸、小倉、

鳥屋、板戸、神戸、岩倉、倉貝、玄倉など甚だ多數である。地勢上此『と』は、例の山間地方の『と』とは別趣のものであらう。(後説)鳥については鳥取と云ふ地名が例の鳥取縣の鳥取市を初め、越中、河内、備前、伊勢等に何れも村名である。是は、併し其大部分は垂仁帝記に見える鳥取傳說に出たものである。鳥取部、鳥飼部等の官職名も此時に設けられた。當時信濃から越に追到つた鳥を捕つた事が見えてゐるが、其鳥と云ふは鷹の事である。鳥取縣には又戸倉山、戸倉峠、岩倉、大倉、倉谷等の關係有る地名地が諸地方にある。

四　信濃における「とくら」關係の地名

長野縣で『と』、『とり』、『くら』、『とく』、『とくら』等に因んだ地名山名は、次の様に甚だ多數である。

下伊那郡五和村――大鹿倉　　大鹿村――鳥倉山

八重河内村――白倉山、雞冠山　　伊賀良村――高鳥屋山

上伊那郡伊那村——高鳥谷山　　中澤村——大曾倉、本曾倉等（曾倉、曾根等は底倉底根の略であらう。）

小　野　村——係　澤

諏訪郡川岸村——倉澤、片倉、底倉

北佐久郡長倉村——戸倉、長倉、片倉、横鳥

南佐久郡川上村——居倉山、跡暗山、小倉山、熊倉峠、高登谷山

西筑摩郡三岳村——倉本　　駒ヶ根村——高倉

東筑摩郡坂北村——富蔵山、大倉、橋倉　　松本市——女鳥羽川

南安曇郡小倉村——小倉　　高家村——熊倉、乘鞍岳

北安曇郡平村——加倉

小縣郡武石村——鳥屋、鳥屋立、鳥屋入　　西鹽田村——野倉

傍　陽　村——大倉　　縣村——鞍掛、小倉、有津倉（うす）、新倉、鳥居峠、戸石

更級郡更府村——岩倉、藤倉　　鹽崎村——鳥坂峠

埴科郡倉科村——倉科　五加村——德間（因に五加の地名は小縣埴科下伊那等にもある。中野の五ケ、水内の五荷も是である。諸國に多い五箇庄と云ふも亦同じ義の地名であらう。五箇庄の地名が多く山間にある所を見ると五つ家卽ち五家位の小やかな部落を指したものであらう。其種のもので二つ家四つ家など云ふ地名が山中の小村に多く、縣下にも廿餘所に上つてゐる。東京の四谷の樣に谷字に改めたものも各地にあるが、大低四家の原義に出てゐる。）

清　野　村——鳥貝塚　寺尾村——鳥打峠

屋　代　村——矢倉

上水内郡鳥居村——鳥居、大倉　戸隱村——戸隱山（是は此場合比較して最も面白い名である尙後に記す。）、荒倉山

三　水　村——倉井　柏原村——熊倉、一二倉

鬼無里村——新倉　日里村——蟲倉山

七二會村——戸倉、倉並、爪倉

下水内郡豐井村——笠倉　常盤村——大倉崎、戸狩

柳　原　村——富倉峠、倉本　岡山村——土倉

水　内　村——横倉、青倉

上高井郡仁禮村——龜倉、柄倉　　夜間瀬村——横倉、青倉

下高井郡穗波村——戸狩　　平穩村——高倉

など約五六十所に上る樣である。尙全國各地のものを集めたなら、隨分色々の土地に、餘程多數の『とぐら』に關した地名があるであらう。

五　語の單位分解と演繹法

『とぐら』の地名は『と』と『くら』とに分解出來る。『とく』は比較的勢力が乏しいから略しても可い。乃で演繹的に是等の單位語の含む主なる基礎的の意義を分類して見る必要がある。其が出來たら上の諸地名を單位語の下に整理して、之に最も合理的な意義を割當てゝ後に比較して其結果を見るのである。此割當は較々直覺的で、今研究しようとする地名程の手續を缺く嫌があるが、其は概算的の結果丈けの意味で先づ可いのである。其方法は次の樣である。『と』と『くら』との主要な觀念には

と
- (1)鳥の義（是はとりと云ふ場合もある）
- (2)處の義（又戸、門の意）
- (3)富の義
- (4)外の義
- (5)取の義
- (6)豊の義
- (7)砥の義

くら
- (1)黑の義――(2)暗藏の義
  - (3)座の義（位又竸ぶの語も此語から出てゐる）
  - (4)鞍の義
  - (5)倉の義

の様な諸多の義がある。『くら』は普通直ちに一定の座位の意味で、座の語が出てゐる様に云ふが、實は原始的の生活に伴ふ土石崩の様な暗藏の所を意味した語から出たのであらう。從つて其本は暗黑を示す黑の語である。倉も普通に座に出たとしてゐるが、矢張暗藏の語に

出たと思はれる。斯う云ふ單位語を或は上に或は下に或は中に取つて、『とぐら』に關した種々の地名が出てゐる譯である。

（1）『と』『とり』上なるもの

と（とり）

7	6	4	4	4	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	?
石	島	山	田	宮	守	澤	鳴	耳	遊	巣	冠	打	坂	見	司	隠	狩	居	貝	山	髪	使	取	飼	舟	部	羽	屋	倉
	（2?）						海 神	神				峠	峠	山					塚		峯（5?）			部	（又鳥石楠舟とも云ふ）	（2?）		（高鳥屋山含む）	

乃ち此類の地名では鳥の意のものが最も多く、三十語中廿二語に上り、稀に門、處、外、取、豊等の語の意味のものが見える。

(2)『と』『とり』下なるもの

2 徳（字にてり意）　2 神　2 坂　2 瀬　2 猿　2 苛　2 江　2 猿　2 上ボ　2 亘　2 岩　1 高津　1 大　1 白　2 坂　2 森

と(とり)

是では『と』の大部分は處、門の意、『とり』は鳥の意の地名が最も多數らしい。

(3)『くら』上なるもの

5 島（に嵌て又4形）　2 貝　2 が野　5 上　5 田（?）　5 見山　3 梯山　5 嶋（之大谷合む大谷嶋）　5 並（2）　3 非（4）　2 谷　2 澤　4 赤　2 科

くら

是にては倉の意多く、次に暗藏の意のもの、次に場所の座の意のもの〻順である。

（4）『くら』下なるもの

3 片　5 白　5 虫　3 橋

3 矢（八重座の意にて3である。鎌倉の谷倉は2である。此方が倉の原形であらう。矢倉と書いて5の如く用ふるもあるが借字に過ぎない。）

3 狩（?）　4 金　3 搦　3 千　5 二（2）　3 岩　5 加（神樂の意か）　3 熊　3 高　5 大鹿　5 野　5 大（小）　3 曾（大、中、本）　5 新　5 笠

5 富（鳥見2神武帝鳥見山に靈畤を祀つた事があり山形∧形である。是鳥見の意か。さらば富倉峠も鳥見座の意で上古の狩獵風俗關にする名か。）

4 土　5 横　3 青　3 總　3 栃　3 乘　? 戸

くら

3 有津（うす）（1?）　5 玄　3 高の　2 飯　4 和

5 名（あな倉の略ならば2。）

3 朝　3 佐（朝倉の略か。さゝ倉の略ならば5である。榎ならば別。）

3 赤　3 爪　3 德　3 荒　3 長　3 居　3 跡

2 鎌（鎌藏と云ふも俗別であらう。くまくらの轉か。是ならば3である。）

3 藤

丘 と く ら ぎ

是で見ると2――五、3――廿三、4――三、5――十四で、場所座位の座の用法が著しく多い。之に次ぐのは5の倉の意である。1と2は極めて微弱である。座と倉では無論座の方が古く、倉の方が後世的の用法に多く見えてゐる。

六　「とくら」の語の二義と決定

右の如き分類と比較法を以て其結果を見ると『とくら』の語には古くから、(一)鳥に關するものと、(二)場所に關するものとの二義が有つて、共に餘程古代から行はれた事が判るのである。前者は卽ち鳥塒の義、後者は門、倉の義に出たものである。文字通りに戸倉、倉門、門倉等の意は無い樣である。そして戸倉の地名が山名に多く、又山中の部落名に多く見える所を以て見ると、人家の鳥塒と云ふよりは、門座卽ち山丘等の嶮所に沿つた場所を意味すると見る方が至當である。走湯山緣起に見える東筑摩の戸藏山の如きは其好例である。武藏地方の戸倉、若くは何戸と云ふ地名は山間に在るものもあるが、又江戸、松戸、戸田、戸倉の樣に平

原地や河岸地方にも頻りに用ひられてゐる。是等は險門の意と云ふよりは寧ろ江門（えと）、水門（みと）、丘門（をかと）等の意で用ひられ、山間地方の用法と少しく異つてゐるけれども、要するに『と』と云つて、一種共通の地貌を持つてゐる場所を意味する2の用例に這入るのである。

借本村の戸倉は何時よりの稱であるか明かでないが、斯う云ふ語義の發達の上から見るに、必ずや餘程古い事であらう。然らずとすれば他から特殊的に傳來的に附加したものである。戸倉を外倉科の略名とする說などは後者の方であらう。戸倉城は櫻井城（柏尾）と言つて、宗良親王及び屋代氏の史蹟に關係してゐる。是は下戸倉であるから、少くとも鎌倉時代からの名であらう。平安中期の和名鈔の本郡郷名は、（一）倉科、（二）磯部、（三）船山、（四）大穴、（五）屋代、（六）英多、（七）坂城の七郷で、此中倉科、坂城、屋代は略今の地であらう。英多は兩宮縣で、清野、松代方面を含むと云ふ說もある。大穴は土口に古大穴社あり又森村に大穴、大穴山がある。分布上からは松代地方から大室にかけての地區が當つてゐる。大室は式に大室牧の置かれた所で、埴科に入つたのは明治廿二年以來の事であるが、どうも

此方面らしい。船山については埴生に船山ありて、船山古社有り、五加に小舟山が見えて今の屋代以南の地區である。此小舟山の南に小舟庄があつて、戸倉の方迄懸つてゐる。又戸倉には水上布奈山神社がある。戸倉は右の礒部郷に屬して石部の義である。上戸倉　福井に分れ御寶殿、七塚、淸雲寺、大丸山等古かるべく、下戸倉の向島、鎭守、鷺堂、芝宮等も古い因緣に包まれてゐよう。戸倉の沿革を見るには、此船山磯部の境界が一つの問題である。更に延喜式の郡社を見るに粟佐、坂城、中村、玉依姫、祝社の五社で、粟佐は今屋代附近の粟佐神社、坂城は同地社、中村は五加と西條と二地にあるが前者らしく、祝社は松代に、玉依姫社は東條村内田に在る。戸倉には神社が見えないが、中村社と坂城社との中間である。兎に角埴科の郷土研究には、地區の分布上(一)坂城方面(二)戸倉方面(三)五加方面(四)屋代方面(五)倉科方面(六)縣方面(七)松代方面の七單元に分つのが今日は便利である。そして磯部の方から戸倉が發達したと見るべきであらう。

乃で前に言つた第二の意味で此處の地勢を見るに、東山の岩坂の急な事、前方及び南方に

山崎の突出部即ち石部（いそべ）があつて、所謂門（と）のある所からして地名が起つたかと思ふ。河西の飛地にも岩角が多い。只此意味で戸倉の地名が起つたとすると、高島屋山など島屋を含む山が多い事を想ふと稍難解である。古の島屋の形に似た意であるが、伊那郡などでは∧形の山に名附けてゐる。さうすると第一の鳥塒（とぐら）説が可いので戸倉山と云ふも、亦高島屋山と同義となるのである。山について鳥に關する名の多いのは、古代人の生活と、山岳及び鳥とが密接してゐたからで、無論多數の戸倉山の中には此種の起原を持つてゐるものもあらう。併し一般に『とくら』と云ふ地名又本村の『とぐら』などは、如何しても第二の門座（とくら）の意味に由るものと思はれる。

七　倉科及び德間

戸倉の『くら』について附近に倉科村が在る。戸倉を外倉科の略と見れば、其元村の譯であるが、恪別左したる證も無い。又倉科神社に倉稻玉命（くらしねたま）と諏訪神を祀つてゐる所から見れば、

くらしねの轉かとも見えるけれども、其科は矢張信濃の地名に多い一般の科の意であらう。又倉は前表の如く「くら」2の意、即ち暗藏の義である。だから倉科は暗く入込んだ丘陵地の意であらう。科は信濃の國名や埴科等にも關係し、古來から信濃地名上の大問題に成つてゐるが、要するに階坂即ち級段地の事である。次に德間村は昔の八幡七郷中で、更級に近い關係があつた。之を『とく、ま』とすると『と、くら』とは少し別である。併し是も亦『と、くま』の單位語から成つたとすれば關係がある。『くま』とは曲陵地の謂で入組んだ地貌の所である。之を大別して（一）山曲阿と（二）河曲阿の類がある。名高い千曲川などは此河曲阿が多いからの名である。此義から見ると德間は即ち門曲地である。門の點に關係がある。但し下伊那の天龍河岸に時又の地名があるから、或は其方に屬するもので別原かも知れない。

八　戸隱山との比較

本村の『とくら』と比較して最も興味の有るのは戸隱山であらう。是は例の手力男傳說では

天岩屋戸を隠した故であると傳へてゐる。隠した意味では相模に富士隠し山などもある。併し戸隠山を共實蹟地と見るのは疑しい。恐くは一種の地名傳説であらう。其點から云ふと、正に姨捨山と共に、信州の二大地名傳説と見る可きものである。試に戸隠表口である飯綱原上に立つて、戸隠山の山形を見よ。全山さながら一大櫛形に兀立するのを見るであらう。實にすばらしい形である。是で見ると戸隠山は岩戸の櫛形山の意に、奇しく靈異な山の意を加へて呼んだもの、即ち嶮門奇櫛山――『と、が、くし』である。『が』は『の』の意、若くは處の意である。後世『かくし』より『隠し』の意に解し、『と』の戸字より手力男命傳説を生じたものであらう。宜べなり、早く弘安二年の諸寺略記戸隠寺の條に飯綱山前、形如レ立レ戸故也云々と記されてゐる。窟は戸は門即ち嶮所である。峨の戸渡りなど云ふも、此『と』である。乃ち戸倉の『と』と、戸隠山の『と』は同一單位語である。一は岩戸の場所の意、一は岩戸の櫛に似た奇靈の山の意である。

六　庚午の年と馬の語原

一　干支年相と庚午の字義

本年（昭和五年）は干支庚午で、即ち國語の『かのえうま』に當つてゐる。『かのえ』は五行の第四位金性の初位の名であるが、干支の順序では庚、午共に第七位の陽數に當つて居て陽性の年である。併し一方年暦上から云ふと、我皇紀二千五百九十年、西暦の千九百三十年、其に易の本源なる支那も、民間になつては僅か十九年であるが、周武時代よりすれば三千七百十年であるから、世界の主なる國家が何れも十の倍數の陰文年であるのも面白い。庚、午の太歳名は上章、敦牂である。

干支は言ふ迄も無く六十年一巡であるから、此前の庚午の年は明治三年で、維新の新政が

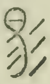
緒に就き藩制改革など行はれて大いに改革の實が擧らうとした年である。其點は昭和の御代の初頭に來た本年と似た所がある。其前は江戸文化の盛りの文化七年である。戰國時代では元龜元年、平安末期では久安六年、奈良朝では天平二年などがある。其等を見ると一般に幾分か時代の大きな變動の前期に當つてゐる樣な所がある。併し庚午の年で最も名高いのは天智天皇九年の此年で、是は直ぐ前に大化の改新が行はれたが——後に天武帝朝や藤原朝、奈良朝の變動も有つた——全國の戸籍名帳を改めた庚午年籍の出來上つた年である。今の全國戸口調査の樣な統計事業の完成した年であつた。庚年の滅門大禍日は乙年と同一である。

十干で庚の意味は說文にと見えて人の臍を表はすに象つた象形文字である。即ち臍部に先ちて立つ貌である。方位では西方に配し、廿四氣の白露で、申酉の間、鳴雁來の候、從つて秋に關係がある。庚月は中秋で己月を受けて成熟の辛月に接すとしてある。廿八宿の畢星、昴星に當る向である。尤も庚星と云へば太白星で長庚を『ゆふづゝ』と云ふ。又月名では窒とも云ふ。金氣剛性で陰に屬する。秋につけて萬物變化の性有りとし、律曆志註等

に、庚更也、萬物皆肅然更改、秀實新成レ象、秋時萬物庚々有レ實也などゝ說明してゐる。其他和庚は律名、六庚は天獸、蒼庚は鳥名である。庚については午よりも申が名高いが。之は庚申で平安中期に盛んに御遊や庚申待が行はれたから、其風は我國でも餘程古い。例の三猿の戒守の像が行はれてゐるが、一般には七の數で、其七庚申と云ふのは十干の序位から來てゐる。佛教の青面金剛信仰に支那の三尸鬼など云ふ道教思想の混じた民間信仰であるが、元來は方位星宿などを祀る天文信仰卽ち十干十二支の思想である。其方位は西南方一帶である。勿論歲德神方(惠方)は之とは別で、乙、庚の年は共に金の方卽ち西方としてある。

次に十二支の午は說文に  とあり、註に啎也逆也、五月陰氣啎逆、易冒レ地而出也と云ひ、又四月純陽、五月一陰逆レ陽冒レ地出、故製レ字以象二其形一、古橫直交互義二之引申一也など見えてゐる。吾を音符とし逆ふ意がある。 は人で陽一は地 ｜は陰氣地を跳して出る形である。象形逆字や矢の字と同じである。仵の字も逆らふ義である。縱橫相交る樣を午と云ふ。陰陽の氣漸く動き出でゝ相逆ひ相對向する象である。旁午は分布雜沓の意である。二十

四氣では南方夏至、鹿角解の節としてある。だから午字には元來馬の義は少しも無いのである。十二辰の時の名で、經度に子午線と云ふ樣に子午は尤も標準時の名、卽ち中日中夜である。古傳に黃帝の時十二辰に十二獸を配して六陽六陰を分つた時、午に馬を配して陽獸としたと云ふ。司馬晉が司馬官を典午と改めた如きは旣に馬の義である。從つて午の年には午字の性と馬の性とが合體して表はれる次第である。

馬の字は說文に  の如く、馬の頭、髦、四足、尾の形を象はしてある。其音 ma の去聲（古音には上聲もある。）で、後世 ba, bo の音となつた。我國では『ま』、『め』、『ば』である。註に怒也武也とあつて武獸としてある。駒は馬の二歲、駣は三歲、騴は老馬、は馬の一歲、絆ニ其足一意、馬の字で音絃又は管である。駅は八歲馬、驩は一日白のもの、駃は靑驪で文の有るもの、 は籀文馬である、騧に似た  は昇字、音祝で馬の後足左白きを云ふ。騭は牡馬、騇は牝馬、駟は馬一乘、嫣は畫馬、驫は音風又は放で衆馬の走る形である。卽ち馬字は主として馬の自然の形體に採つたもので、其性は早く古代から戰

陣用に用ひられた事を示してゐる。乃で古く戎馬、甲馬、駑馬の、毛馬、相馬の別、又野馬（實際の野馬と日氣水氣の野馬と二語ある。）陽馬（水氣の陽馬と建築上の角木の義と二語ある。）等の語が出てゐる。字典に正韻說に馬生レ午火氣、不レ能レ生レ木、故馬有レ肝無レ膽、膽木之精也を引き、又馬地精也とも見える。

馬は陽であるから易の乾である。繋辭傳に乾象レ天、天行健、君子以自彊不レ息、故象レ馬とも見えて名高い句である。一體支那人の生活は、其原始時代から馬の始原地たる西域、大苑等に近かつた爲、非常に馬に密接して行はれた。其が爲馬の消息が古代文獻からして極めて多い。易の中にも馬の記述が隨所に見えてゐて、本經に牝馬之貞（坤卦）乘馬班如（屯卦）白馬翰如（賁卦）良馬童牛（大畜卦）馬壯吉（明夷卦）喪馬（睽卦）馬匹亡（中孚卦）等多くの例が有る。此白馬や乘馬は婚姻時の風俗を述べたもので、其趣が宛ら我古事記八千矛命の越の沼河姫に通はれた時の樣の樣に似てゐて、文化の比較上大變に面白い。上象傳に坤元、牝馬地類、行レ地無レ疆とも見える。說卦傳には乾爲レ馬、坤爲レ牛と云ひ、其馬の類に良馬、老馬、瘠馬、駁馬を擧げ、又坤の方にも善鳴馬、馵足馬、作足馬等を入れてゐる。其他詩經や書經にも馬の記事は非常に

多い。詩經の風馬牛の句など誰も知つてゐる所である。

要するに是等を以て見ると、本年の字義上の年相は頗る多事多望にして將に動かんとするものがある。先づ上の下位である。陰陽に於ては陽性が勝り、方位に於ては西南方、季節に於ては夏秋、易の性に於ては乾である。所謂天行健、無疆で、努力精進男性的の氣に充ちてゐる。且干支共に萬物大いに更改して新成し滿に至らんとし、或は陰柔の氣地を破りて出で、陽剛の氣と相對し、將に雷霆風雨生々大動有らんとする相がある。恰かも山雨來らんとして風樓に滿つるの趣である。併し其動は突發の物で無くて成熟の大過程である。且健行の性は君子自彊不息の形であるから、決して不祥の物では無く、努力に依つて大いに世運を開發する意味があるのである。之を我國家の現狀に按ずると、新年初頭から金輸解禁、議會問題、支那其他の外交問題、政界文教界の廓清問題、倫敦海軍條約、産業問題、不況對策等頗る多事多難の時機に際して、今や國民を擧げて國運の打開に努力しなければならない時である。是れ庚午の年相に頗る一致してゐる次第である。知らず我國民は果して現在に於て是

等の難關を突破して、能く柔剛中和成熟の美果を國家の上に齎し得るであらうか。返す〲も自他相戒めて、全國民が渾身の努力を拂ふ可き秋であらう。

二　馬の古文獻と固有、傳來說

次に馬の語原に就いて考へるに、古記にまだ明かに記した物が無い。古事記に高天原に天斑馬の名見え、出雲の八千矛命の歌の條にも御馬の鞍、御鐙とある。大國主命頃盛んに騎馬の風が行はれた樣子を想はせる。彌豆麻岐神とあるのは水求神で瑞牧神では無からう。牧の語原については別の折に讓る。多くの化生神の中に馬は無いが、書紀には保食神之頂化二爲牛馬一と明かに五穀と共に牛馬の化生した事が見える。又記では素尊の大神の齋服殿の惡行に逆剝とある所を、紀には剝二天斑馬一と記し、一書には單に斑馬とも有る。斑馬は和名抄に駮馬、布知無萬とある物である。實際にも貝塚や古墳から頗る古い馬の土偶が澤山出てゐる。兎に角是で見ると馬は我神代から既に用ひられてゐた事が判る。馬に關する言葉に「う

ま』『むま』『ま』『ふちこま』『くら』『あぶみ』などが存在してゐる。

然るに後の物では馬は百濟傳來で固有の物でないと云ふ說が大分有る。釋日本紀の私記の答問にも此事を擧げて不審としてゐるが、兼方は天斑馬の例を指して以前から多く有つたと斷定した。又和訓栞の如きも仙覺抄の『うまひと』の起原の條に『昔百濟より馬を獻る。いばう耳の物と名く。秦氏の祖乘用を掌り、帝いみじき物として其名を『うま』と定めらる。後生駒山に飼へり云々』とあるを引いて、古くより『うま』と云つた證とし、和名抄に馬、和名無萬とあれば、延喜天曆後『むま』の訓が行はれたが、上總の馬野、辨內侍日記の臨時の祭の御うまの例等に依つて兩訓が行はれたと說いてゐる。仙覺抄の『いばう耳の物』の名は何に依るか明かで無いが、恐らく六月大祓の祝詞に『高天原に耳振立て聞物と馬牽立て』と有るに因んだ名であらう。『いばう』は『嘶ゆる』の訛である。祝詞に依れば『耳振立て聞物』と云ふ名が考へられる。尙祈年祭詞には白馬、白猪、白鷄とあり、馬爪とも言つてゐる。（白馬は平安時代白馬節會等には『あをうま』と呼んだ。）又秦氏の祖は應神帝十四年に弓月君の歸化の時と見え、帝とは此

朝らしい。語義はいみじき物と愛で『うま』と呼んだと言ふのは、稱美の意、甘美の意の『うま』である。古語に佳人、美酒、美少女、愛孫（蘇我馬子も此意、後世馬方の馬子とは別語である。）甘し物阿倍橘等の例に見る『うま』である。叉栞の谷川說の『うま』『むま』の先後や、延喜天曆以後說も問題である。

馬の百濟傳來については本居翁の古事記傳にも、古宇馬の註に『和名抄に駒、古麻、馬子也と云ふも、古は馬を古麻と云ふ事多しと。牛馬は百濟渡來說有り、後漢書にも我國牛馬無と記せれど八千矛命の御馬あり』とて、紀をも引いて神代固有說を示してゐる。釋紀の兼方と同樣である。是は如何にもさうで、高天原の逆剝の條や六月祓の祝詞の趣を見ても、馬は牛と共に我國に固有の物と見える。無論其起原地は大陸と思はれるが、其渡來は地理的にせよ人文的にせよ、非常に遠い太古地質時代の事で神話時代よりも更に古く、其點で固有の物と十分に言へるのである。保食神の化生神に牛馬が見えるのは既に農耕用、家畜として用ひられた意味の文化的神話である。支那に古く武獸軍用として用ひられたのと對して比較上面白

い。其上百濟傳來と云ふ事も餘程疑はしい點が有る。百濟の入貢は神功皇后紀の四十七年を初とするが、之より先九年の三韓征伐に當り新羅王が馬梳、馬鞭の貢を上り、捕虜を飼部とした事が見えてゐて、貢馬としても新羅の方が早いのである。加之貢馬は貢物の例で有るから、必ずしも馬の我國に入つた最初と見る事は出來ない。

古語の例には記に馬御樴連、馬來田國造、馬婚、馬棺等、紀に騘馬、驛、馬迹、續紀に馬形、牧等、姓氏錄に馬工連、延喜式に近江馬見岡社、馬路石邊社など、三代實錄に御廐中央御玉神などが尙多くある。餞を馬の鼻向と云ふ事も奈良平安時代盛に用ひられた。萬葉集には勿論種々の用法が發達し、乘馬の風が盛であつた。馬足、馬乘衣、馬買、赤駒、馬籬越、馬並、龍馬の如き、又冠詞に馬じ物(縄取附けて、立て躓き等に接す)の表出も行はれた。戯訓に馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿と五動物を訓んだ中に断聲を取つた例も有る。馬聲を『い』と云ふにしても、今の様に『ひん』と言ふにしても『うま』の名が此擬聲語に出た物で無い事は明かである。是等の文献上のみならず、實際古土器や金器、埴輪馬、土偶馬等の出る工合から見ても、我國に馬の

太古から存在した事は全く明瞭な事實である。馬の語原も亦固有の國語に求めなければならぬ。

三　馬の諸國語比較と語原考

尤も馬の語原に外語說が隨分ある。韓語說、支那語說等が其である。其方から見ると相當類似した點も無いでは無い。(一)蒙古語 Mori (Muri) (二)滿洲語 Morin (三)韓語 Mat (Mas), Mar (麗語なり。末の訓。乘馬を轄打と云ふ。)(四)支那語 Ma (Mak) の如く、兩語系共 Mo 又は Ma の音が國語に似てゐる。(五)アイヌ語では Umma である。牛は Peko で波士語であるが、此方は國語から入化したものらしい。序でに印歐語を見るに、(一)梵語は阿濕縛 As'vadjit で、涅槃經に四馬の譬喩があり、婆伽羅は長毛である。(二)佛語の Cheval (三)英語の Cavalry は此類系語である。普通の(四)英語の Horse は(五)A・S語の Hors (六)I・L語の Horss から(七)獨語の Hros, Ross に類系し(八)獨語の Pferd (九)英語の Palfrey (十)伊太利語

の Paraveredus (十一) 希語の ἵππος は其中間性の語形である。(十二)希語 Pegasus は有翼の天馬で、ヘリコン山上に住する神話上の馬であるが、丁度其と似て漢書西域傳には大宛國高山に五色の天馬が居る事を記し、龍馬の思想も支那に古く傳つた。(十三)羅典語は Equus で稍希語の形に近く(十四)佛語の Equestre, Equipage と同系語である。其他(十五)英語の Pony (十六) Ross に近い Ass 等がある。印歐語を通じて、ツングス語や支那語の特長である m 音が見えない事、p、s、q 音等を探る事は著るしい對照點である。

倭『うま』の韓語說若くは漢語說は ma 音に類似點はあるが、同じ字音語の牛が韓語 Syo, 漢語 Riu で、共に全く關係が無い所から見ると餘程難かしい。韓語の mar の語義は何に出て居るか、其性質は丁度支那語と蒙古語滿洲語との中間に在る樣である。國語の『うま』に類似した語には前に言つた(一)甘美の『うま』(阿行のウ音初)(二)生、産の『うむ』(末行のム音初)と(三)馬の『うま』、『むま』、『こま』、『ま』がある。『うま』の語は元來此阿行音であるか、末行音であるか。古語の趣から見ると、(二)と同じく末行の脣音即ち『むま』を原始形とするらしい。牛

の『うし』は全く口音で之と異つて居る。從つて『こま』の語も小馬の義と云ふが、牛、犬等に小犬の語が有つて、『こし』、『こぬ』と言はぬと趣が異つてゐる。(因に駒、小馬の名は支那の月令に見えて古く、又一說には胡馬の音語で、牛を胡水と書くと同じとも云ふ。)『ま』は『うま』、『むま』の約形で必ずしも漢語に出た物ではない。そして『むま』が原形であるが、此三形語共餘程古代から行はれた樣子が見える。(三)末行語の例には『むめ』(梅)、『むもる』(埋)、『むし』(虫)等がある。是又執れもm音が漢語と共通して居るけれども、漢語に出た語では無い。

然らば『むま』の原義は何であるか。祝詞に見える『耳振立て聞物』では語形が大分離れてゐる。但耳や『もの』は關係が有る。第一に(一)のム音なる『生む物』の古語名詞法ァ音形かと言ふに、馬に小馬の義で『こま』の語が愛用せられた所などは此義が適當であるが、其等は家畜語としての起原であるから、原義は尙古い意味でなければならぬ。同じ家畜語の『うし』を見るに、言海等の大獸の轉も如何。栞には勞又は大肉の義と云ふ。古事記に諸神の化生神に飽咋之宇斯神、患之宇斯神の名が見える。之は併し牛神では無く、後、漢語の大人に當て

ゝ大人と云つた『うし』で、其義は定めて領有者の畧語である。牛の方は野生生活に於ける角鬪の様などから『押し物』の畧であらう。犬を嗾す『うし〳〵』又は『おし〳〵』の語なども此點に關係がある。第二は耳の物の義である。祝詞に出てゐる上にム音初にも都合可いが、馬の原始的の命名としては不自然でもあり、音韻上も左迄容易でない。乃で第三に野生的の意味では『む』は群の意である。野馬が比較的に群生した動物として人間に接した時代の思想であらう。睦む、慣むが群連む、慣連むの意有るを見れば、『む』に群の意有るは至當である。群の語からは古く『村』の語が名詞形に出てゐる。尤も此群も其起原を生産とすれば結局第一の義と一致するのであるが、馬の名の發生したのは群れたる野獸としてゞあらう。英語の Horse の語原は走る物、或は swift の意である。

次に『ま』であるが、獸名に『ま』の附く物に熊、猫ま等がある。（猫又又は猯 多は猿の類）是等も馬の『ま』と同じく、毛物、鬪物、馬じ物などの『もの』を畧約して名詞形にしたものであらう。熊は黑物か組物、猫まは泣音物又は泣兒物である。即ち『むま』とは群物の義で、群馬の野生狀態

に名けたものと思はれる。「うま」は共音便語形で、「ま」は「むま」の重音約形であらう。

七　正月朝儀の今昔と政治的意義

一　正月朝儀の制定

我國宮中の御儀に就ては、國家政治の大本として最も重要の意義が有る事は申すも畏い事であるが、其が爲其儀禮に就ては維新以來十分に鄭重にせられ、殊に最近明治四十一年、大正十五年、及び昭和二年の皇室令の制度に依つて、愈々之が完成を見る樣になつたのは國民として最も喜ばしい次第である。勿論朝儀の諸制定も時代に適應す可きものであるから、上代より中世に及び近古を經るに從つて幾多の變遷があつた上、時世の消長隆替に依つても激しい變動を見たのであるが、其諸時代に適應した長い沿革を通じて見る時には、其の上に大切な政治的意義が有り、我國家獨特の國體の精華が此儀禮を通じて現はれてゐる事を知るの

である。形式こそ大分變つてゐるが、今日の整美した諸儀禮を思ふにつけても、之を昔の古儀古制の趣に對照し比較し、之が眞精神を追憶する事に依つて益々今日の儀禮の完美を期する事は、獨り國民の自覺的精神を高める所以であるのみならず、國家の政治上より言ふも極めて必要な事である。其の意味に於て今日の正月朝儀の趣を古儀に比べて多少の卑見を述べて見たいと思ふ。

正月の御儀として一般に祝祭日とせられてゐるのは、一日四方拜、三日元始祭、五日新年宴會の三式であるが、此の外正月の朝儀として行はせられる儀式には、四日の政始式、八日の觀兵式、九日の朝覲（こうきん）の行幸、廿日前後の御講書始、新年御歌會等がある。新年百官の拜賀は一日及び二日に行はせられる。今謹んで皇室祭祀令を按ずるに、小祭中に歳旦祭一月一日とあり、大祭中に元始祭一月三日と見えて四方拜の名は祭名として舉げられてゐない。此の大祭、小祭の別は主に宮中御式の輕重に依つて定められたもので、大祭は同令第八條に『大祭ニハ天皇、皇族及ビ官僚ヲ率ヰテ親ク祭典ヲ行フ』と見え、小祭は同令に『小祭ニハ天皇、

皇族及ビ官僚ヲ率キテ親ラ拜禮シ、掌典長祭典ヲ行フ』と規定されてゐる。卽ち二祭の別は一は御親祭をせられるとし、一は掌典長祭祀して御親拜をし給ふの別が有るのである。奉仕者についても大祭には前日及び當日二日間齋戒するが、小祭には當日丈けの齋戒で可い事になつてゐる。因みに大祭には元始祭の外、紀元節、神武天皇祭、神嘗祭、新嘗祭を初めとして春秋皇靈祭、同神殿祭や、先帝祭、前御三代の式年祭、先后の式日祭など十五祭を定められ、小祭には新年祭、天長節、賢所御神樂、前御三代の例祭、歷代天皇の式年祭等が定められてあるから數は甚だ多い。此の外に準大祭、準小祭の式もある。

共で歲旦祭及び元始祭は共に宮中三殿(賢所、皇靈殿、神殿)に於て順次に行はせられる。祭祀令に依ると『歲旦祭ノ當日ニハ之ニ先チ四方拜ノ式ヲ行ヒ云々』と見えて、四方拜の御儀は陛下の皇居に於ける獨立の儀式に成つてゐる。更に新年宴會は大正十五年皇室令第四條に『新年宴會ハ一月五日云々宮中ニ於テ之ヲ行フ』と見えてゐるが、無論明治初年から賜宴の儀を行はせられる事に定められてゐた。政治式、觀兵式、御講書初、新年御歌會等は祭式では無いが、

夫々明治時代から古儀と諸外國の風に則られて御定めになつたのである。

二　四方拜の儀

偖昭和の新らしい御代に是等の諸儀の行はれる趣を窺ひ奉るに、一日の御儀としては、先づ宮城に於て四方拜の儀を行はせられる。聖上陛下には早朝未明に御身禊の事有り、五時卅五分掌典長御先導して宮城庭上の日拜所に成らせられ、天地四方並に神宮山陵を拜せられて國家の安泰を祈り給ふのである。朝の御饌に屠蘇白散御餠などを召される樣である。次で九時半よりは宮城鳳凰間に於て新年拜賀の儀を行はせられる。天皇皇后兩陛下出御、先づ皇族方の拜賀を受けせられ、御一同陪隨して正殿に臨御、十時及び十一時の二回に文武官の拜賀を御受けになる。午後一時半には各國大公使等の拜賀の式があり、更に二日には同殿に於て文武官三階以下の拜賀を受けせられるのである。此の間一日には午前宮中三殿に於て歲旦祭の儀が行はせられるのである。乃ち一日の朝儀としては四方拜の儀、拜賀の儀、歲旦祭

の儀の三儀か重なるもので、先づ四方拜の御儀に歳旦に於ける主人の大御心の御祈念が有り、之より發して政治上には群臣の爲に拜賀式を擧げさせられ、祭事としては三殿に歳旦祭の儀を行はせられるのである。併し一般の祝祭日名としては四方拜と云ふ事になつてゐる。此の儀が元朝の皇室の御儀として如何に大切なものであるかが良く判るのである。又斯樣に大切な古儀を傳へる上からも、如何にも日本的な畏い御名である。國民が元朝に若水に身を浮め氏神鎭守に詣でゝ一家身命の祝福を祈る心持の大原泉として十分に尊重す可き儀式である。但し元旦の祝祭の總名としては、元初の意が無いのと（元始祭に見えるが）諸儀を含めての通意が無く、祭とも節とも附さぬのは名目として如何であらうか。

　四方拜は此の樣に新年初頭の大儀であるから、二月の紀元節及天長節と共に三大節として行はせられ、全國の學校官衙及び一般國民に至る迄奉祝する。昨年より明治節も三大節に準じて行はせられる事になつたから四大節である。外國に於ても奉祝される。其について各國共國祭日の制定があるが、我國に於ては國體上格別其制定は無い。三大節或は四大節何れも

重い國祭日である。併し最も取判けて言ふならば紀元節の二月十一日であらう。世界各國の國祭日を見るに建國日に依るもの十八國、君主大統領の誕生日に據るもの九國で前者の方が多い。紀元節の儀は最も重大と思はれる。更に國家起原の儀に溯つて思ふに伊勢神宮の御儀が特に國祭日に無いのは如何であらうか。神宮の祭の大祭小祭に見えるは、皇靈祭を除くと神嘗祭、祈年祭のみで、大祭として特に神靈を祀る事は、神宮の御儀には素より多いが、國家的には定められてゐない。是は他の神社よりも特別に國祖の大神の御祭祀として國家國民の祭日にお祀りするのが宜しくは無いかと思ふ。我國の國祭日としてはさう云ふ祭日や紀元節が益々壯嚴鄭重に奉祝されなければならないと思ふ。序でに一言したいのは我帝都たる東京を初め都會地の風習に多い事であるが、大晦日の徹夜的仕事や二日の初賣の爲に、元朝は各戸殆んど戸を閉鎖して休眠を貪り、偶々起き出る者も正午近くに風呂入などし着流しで街路を歩くなど非常に醜い事である。是等は漸次風俗を革めて是非元朝は國民一齊に早起し潔齋して新年を奉祝し、朝儀に四方拜を設けられた本意に副ふ様にしたいものである。

三　元始祭と政始式

三日の元始祭は正月の御儀中大祭に入つてゐる唯一の朝儀である。宮中に於ては天皇陛下親しく賢所、神殿、皇靈殿に出御祭拜の事を行はせられ、掌典長祝詞を奏し、主上御告文を宣られて、神祇皇靈に新年國政正始の由を申して御祭りになるのである。謂はゞ一日の歳旦祭が宮中の神事を主としたのに對して、元始祭は政治上の朝儀として表立ちて行はれ、國民一般に大祭日として奉祝するのである。御裝束も正月の儀式中四方拜と此の儀とは黄櫨染の御袍を召され、皇族方諸臣祭官も皆衣冠單である。此の儀は實に明治維新以來の創設に成つたもので、近古以前の古儀に其の名も事も無いのである。元始の語は易などに言ふ太始の語と同じく、年曆の一新更新を意味すると共に、古く一日の儀を元正賀と云ひ、又三日迄を元三と稱へたのに因んでゐる。私かに思ふに此の儀を三日に立てられたのは、明治新政の敬神の風を揚げられたと共に、之に依つて新年朝政の發端とせられ、依つて以て祭政一致の國風

の本旨を彰かにせられたものであらう。

四日の政始式は皇室儀制令に依り東二間に於て行はせられる。元始祭に次ぎ國務の統治を新たに執り行はせられる御儀である。之も後に記す様に昔の奏事始や政始の儀とは大分趣を異にし、四日に統べ治められる事にしたのは、新時代に於ける政治の形式を整へられたのである。此の日は總理大臣以下主なる文武官參設、主上出御あらせられ百官を視給ひ、總理大臣及び宮內大臣より二事の奏聞が有つて式を終る。二事とは神宮及び宮內の廳務である。是は神宮山陵等に關し政務として至貴のものであるからで、其の趣意は元始祭の本旨を實際に現はしたのであらう。此の奏書に就ては稍々卑見を申し述べたい。總理大臣の神宮奏事でも、宮內官奏事でも、官位姓名奏として次行に漢文で昨年中所務の滯無く行はれた趣を記し、終は候事と結んである。此形式は近年自ら先例が有る事であらうが、奏文の形式として少しく禮式を缺いてはゐないかと思ふ。古い形式に奏—事の形式も見えるが、多くは次に係結びの敬語がある。殊に候事の句は現在官衙の公文では多くは上司の下すもので、幾分命令的の語氣を

含んでゐる。其等と性質の異つた奏事の文にしても、之は神宮廳や宮内官の上申を以聞する奏文であるから今少し形式を整ふ可きものである。遂行の字句も如何であらう。之は大禮使會議にも用ひられてゐるが、古例に宜い出典があらうか。昔の左丞抄等にも太神宮について被レ遂ニ御造進ニ者等は二三見えるが遂行の句は無い。遂行では普通の事柄らしく考へられる。尚適當な語句があるならば其に依りたいものである。奏事の事項も去年の事務のみの點も熟慮を乞ひたい様に思ふ。昔の行事にも去年の事奏が見え、又實際政務上其の要があるであらうが、新年政始の御式であるから、神事官事と共に新年の政務について奏聞する例を開かれたら如何であらうかと愚見の儘を叙べて置く。参照迄に公式令の奏事式を見ると次の様である。

太政官謹奏

某司位姓名等解狀云々謹以申謹奏

年　月　日

太政大臣位　臣　姓
左大臣位　臣　姓
右大臣位　臣　姓
大納言位　臣　姓名

総の謹以申聞謹奏とある點などが大切である。昔の奏事文が官位のみ署したのに、今の公文に官位勳爵功等こちたく記すのも稍煩はしい感がある。政始式の奏事を見るにつけても、上古の出雲國造の神賀辭などは、其の精神形式は餘程參考とす可きものであらう。

因みに太神宮奏事につけて太神宮の元三の御儀を延喜式に見るに、元日には諸宮の禰宜内人等が各神宮を奉拜して白散御酒を供進する。訖つて御厨に集り宮司、右等の宮人及び神司郡司等を率ゐ、先づ度會宮を遙拜し、次に太神宮を遙拜し、次に諸宮を遙拜し、後に朝拜を行つて賜宴がある。三日には早旦に齋宮に拜賀の儀が行はれる。今は齋宮は止められたが舞供の儀式などは大方大差が無いであらう。

五日の新年宴會は昔の豐樂の儀に依つたものであるが、豐明殿に於て皇族、外國使臣、勅任以上の文武官千餘人を召して宴を賜はる儀である。此の日は午前十一時過陛下が出御遊ばされ、先づ皇族方大公使前官禮遇者に謁を賜はり、一同供奉して式場に臨御の上一同最敬禮中に御起立で賜宴の勅語を宣られる。訖つて總理大臣が群臣を代表して奉答を申し上げる。次に首席外國使臣が各君主を代表して祝賀の奉答を申す。之に於て玉饌を召され皇族外國使臣に賜宴、一同豐明殿及び千種間に於て酒饌を拜受する。軍樂が行はれ、聖上陛下は一時前に入御し給ふ。此の日は奉答文でも外國使臣が頗る鄭重で長文に申上げ、賜宴の次第が餘程外國との御交誼を主眼とせられる趣に拜される。古儀に較べて時代の進歩した大差點である。此の日皇后宮には各皇族妃殿下を召され、御內宴を催される。又夜に入つて有爵者等數百人を豐明殿に召され、皇族を臨ませられて賜宴の儀がある。聖代の旺んな盛儀であるが儀制の次第などは昔よりずつと簡單になつてゐる。愚按を述べると此の朝儀の名目の新年宴會と云ふも如何であらう。宴會の字句は小野宮年中行事にも見えるが、今は此の名は民間にも

行はれてゐて稍紛はしい感がある。賜宴豊樂の儀賀宴の儀を體して適當の節名がありはしないかと思ふ。

次に御講書初や新年御歌會の儀については後の折に讓る事として、九日に行はせられた朝覲の御儀については、國民一般に深く孝道の大御心を體しなくてはならない。此の日兩陛下宮城を出御大宮御所に皇太后宮を御訪ひ遊ばされ新年の拜賀を申される。今此儀名は存して居ない樣であるが、新年の御儀として誠に目出度い事である。

四　古記の朝拜式

是等の朝儀に就いて古儀の趣を對照して見るに、先づ其の資料としては奈良以前の古い所では記、紀、續紀、大寶令(淸原夏野の令義解參照)等がある。併し令の神祇令等は此の方面に餘り儀制が規定されてゐない。平安朝に入つては儀制が大いに整つたので、弘仁式四十卷、同格十卷、貞觀格十二卷、延喜格十二卷等が數次修められたが、式は逸して類聚三代格に格が傳つてゐ

る。格とは式の實例であるから全部を窺ふには便りが惡い。其には弘仁十二年右大臣冬嗣等七人に詔して勅撰された内裏式(三卷)がある。諸式の宣命を記して良いものである。是も天長十年右大臣清原夏野等四人が增修してゐる。之と共に貞觀中の儀式十卷も平安朝時代の典據となつたもので、令に次いで名高い延喜式五十卷も儀制の條は皆之に則つてゐる。延喜には此の儀式を改修した新儀式五卷も成つたが今は正月の條等は殘缺本である。攝關家の私撰には承平頃迄見える九條年中行事や右大臣實資の小野宮年中行事があり、西宮抄、北山抄や匡房の江家次第や鳥羽院の時藤原重隆の圖した雲圖鈔及び本朝月令なども此の方面で名高い。鎌倉時代には順德院の禁秘御鈔が宮儀を網羅して最も標準に成つてゐる。但し正月の朝儀等については多く記されてゐない。同じ親撰で後醍醐天皇の建武年中行事も有名である。假名文で宮儀の樣が頗る詳細に叙べられてゐる。謂はゞ禁秘御鈔は月日に關しない宮中の諸儀故實の靜的記述であるが、建武年中行事は之に反して一年中の月日に配して、具體的の模樣を記した事實的動的の有職書である。鎌倉期の年中行事歌合も好い書である。此後京都時代の初

に一條兼良の公事根源が出てゐる。此の書は月毎に分類されて近代に都合の良い書とされてゐるが、內容は殆んど建武年中行事の儘で、只其を項目を立てゝ幾分考證的に記した迄である。兼良の若い時の著であるが其の學風や又時代の學問の有様なども窺はれる書である。

偖右等の古記の趣を見るに、正月の朝儀なども奈良時代以前はまだ後世の行事の様には一定し整備しなかつた。無論唐制などが這入つてから大に修備したので、弘仁式等の成る迄は極めて自然的に御代々々で其の儀を擧げられたのである。先づ元旦賀正の儀は日本書紀にも國初から見えてゐる。神武天皇の元年辛酉年元旦には橿原宮に卽位の大禮を擧げられ、美眞手命が宮庭に入つて天瑞を奏した。定めて賜宴の儀も行はれたであらう。元旦拜賀の古俗が矢張り古くからあつたのである。此の天瑞は御父饒速日尊が中國へ下る時、天照大神から十種の天璽瑞寶を賜つた事に兆してゐる。天瑞奏は此後長く傳つて近古迄行はれた。卽位眞都の大儀が元旦に行はれるのは、一方から云ふと又政事始であつたと云へる。是から垂仁天皇の朝には元年正月二日に卽位式があり、卅七年正月元旦には立太子の儀が行はれた。大和

時代の此の頃迄は立太子式は皆元旦の佳節に行はれてゐる。即ち上古から元旦拜賀豐樂(とよのあかり)の風、政始式が形式のみならず國務の大事として元旦又は二日から行はれ、立太子式は殊に元日を擇んだ風が著しく見えてゐる。年の初に對する皇室國民の目出度い心持が好く彰れてゐる。元旦の心理は此の樣に、實に悠久な時代から深く我國民性に根ざしてゐるのである。

其後孝德天皇の大化二年正月には元旦賀正の事が明かに見え、式後名高い改新の詔を宣示せられたのは元旦政事始の著しい例である。飛鳥時代には又天武天皇四年元旦に大學生歸化人等が薪(まき)を進る事見え(從說)、同五年正旦の朝賀には服杖等を賜ひ、朱鳥元年正月二日には大極殿で賜宴し、詔して無端事(よしなごと)を問はれ答申者に賞を賜はり、持統天皇三年元旦には萬國を前殿に朝賀させ、二日大學寮で杖八十を獻じ詔を宣られた事などがある。是は今日の外國使臣拜賀の古例であらう。續紀に見える奈良時代に入つては是等の朝儀は漸く整頓せられて、元朝の拜賀賜宴、五日若くは七日の豐樂(とよのあかり)、十六日の踏歌(たうか)賜宴の儀など其の例が略一定するのを見た。此の間大寶の儀制令に少い乍ら見える正月の規定を窺ふに、拜賀廻禮の規定には『凡元

日、不レ得レ拜ニ親王以下一、唯親戚及家令以下不レ在ニ禁限一、若非ニ元日一有レ應ニ致敬一者、四位拜ニ一位一、五位拜ニ三位一、六位拜ニ四位一、七位拜ニ五位一、以外任レ隨ニ私禮一』とある。即ち元日の朝賀は親王以上に限られ、二日以後は有位者の關係や私禮の風習をも認めてゐる。地方官の元旦は『凡元日、國司皆率ニ屬僚郡司等一向レ廳朝拜、訖長官受レ賀、設レ宴者聽、其食以ニ當處官物及正倉一充、所レ須多少從ニ別式一』と定めて、拜朝後國司の賀宴を許してゐる。是等は今も大方變りが無い。又祥瑞については大瑞は即時奏上する事になつてゐるが、元旦の瑞奏には『上瑞以下、並申ニ所司一、元日以聞』と見えてゐる。尚萬葉集卷十七には天平十八年正月、白雪中に橘左大臣等諸卿が太上天皇の院に拜賀し、賜宴の間雪の題を下された歌が載せてある。其の中

新らしき年の初に豐の年瑞すとならし雪の降れるは

とあるは葛井連諸會の詠である。

五　中世以後の朝儀

次に平安時代以後最も整備した朝儀の樣を内裏式を主として述べて見よう。此の式に定められた朝儀は非常に精しく出てゐるが、式の項目は後世のものより少い。式に見える正月の御儀は（一）元正受群臣朝賀式（幷會）（二）七日會式（三）八日賜女王祿（十一月同）（四）上卯日獻御杖式（五）十六日踏歌式（六）十七日觀射式の六項丈けである。延喜式の頃も未だ少い。此の式には（一）元日朝賀、奏賀奏瑞、賜宴叙位（二）七日給祿（三）八日後十四日迄大極殿最勝王經齋會の三項のみである。最盛期である寛弘期の枕草紙には（一）元日（二）七日白馬節會（三）八日女叙位（四）十五日餅粥の節供（五）除目（六）御齋會（七）五節句の記事など、流石に女流らしい行事を主にしてゐる。末期の雲圖抄には（一）正朔四方拜事（二）御藥事（三）小朝拜事（四）五日叙位事（五）八日女叙位事（六）上卯日御杖事（七）十四日御齋會內論義事（八）十八日賭弓事（九）除目事の九項を圖示し、四方拜や御藥事など新

に取立てゝゐる。以上の諸式を通じて平安時代の正月朝儀に見えるのは十三項許りである。

鎌倉時代の禁秘御抄には先に言つた様に正月の御儀としては、賢所や諸陣の月奏に關係の記事はあるが、其の他に餘り記されてゐない。其の方面では年中行事歌合などが良い。此歌合には（一）元日（屠蘇白散、小朝拜、朝賀、奏賀奏瑞、氷様、氷池祭、腹赤）、（二）二日（臨時客、楽器饗、御遊、若水）、（三）七日（白馬節會）（四）十一日（視告朔）（五）八日後十四日迄（御齋會）（六）八日（女叙位）（七）縣召（八）十五日（御薪）（九）十四日（男）十六日（女）（踏歌）（十）十八日（賭弓）の様に、十四日の男踏歌を入れると十一日の朝儀に、十七項の行事を番歌にしてゐる。前代より新らしく起つた譯では無いが、詠み出た行事に別なものを入れたのである。此末期の徒然草にも門松の事や、後七日の阿闍梨の條に御齋會の儀に盗賊が這入つたので武士を用ふる風を難じたり、珍らしく左儀長の事を述べるなど、正月行事の上にもクラシック趣味の漸くに衰へて行く趣を洩らしてゐる。建武年中行事には元日の儀が最も詳しく記されてゐる。（一）元日（四方拜、御藥、小朝拜、節會、七曜御曆、腹赤宴、賜宴、

立樂、宣命）（二）二日（二宮大饗）（三）三日（吉書、殿上淵醉）（四）五日（叙位議）（五）七日（白馬節會、叙位記）（六）卯日（卯杖）（七）八日後十四日迄（御齋會、眞言院御修法、大元法、女叙位、內論議）（八）九日（政始、吉書奏）（九）十一日後三日（縣召）（十）十五日（御粥・杖打）（十一）十五日後（御祈始、河臨御祓）（十二）十六日（踏歌）（十三）十七日（射禮）の如く行事の日十三日、御儀の項やがて卅一項にも上つてゐる。公事根源は此の儀に依り更に增補したので、(1)元日（內侍所御供）(2)上子日（供若水、子日遊）(3)二日（朝覲行幸）(4)三日（視告朔）(5)四日（御國忌）(6)十八日（觀音供）(7)廿一日（內宴）(8)廿五日（國忌）、(9)三十日（御贖物）(10)火災御祭、代厄御祭などを加へて卅九項を網羅してゐる。併し其起源は他の古典的の行事と同樣に、皆平安朝の中期以前に在るのである。

六　內裏式の四方拜と拜賀

內裏式には四方拜の儀が載せてないが、是は初に記した樣に朝儀よりも主上の御親祈の儀

が主眼であるからである。其儀の大要を記すと、早旦清涼殿の東庭に御屏風を立て西東南の三御座を設け、北に香爐造花燈火等を備へる。追儺訖つて主上御裝束御笏御草鞋にて出御藏人頭以下候す。先西御座で北向に屬星の名を唱へ再拜遊ばして呪を申す。其の呪は『賊寇之中過度我身云々百病除癒所欲隨心、急々如律令』と六句の護身呪である。次に東御座で北向に天を、西北向に地を、又東から四方を御拜あり、次に南御座で二陵を兩段に再拜遊ばされて後入御せられる。雨天の節は射場に設けられ、幼帝の時は只庭上鋪設の儀許りである。按ずるに此御儀は唐風の陰陽道や佛敎の儀を大分加味されて、所謂拜天の風に依つて行はれるのであるが、我國風から考へて見ても神武以來の朝儀に、必ずや元旦主上が出でゝ天地群神を御拜あらせられた風を承述されたものであらう。此後夜明けに日御座に於て屠蘇白散を上する。之を御藥と云ひ三日迄行はせられる。主上の御直衣御生氣の服(當年生氣の方の色衣)で御前に陪膳、典藥頭、後取の座、左方石灰壇に女藏人二人の座を設らへ、蓋藥子、藥子等がある。典藥頭侍試み主上に上り後皆賜はる。御齒固とて民間の雜煮餅の如き儀も此の間にある。訖つて藏人

(職事)關白以下射場殿に候ふ旨を申して小朝拜に出御を奏す。主上勅許の後御束帶靴で清涼殿(雨天仁壽殿)に出御御倚子に召され、皇太子傍の第二間敷に坐し、群臣仙花門より入つて東庭上に公卿、四位五位、六位と三位に並んで拜舞する。藏人頭は今の侍從長の樣に出入總べて供奉する。拜舞は後にも出るから言つて置くが、實は拜と舞踏と二義である。拜とは笏を持ち左膝を突き次に右を突き据りて冠を地より三寸迄首を下げて禮するのである。舞踏は時に依つて二拜を以てする事と本義の時とある。本義の舞踏は笏を置き立乍ら左右左足を開き、据つて左右左足を開く。同時に左を見右手を左袖端上に左手を左袖下内に入れ、右の時は右方を見て同樣にし、又左方にする。天子の禮は右左右である。舞踏は主上の外には上皇、國母の外は用ひない。他は二拜を以てする例である。其他神事は兩段再拜、佛者法皇は笏を置いて三禮する等の定めがあつた。一體小朝拜は上古群臣參賀の風に發して、臣等が私に元朝主上の宮庭に拜する儀である。延喜中一度止められたが間も無く再興した。朝賀は此の風を公けの朝儀として定められたものである。

朝賀は又、拜賀とも云ひ、式後の節會と合せて元日節會とも云ふ。其の様今日よりも餘程盛大である。二日前より大極殿に高座（たかみくら）を設け、皇后の御座は高座東幔後に、皇太子座は昭訓門の南廊西に設ける。庭上には銅烏幢、日月像幢、朱雀旗等を立て、奏賀奏瑞行立位（奏賀は西に奏瑞は東に設け、一丈五尺を隔つ）宣命位、太政大臣位、親王位以下蕃客位（外國使臣）を設けるなど全く今の御即位式の趣である。卯四刻（九時頃、後世には午後の事もある。）内辨の大臣（一の大臣を節會に内辨と云ふ。）昭訓門より入つて幄舎に就き、諸門鼓を打つて章德、與禮二門を開き、大伴（左）佐伯（右）兩氏門部三人宛を率ゐて會昌門（大極殿前の正門）上に就き、門部は門下に坐す。辰一刻（十時）主上は輿で後房（小安殿と云ふ）に御着、皇后又御輿で御入、行儀の様近衛命婦や侍從納言など頗る美々しい。次で内辨大臣再び諸門の鼓を打たせ、皇太子初めて幄下の座に就かれ、群官順次版位に參入し、警衛の諸使内舍人と、伴佐伯二氏起立す。次に親王顯親門より入り、蕃客は治部玄蕃引いて會昌門より入る。春宮謁者（後の春宮大夫）皇太子を導いて幄を出で青龍旗下より銅烏幢の北に至り位に就く。斯くて主上は袞服を召されて高座（たかみくら）に出御、命婦四人禮服で御前に仕へ座下に立ち、還る。皇后は禮服を召されて

婦奉仕して後座に就かれる。此の時鉦を打つ三點、二九の女孺萬御座の左右より扇を奉り、褰帳命婦二人(三位以上内親王とす)御帳を褰げ初めて龍顔を拜す。執杖者警蹕し一同磬折し(立禮の事)諸仗は坐す。次に主殿、圖書の史各二人左右から出で香爐を焚く。典儀が再拜と云ふ。皇太子再拜をし訖て謁者先導し、皇太子中階を升つて御座の前に北面し、跪いて賀詞を申す。其詞に

新年の新月の新日に萬福を持參來て拜供奉らくと申す。

とある。皇太子を拜して起ち、中階を下ると謁者先導して位に返り再拜される。其時勅して侍從を召され、侍從稱唯して御座の前、太子の時と同位に跪く。(稱唯は唯を稱すの訓法例、好古日錄等に見える。臣下等が『をゝう』と應へる事。)詔に

新年の新月の新日に天地と共に萬福を平く永く受賜れと宣る。

侍從敕を承けて稱唯し拜伏して立ち、東階から下つて宣命使位に就き、西向に宣制をする。宣命使は侍從とあるが、後世には參議などが豫め任ぜられて、內辨が奏して宣命を承る事になつた。此の宣命の宰相は、往返に大臣にも禮しない事になつてゐる。宣制は所謂宣命

文の形式で、先づ

天皇が詔旨らまと宣ふ大命を聞賜と宣る。

皇太子唯稱し再拜す。宣制又續けて

新年の新月の新日に天地と共に萬福を平く永く受賜れと宣る。

玆で皇太子唯稱し再拜し、更に舞踏再拜の禮をされる。侍從(宣命使)還つて殿に上る。典儀が再拜と云ふ。皇太子再拜をされると謁者先導して幄舍に復る。青龍旗の下に行く頃典儀再拜と言ふ。賛者承次ぎ百官再拜す。訖つて奏賀奏瑞者が共に位を立つて進む。奏瑞者は馳道より左兵衛陣の南を北に階を升り行位に就き、次に奏賀者版位に就く。是は四位の者に就き豫め定めて置く。奏賀の詞には

明神と大八洲御す日本根子天皇が朝廷に仕奉る親王等王等臣等百官人等天下百姓衆諸、新年の新月の新日に天地と共に萬福を持參來て天皇が朝廷を拜仕奉事を恐み恐みも申賜と申す。

と見える。段位に返ると一同再拜する。次に奏瑞者位に就いて
治部卿位姓名等申く、某官位姓名等が申せる某の物、顧野王が符瑞圖曰云々、孫氏が瑞應圖曰云々と云へり。此瑞を瑞書に勘るに某物は上瑞に合へり。某物は中瑞に在へりと申せる事を恐み恐みも奏し給くと奏す。
と奏して段位に退く。勅して
參來。
と宣ふ。奏賀者稱唯して位に就く。勅を賜つて
供奉親王等王等百官人等天下百姓衆諸、新年の新月の新日に天地と共に萬福を平く永く受賜はれと宣る。
と宣ふ。稱唯して位に復り後退して階を下り、奏賀者宣制版位に留り奏瑞者は本列に入る。
訖つて宣制して
明神と大八洲御す日本根子天皇が詔旨らまと宣ふ大命を衆聞食よと宣る。

と申す。王公百官稱唯再拜す。更に續けて

供奉親王等王等百官人等天下百姓衆諸、新年の新月の新日に天地と共に
萬福を平く良く受賜はれと勅ふ天皇が詔旨を衆諸聞食よと宣る。

王公百官稱唯再拜し更に舞踏再拜する。此の時武官一同起立し旆を振つて萬歳を唱へる。宣命使が本列に復る迄振つてゐる。萬歳の聲は謂すと言つて陰り聲に唱へる。乃で典儀が再拜と言ふと、贊者が傳へて百官又再拜す。此の時侍從が進んで御前に至り跪いて

禮畢ぬ。

と申し位に復る。乃で鉦を打つ三點鼓を擊て帳を垂れ、主上皇后後房に入御。諸門鼓を打つて百官初の如くして退出し兩氏門を閉ぢ諸衛鉦を打つて陣の警衛を解き、一同豐樂殿に移る（大極殿の西にあり）。後代には大極殿が燒失したので、內裏の南殿即ち紫宸殿で此儀を行はれた。又建武年中行事などに依ると是から行ふ節會の方を先にして、宣命使の儀を後にしてゐる。此の奏瑞は去年の事を申すのであるが（今の政始式の如し）節會の外任奏や七曜御曆、腹赤奏、氷樣など

は今日の政始式の性質のものである。

七　內裏式の豐樂殿饗宴

豐樂殿饗宴の儀は南面に御座を設け、西第二間に皇后御座、東第二間に皇太子御座(西向)がある。次第に三四間去つて親王以下參議以上の座があり、以下顯陽、承歡兩堂に坐す。兩陛下皇太子の御酒器は東廊第二三間に置かれ、升殿者の酒器は顯陽堂に、不升殿者のは承歡堂に置く。御饌及び賜饌は預め供へて置く。(弘仁五年以前は御座の後に供へた。)饌の物には古式に菓子、雜餅、御飯、新味、和羹等、臣下に肴、菓子、飯、羹と見え、建武行事には晴御膳(はれのごぜん)四種八盤に側御膳(わきのおぜん)あり。之に盛る物に黏臍、饆(ひつ)、饠、餲餬、桂心等が特別の物で、餛飩、索餅などは通常物とされてゐた。羹は進物所、御厨子所の調進で鮑汁とし、飯汁等が終に供される。中務が尋常版位を殿前に、其北一丈許に宣命版位を設けて式に移る。主上清暑堂を出でゝ豐樂殿に出御、皇后又御出あり、少將左右兵衛以上槍を杖く。御座定まり內侍大臣を呼び大臣稱唯(しょうい)す。左近

陣西に到り謝座(二拜する事)し、東階より上つて著座す。次に皇太子階を上り西向に謝座し謝酒(二拜する事)して著座す。所司豊樂(正門)儀鸞(中門)の兩門を開く。其の前掃部が闈司座を逢春門に設け、闈司二人青綺門より出でゝ南北に坐す。乃で大舍人が門外に來て呼ぶ詞に

御曆進らんと中務省官位姓名等(輔以上)門に候ふと申す。

闈司位に就て奏す。勅有り。

申さしめよ。

闈司座に復り、傳宣して云ふ。

姓名等を申さしめよ。

大舍人稱唯す。是に於て中務陰陽寮を率ゐ曆の机を荷ひ、逢春門より入り机を庭中に立てゝ退出する。輔以上一人留つて奏し上げる。其の詞は

中務省奏さく、陰陽寮の供奉れる其年七曜御曆進つらくを申し賜へと奏す。

之には勅答が無い。中務卿親王の時には奏詞に少差がある。奏者退出し闈司等机を荷ひ、東

階より升り、南榮に立てゝ降り西側に立つ。內侍が函を開きて奏覽し訖つて机上に返す。（暦は御所に留めらる。）闈司机を荷ひ返し、內豎逢春門より入つて持出し陰陽寮に渡す。次に又大舍人が門外で呼び、闈司が版位に進んで奏す。

氷様進らんと宮內省官姓名門に叫ぶ故に申す。

勅有り、

申さしめよ。

闈司之を傳へる。此時省の丞以下史生以上と主水司官人以下と共に氷様を荷ひ、太宰使又同樣にして腹赤御贄を荷ひ、輔が伴つて同門を入り、庭中に置いて一同退出、輔一人位に進んで奏す。其の詞は

宮內省申さく、主水司の今年收めし氷合せて若干室、厚さ若干寸已下、若干寸已上、去年より益る若干室、去年より減る若干室供奉れる事、又太宰府の進れる腹赤の御贄長さ若干尺進らくを申賜へと申す。

是れ勅答は無く奏者退出し、膳部、水部等承秋門より入つて氷様、腹赤を取つて退出する。乃で内辨大臣更に舎人を呼ぶこと二回、舎人稱唯して逢春門外に候し、少納言替つて同門より入り位に立つ。大臣命じて侍従を呼ぶ。少納言稱唯し儀鸞門から出て呼ぶ。親王先づ稱唯し、次に參議三位以下五位以上稱唯し、三位以上は一列に成つて同門の東扉より入り、五位以上は東西二列に成り東西扉から入る。此の時衛士諸使は起立する。中で皆二列に分れて整列する。大臣命じ一同稱唯し謝座（二拜）の禮がある。次いで造酒正、空の盞を把り第一人に授け共に跪いて授受す。乃で二三丈退り北面して立つと群臣一同謝酒（二拜）の禮を行ふ。訖つて次第に升殿し、五位以上東西に分れて座に着く。少くして所司御饌を十人宛（東西五人宛）供し近衛諸仗起立し、皇太子以下群臣座を起つ。大膳職次五位以上の饌を益供へる。酒部は八人で酒樽下に立ち、行酒者盞を把つて升殿者に賜ひ、次いで不升殿者に賜はる。盞一周の頃（後世三獻の後）儀鸞門外で吉野國栖が歌笛を奏し御贄を獻る。（外客有る時は國栖歌を止む。）次に大歌がある。別當一人勅に依り、東階を下り儀鸞門を出て歌者を呼ぶ。一同稱唯す。別當引率して二列となり入り、大

舍人等鐘鼓臺を庭中に入れ、掃門同門より入り鐘臺の南に坐す。歌者立位に着く。鐘三點動三丁ありて歌奏し訖つて退出す。掃門同門を出で臺を返す。次で又歌座を立て治部雅樂、工人を率ゐて參入歌を奏す。（是も外客有れば止む。）訖つて退出す。宴の終際に內藏、縫殿兩寮延明門より入り衣櫃を庭中に置く。內記が宣命文を大臣又は中納言以上に授ける。外記は見參侍從交名を進つる。大臣之を取つて進つり內侍受けて奏覽し、宣命使たる者參議以上一人を備び、宣命文を授けて座に返る。此の時皇太子座を立たれ、親王以下東階を下り一同堂前に列す。宣命大夫同階を下り、版位に就いて宣制す。

天皇が詔旨らまと宣る大命を衆諸聞食せよと宣る。

皇太子先づ稱唯し、次に親王以下一同稱唯す。訖つて皇太子先づ再拜次に親王以下再拜す。

續いて勅に

今日は正月朔日の豐樂聞食す日に在り。又時も寒きに依りて御被賜はくと宣る。（寒天には又の下「雪も降り」の句を入る。）と傳へられる。乃で皇太子先づ稱唯し、次に親王以下一同稱唯し、更に皇太子先

づ拜舞し、次に親王以下一同も拜舞をし座に着く。中務大小輔机を荷つて大輔は北扉より、小輔は南扉より入り、櫃の東西頭に立ち、內侍先づ御被を取つて皇太子に賜はると太子先づ再拜する。（後には稽顙と云つて只首を屈する丈けとなる。）次に中務名を呼んで親王以下に賜はり、一々再拜 、顯陽堂の南を通り延明門から退出する。群臣の祿が訖ると所司餘物を內侍に獻ずる。其には女史が名を呼んで內命婦等に賜はるのである。賜饌も命婦等は殿上に於てした。建武行事の頃は親王中納言等は賜宴は奧座と言つて別席に設けられ、酒の役も內侍が當つてゐる。此の元日節會は餘程大切とせられたので、天應以前奈良時代には廢朝の折でも元日節會丈けは催された事が見え、延曆以後にも朝賀には必ず賜宴が行はれた。風雨天には朝賀は止められたが、三日以後になつても賜宴即ち節會丈けは必ず行はれたのである。勿論之が今日の新年宴會に當る朝儀である。即ち昔の朝賀式は今日の元日拜賀と新年宴會と政治式とを一緒にした樣な盛儀であつた。若し此の日上卯に當れば朝賀前に御杖を獻上させた。之は紫宸殿で行はれる。此の節會に稍似てゐるのは三日の殿上淵醉である。是は三日に日御座に吉書の儀が行はれ其

の後で殿上に藏人頭以下殿上人丈け宴を賜はり、朗詠二首今様一首の後亂舞（居乍ら舞ふ。頭三反す。）あり、主上蔀より御覽になり、訖つて中宮に候する風である。

三日の元始祭に近い行事では元日の內侍所御供（毎月あり）、四月廿五日の御國忌、八日後の御齋會、眞言院御修法などがある。御齋會は殊に後七日法と云ひ、阿闍梨は東寺の長者で、又興福寺別當の內論義が行はれた。初は大極殿で行はれたが近世は太政官廳で行ふ事が多かつた。眞言院御修法や此後七日法には今日行はれる東寺の御衣奉修の儀の根源が早くから見えてゐる。三日の視告朔と云ふは餼羊の告朔と異り、百官の行事や上日（出勤日）を記し、月旅奏覽するのである。又九日の政始は紫宸殿で無く太政官の廳で行はれた。其他七日の白馬節會、十六日の踏歌節會、五八十一日の叙位除目などや、又子日の遊び、若菜など風俗に關するものも、今に較べて色々の方面から興味の深い朝儀であるが、又他日の折に讓つて略して置かう。

八　古今朝儀の比較

以上の儀式を見ても明かな通り、昔の朝儀は今日の其と比較すると、種々の點に於て可成り重大な特色を示してゐる。其著るしいものを擧げて見ると、（一）主上を現神として貴ぶ風強く、皇室の尊嚴最も高き事。何れの式行事に於ても天皇の御儀が最も直接に重大に現はれ、宣命の體と云ひ、朝儀の風と云ひ、今日よりも主上に對して最も現人神としての儀が明かであつた樣である。其と共に皇室尊嚴の儀も如何にも鄭重に十分に儀式の上に表はれてゐる。是を見ても奈良時代にあつて、其の醇乎とした萬葉歌や祝詞宣命が文學界に出たのは決して偶然でないのである。（二）皇后の御儀皇太子の儀も非常に重立ちて公けに行はれ、殊に皇太子の儀が最も重大に諸儀の上に見えてゐる。元日の節會の如き其好例であらう。太古から此の日立太子式を行はせられたのは、此國風の基く所の頗る深いのを示してゐる。（三）朝儀毎に宣命（詔勅）奏聞の風も今日より非常に多く、實際的に行はれてゐる。さう云ふ場合にも奏者宣制者は比較的下級者で直接大臣では無い。常に間接的に二重三重の官を經て行はれる。門の出入等も一々上に奏し勅許有りて呼入れるのである。其間接な丈け鄭重の度が增す。今日總理大臣

が主となり、凡べて直接に主上に對するのとは雲泥の相違がある。奏聞でも大分簡略になつて較々疎略の感さへ起すものもある。因みに此事について思ふのは、今日紀元節等の御儀に見える外臣の奉答語の譯文例である。殆んど敬語を省いた形式になつてゐるが、是等は如何にも不注意の事共で、更に鄭重な敬語文體に依るべきである。

(四)一般に朝儀が今日よりも壯重雅美であつた。時間なども長く掛け上下共事に心身を打入れて丁寧美的に行つた。無論クラシツクの時代で風俗全般にさうであつたが、其には當時の人心百官の心持に前に言つた樣な忠誠、敬直の情が餘程篤かつた所が原因してゐる。それがやがて朝儀と言はず、當時の政治上にも一種の美風を保たせたのである。上代から貴族時代にかけて此美風はずつと續いたのである。(五)一般に國政は元日から活潑に行はれた傾がある。元三は平安朝から、松の内の風は殊に近代からである。(六)外交關係は著しく少かつた。一二の蕃客が有るのが珍らしい位である。外國史にも見える通り互に附屬國視してゐたから、其待遇なども微々たるものであつた。是は今日に比して大分性質が異り、小規模であ

つたが、其の代り全く純日本的の朝儀が行はれたのである。

右の樣に昔と今の朝儀の上には、(前者)は國風が强く保たれて、人中心で、心的の性質に富んだものであり、(後者)は洋風などが大分加味されて、事中心で、形式的の性質が著しく多くなつてゐる相違がある。古今互に長短があるが、今日の傾向には動もすると形式に流れて眞情、精粹を失ふ樣な失がある。無論今日の儀式は上代の朝儀の段々精練された形式に成つてゐるので、其の改廢の上には容易ならぬ苦心が注がれてゐるのであらうが、今後尙時世の進步と共に益々內容を充實し、形式運用を整へて、上中古の朝儀に見た樣な大精神、大形式が滂礴する樣に、之が美化を圖るの要は十分に有るのである。

現代國文學講話　終

昭和十年三月十一日印刷
昭和十年三月十五日發行

「現代國文學講話」
【定價金貳圓】
（送料六錢）

著作者 酒井衡平

東京京橋區西八丁堀一ノ四齋藤ビル
發行兼印刷者 加藤新

東京京橋區西八丁堀一ノ四齋藤ビル
印刷所 新聞雜誌印刷社

東京市京橋區西八丁堀一ノ四齋藤ビル
發行所 文松堂